

学生研究助成金論文集

19

萩島 大河

—宮内省の雫—

多加 蝶加

当事者研究の語りのテキストマイニングによる分析

A textmining analysis of the narrative in self-helping studies

和光大学・かわ道楽研究班 代表者 八幡 敬士

岡上の自然環境

—キャンパスにある自然を管理する意味—

遊び種～たんぼっぼ～ 代表者 小関 涼子

生活圏を意識した地域子育て支援と大学の連携の可能性

—岡上こども文化センターにおける親子ムーブメントの実態—

宮嶋 隆輔

黒い翁・三番叟の語り

—古戸田楽の翁を再考する—

中田 雪野

研究ノート 〈山の神〉像を追って

—資料の読みとフィールドワークを中心に—

わたしたちの
論文集

2011

 和光大学

学生研究助成金論文集

19

わたしたちの
論文

2011

 和光大学

目 次

委員長講評	1
—宮内省の隼—	3
萩島 大河	
指導教員のコメント 松村 一男	17
当事者研究の語りのテキストマイニングによる分析	19
A textmining analysis of the narrative in self-helping studies	
多加 蝶加	
指導教員のコメント いとうたけひこ	35
岡上の自然環境	37
—キャンパスにある自然を管理する意味—	
和光大学・かわ道楽研究班 代表者 八幡 敬士	
指導教員のコメント 堂前 雅史	63
生活圏を意識した地域子育て支援と大学の連携の可能性	65
—岡上こども文化センターにおける親子ムーブメントの実態—	
遊び種～たんぼっぼ～ 代表者 小関 涼子	
指導教員のコメント 大橋さつき	87

[縦組]

研究ノート 〈山の神〉像を追って …………… 1 (146)	
—資料の読みとフィールドワークを中心に—	
中田 雪野	
指導教員のコメント 山本ひろ子……………29 (118)	
黒い翁・三番叟の語り……………31 (116)	
—古戸田楽の翁を再考する	
宮嶋 隆輔	
指導教員のコメント 山本ひろ子……………58 (89)	
和光大学学生研究助成金規程…………… 148	
和光大学学生研究助成金事務取扱要項…………… 149	
和光大学学生研究助成金委員会規程…………… 150	
学生研究助成金委員会……………奥付	

「わたしたちの論文」題字 本学名誉教授 川添 修司

委員長講評

2011年度学生研究助成金委員会

委員長 西岡 久充

和光大学の「学生研究助成金」は、他大学ではほとんど見受けられない和光大学独自の伝統的な制度であるといえます。大学院生のみならず、学部学生をも助成する制度は、数ある大学の中でもきわめて稀であり、学生の主体的な研究を支援するために非常に有用であると考えています。

2011年度の学生研究助成金研究報告会は、2011年12月7日（水）15時より、B棟205教室で開催されました。今年度は6件の応募があり、委員会での審査の結果、6件すべての研究が採択されました。個人名・研究グループと報告テーマは以下の通りです。

- 1 萩島 大河
間で「対話」する日本人・隠された暴力性

- 2 遊び種～たんぽぽ～
「生活圏」を意識した地域子育て支援と大学の連携の可能性
—岡上こども文化センターにおける親子ムーブメント教室の実際—

- 3 宮嶋 隆輔
古戸田楽「さんばそ」詞章の研究

- 4 和光大学かわ道楽
キャンパスを包むモノ～あなたの足元にある自然～

- 5 中田 雪野
「山の神」を巡る考察—昨年度の研究成果と今年度の計画

- 6 多加 蝶加
総合失調症を中心とした当事者研究のテキストマイニング分析

各報告は、しっかりとした準備がなされ、質疑応答では教員からだけでなく、学生同士の積

極的なディスカッションが行われていました。ただ、開始時間に参加者が集合できなかつたり、資料の用意が間に合わなかつたりしたため、報告会自体の開始が遅れたことは残念でした。配布資料などは事前に準備・提出されておく必要も感じました。

それぞれの研究内容については、本論文集をご覧ください。また、各研究の講評についても、指導教員の先生方のコメントをご覧ください。前述の報告テーマからもわかるように、研究内容が多岐にわたるとともに、様々なアプローチがなされており、非常に興味深いものとなっています。また、多くの研究が前年度からの何らかの継続的な研究であったと思われる。そのため、委員会の審査では、継続性のなかでのオリジナリティについても注視しました。その結果、すべての研究がフィールドワークや実態調査などの体験や活動にもとづいており、それぞれオリジナリティの高い研究であることが確認されました。この点に関しては、学生の皆さんの努力だけでなく、指導教員の先生方のきめ細やかなご指導があったことが想像できます。

今後は継続的な研究だけでなく、新しい研究が出てくることを期待する一方で、やはり継続的な研究を後輩に引き継ぐことも良い伝統だと感じています。そして、研究を引き継いでいくなかで、新しい研究に派生することも期待しています。また、学生研究助成金という貴重な制度をより多くの学生に知ってもらい、来年度から学生による主体的な研究がより活発になることも期待しております。そのためには、学生への告知も一層必要になってくるでしょう。

最後に、和光大学学生研究助成金は和光同塵会（和光大学同窓会）の寄付金も含まれています。同窓会から現役学生へのご支援に感謝するとともに、引き続き、和光大生の主体的な研究へのご支援、ご協力を賜りたく存じます。

— 宮内省の隼 —

2012年1月31日

10T044 萩島 大河

第1章 はじめに

日本には古来より、猛禽類を調教し、狩りを行う、いわゆる鷹匠と呼ばれる人々がいた。一口に鷹匠と言っても、時代により各人が想像しうる鷹匠像は多岐に渡る。それは、彼等を取り巻く環境が大きく変化し続けたという点と、彼等の技術面の変化に関係があると思われる。

猛禽類を調教する人間は、時の権力者の配下に属する傾向にある。現代でも鷹狩が盛んなアラブ、イギリスの歴史を見ても同じことで、王族の娯楽として鷹匠たちが猛禽類調教のため、配属されていた。

日本の場合、それは天皇家からはじまり、武家、将軍家、そしてまた天皇家と配属先を変化させてきた。これは、彼等が配属先を変えたというより、配属先のほうが変化したと言ったほうが正しいだろう。つまり、権力者が変われば、次の権力者が鷹匠たちを抱えるようになるのである。これには鷹狩が持つイメージ、つまり権力や威厳の象徴としての意味合いが多く含まれていると考えられる。猛禽類は世界的に見てもシンボルマークとして

使用される割合が高いのは確かであり、日本の歴史にとって鷹匠を抱えるというのは、一種の絶対的ステータスになっていたのかもしれない。

このように鷹匠たちは、国や政治と深く関係する位置にある。つまり鷹匠を研究するというのは、その時代の政治を考えるに等しいのではないか。今回取り上げる宮内省の隼も然りであり、この時代の隼を考えるというのは、昭和という時代に、日本人がどのような思考で行動していたのかという問を考えるに等しい。

論をはじめる前に、幾つか記しておかなければならないことがある。それは、この論文で使用する鷹とは何を指しているか、ということである。鷹匠たちは、一つの種類に限定して鷹と呼ぶのではなく、自身が調教している品種を総称して、鷹と呼ぶ傾向にある。

日本の鷹匠たちが使用する猛禽類は大鷹 (*Accipiter gentilis*) が基本である。そのため、一般的に鷹と書く場合は、大鷹を表していることがほとんどである。ただし、別の種類の猛禽類、今回の論文で大きく取り上げる隼 (*Falco peregrinus*) や、小型の鵟 (はいたか *Accipiter nisus*) などを表す場合でも、鷹と呼ぶ場合

がある。それには、大鷹こそが鷹匠の鳥であり、そのほかの猛禽類は所詮大鷹の代用品、という風潮が元になっているように思われる。そのため、文脈がややこしくなるのを防ぐために、今回の論文では鷹と一文字で表現する場合は、大鷹を示すことにする。

このように鷹匠たちが使う専門用語は、一般的には知られておらず、また、誤解する元となってしまうため、上記以外の言葉の問題についても本文で触れつつ考察していきたい。

第2章 鷹匠の歴史と諸問題

① 日本における猛禽類調教の起源と、最初に調教された鳥に対する考察

猛禽類を調教し、狩りを行う人物が日本の正史に登場するのは、仁徳天皇の時代からである。日本書紀（注1）によれば、

「依網屯倉の阿弭古、異しき鳥を捕りて、天皇に献りて曰さく、「臣、毎に網を張りて鳥を捕るに、未だ曾て是の鳥の類を得ず。故、奇びて献る」とまうす。天皇、酒君を召して、鳥を示して曰はく、「是、何鳥ぞ」とのたまふ。酒君、対へて言さく、「此の鳥の類、多に百済に在り。馴らし得ば、能く人に従ふ。亦捷く飛びて諸の鳥を掠る。百済の俗、此の鳥を号けて俱知と曰ふ。」とまうす。是、今時の鷹なり。乃ち酒君に授けて養馴む。幾時もあらずして馴くること得たり。酒君、則ち草の縉を以て其の足に著け、小鈴を以て其の尾に著けて、腕の上に住居て、天皇に献る。是の日

に、百舌鳥野に幸して遊獵したまふ。時に雌雉、多に起つ。乃ち鷹を放ちて捕らしむ。忽に数十の雉を獲つ。是の月に、甫めて鷹甘部を定む。故、時人、其の鷹養ふ処を号け、鷹甘邑と曰ふ。」

とある。以上を踏まえて今後の論考に必要な部分だけを取り出しまとめると、以下のようになるだろう。

1. 仁徳天皇の時代、日本で鷹は認知されていなかった。
2. 始めて鷹を調教した人物は酒君という者。
3. 酒君が調教した鳥は百済では俱知と呼ばれており、それは現在の鷹を指す。

酒君とは百済（現在の朝鮮半島にあった国家）から日本に帰化した人物であると考えられおり、今も大阪に「酒君塚」という古墳が残されている。

日本書紀よりも以前に書かれた書物の中で、猛禽類を調教し狩りを行った者の名前は記されておらず、まして鷹匠にあたる人物の模写はない。つまり酒君こそが、日本ではじめて猛禽類を調教した人間であり、最初に飼われた猛禽類は鷹ということになるのである。

これに対しての私の考えを、徐々に述べていこうと思う。

酒君が依網屯倉の阿弭古から鳥を預かるよりも前に、調教された猛禽類の気配を文脈から感じ取ることが出来る。それは、古事記（注2）に記された垂仁天皇の物語の中で描かれている。

「故、その御子を率^ゐて遊び^{さま}し状は、尾張の相津にある二侯^{ふたまたすぎ}楹^{ふたまた}を二侯^を小舟^{ぶね}に作りて、持ち上^{のぼ}り来て、倭^{やまと}の市師^{いちし}池、輕^{かる}池に浮かべて、その御子を率^ゐて遊び^{さま}き。然るにこの御子、八拳^{やつかひげむね}鬚^{さき}心の前^まに至^まるまで真言^{まこと}とはず。故、今高^く往^くく鶴^{こゑ}に音^ねを聞^ききて、始めてあぎとひしたまひき。ここに山邊^{やまべ}の大鶴^{おほたか}を遣^ははして、その鳥を取^とらしめたまひき。」

これは、髭が伸びても喋ることがなかった垂仁天皇の息子、皇子^{ほむちわけ}本牟智和氣の物語である。一見すると論考と関係のない物語のように見えるが、鷹の習性を知っている者ならば、この物語にどこか違和感を感じる。

大鶴という人物は、名前からして鷹を擬人化した人物だと考えていいだろう。また、その働きによって後世に名前が変化した者（鷹のイメージにあった働きをした、など）と考^{かん}えてもいいかもしれない。つまりどちらにしろ、鷹からイメージを受けた名前という事になるだろう。そうなると、酒君の時代に鷹をはじめて調教したのなら、大鶴は鶴（白鳥）を追うことが出来ないのである。なぜならば、野生の鷹は、白鳥を滅多なことがない限り狩りの対象にしないのである。理由として考えられるのは、白鳥は体が大きく、飛行するための力も強い大型鳥類だということだろう。

日本の鷹は、全長が雌の場合約56cm、雄では約50cmに対し、白鳥はオオハクチョウが約140cm、コハクチョウでも約120cmもある。もし鷹が攻撃を仕掛けた場合でも、白鳥が反撃に出る可能性は十分にありえる。また、反撃を受けた場合鷹が負う傷は相当なものになってしまうだろう。危険を負わずとも、野生の

鷹のまわりには中型の鳥類が生息しているのだから、そちらを狙えばよいのである。

鷹は鷹匠が調教を施してはじめて、自身よりも大型の生き物を襲うようになる。

つまり、古事記に書かれた大鶴の行動は、鷹を調教し白鳥を狙わなければ想像し得ない物語なのである。

ただし、絶対に野生の鷹が白鳥を襲わないとは言い切れないのも事実である。危険を承知のうえで狩りを行わなければならない状態が、もしかしたら発生するかもしれない。また、実際に鷹で狩りを行わずとも、鷹が白鳥を襲う場面を想像する可能性もないとは言い切れない。今後この問題に関しては、鳥類学を応用した調査が必要となってくるだろう。

さて、そろそろここでの本題に入っていきたいと思う。それは、大鶴とは本当に大鷹のことなのかである。

山邊の大鶴は、白鳥を追ってかなりの範囲を移動することになる（注3）。

「本^{きの}國より針間^{はりまの}國に到り、また追^{いた}ひて稻羽^{いたばの}國に越^たえ、すなわち巨波^{たにはの}國、多遲^{たちまの}麻^ま國に到り、東^{あづま}の方に追^めひ廻^{めぐ}りて、近^{ちか}つ淡海^{あふみの}國に到り、すなはち三野^{みのの}國に越^こえ、尾張^{おの}國より傳^{つた}ひて科野^{しなの}國に追^おひ、遂^こに高志^{こしの}國に追^おひ到りて、和那美^{わなみ}の水門^{みづかど}に網^{あみ}を張^はりて、その鳥を取^とりて持ち上^{のぼ}りて獻^{けん}りき。」

普通、大鷹をつかった鷹狩では近くの獲物を狙いその場で決着をつけるため、もし失敗して追った場合でもそう遠くまで行かない。しかし、隼はこれと逆である。遠くの獲物に狙いをつけ、遠くまで追いつけることが可能なのである。

つまり山邊の大鶴の行動は、大鷹というより、隼に近いのである。そして、隼でも白鳥を捕えることが可能なのだ（大鷹と同じで、野生の隼は白鳥を狙わない。鷹匠の隼だからこそ狙う）。

日本ではないが、隼をつかって白鳥を獲った記録が『放鷹』（注4）の朝鮮放鷹史の中に記されている。『放鷹』（注5）によると、高麗の時代、海東青という隼（これは隼の名前ではなく隼の種類の名だと思われる）（注6）が、白鳥を獲ったという記録が記されている。

海東青は当時とても重宝され、身分が高い人間しか持つことが許されていなかったようだ。そこから考えるに、山邊の大鶴と海東青の共通点は、どちらも身分の高い人間に命令され動いているという点だろう。山邊の大鶴が隼をモチーフにしたかどうかについては、まだきちんと論じられるほど情報が集まっていないのが現実である。ただどちらにしろ、調教された鳥から得られるイメージが元になっているという考えは立てられる。

先程も書いたように、今後山邊の大鶴については、海東青含めて、鳥類学、歴史学的な考察が必要となってくるだろう。そしてその答えが、日本の猛禽類調教の起源を考える上で、とても重要なキーワードになると私は考えている。

最初に調教されていた猛禽類はなんだったのかを考えるに欠かせないのは、俱知の正体である。酒君は、百濟では俱知と呼ばれる鳥類の調教が盛んであると発言している。そもそもこの俱知とはなんなのか。『放鷹』には朝鮮の鷹狩として、鷹や隼を使用した狩りが記されているが、俱知については書かれてい

ない。日本の鷹匠の歴史を考えるに重要な資料となるため、今後現地に出向きフィールドワークを実施する必要があるだろう。

しかし日本書紀から少なからず、俱知がどんな鳥だったのかを考察することは可能である。1つに、狩りの場面から推測することが出来る。酒君は、調教した俱知で雌雉を数多く獲ったと書いている。

日本では雉は昔から「鷹の鳥」と呼ばれ、獲物の中でもランクが高く重宝されていた。しかしここでポイントになるのは、「忽に数十の雉を獲つ」という部分である。

鷹はどんなに優れた鷹であっても、一度に一羽しか狙わず、一羽しか仕留めない。一日に何度も狩りを行うことは出来ても、一回につき一羽である。

しかし酒君の俱知は、一度に何羽もの雉を獲ったと記してある。一度に何羽をも仕留められる可能性があるのは、隼だけである。隼は上空から一気に加速しながら落下し、獲物を蹴り殺す。隼は大鷹と違い、一羽に相手を絞るということをしな。自身の力が切れるまで攻撃を繰り返すことが、調教次第で可能となる。

この狩りの場面で、俱知が隼を示すという僅かながらの可能性が出て来た。

次に、調教の場面を見ていく。

酒君は俱知に鈴をつけている。これは、その後の日本の鷹匠たちが継承していく物で、大鷹の尾羽の中央にある上尾（一般的に鈴付と呼ぶ）と呼ばれる尾羽に鈴を装着する。鈴だけを付けるのではなく、鯉の頬骨（鰓）などを加工して作った鈴板の上に装着する。これにより、鷹が離れても鈴の音を追えば、鷹を見つけ出すことが出来るのである。

しかし、隼にはこの鈴を装着しない。鷹の場合は離れても林や近くの木にとまるため鈴の音を追うことが出来るが、隼は何キロも先に飛んで行ってしまいうため、鈴の音を追えない。そのため、鈴を装着する意味がないのである。これは隼の調教技術が高いアラブ、イギリスでも同じことで、この二国でも隼に鈴をつけることはない。

以上から、俱知が大鷹であるという可能性が高いことが考えられる。

しかし、現代の満州族の鷹匠が、隼の足に鈴を装着して飛ばしていたことが資料(注3)からわかっている。また、ハンガリーの鷹匠が、隼に鈴をつけ飛ばしていることもわかっている。ただし、中国は文化大革命があったため、鷹匠の技術が正しく継続されたかどうかは疑わしく、ハンガリーも同様に、鷹匠たちの伝統がはっきりと資料からは見えてこないため、まだ確認の必要がある。

今まで出て来たポイントを押さえた上で可能性として考えていくと、鷹を調教して、一度で沢山の雉を獲るよりも、隼に鈴を付けて飛ばす意味を立証するほうが、筋が通っているだろう。ではもし俱知が本当に隼ならば、日本書紀ではなぜ鷹と表記したのか。また、なぜ隼をつかった獵は、以後江戸時代まで表舞台に立つことがなくなるのか。

考えるに、隼ではいけない理由があったからなのではないだろうか。それは隼別の物語と等しく、隼人しかり、古代の日本人が隼に対して持つ嫌悪感の表れなのではないだろうか。ではなぜ、日本人は隼に嫌悪感を抱いたのだろうか。それに関しては論理があいまいである。

エジプト神話では、隼は侵略神や戦争の神

として登場する。またアジアの国々でも、隼は侵略のイメージを持っているという。隼から得るイメージに偏りがあるのは確かである。このイメージに対しても、今後研究を続けていきたい。

先程の論考に戻るが、日本書紀のやりかた、つまり隼に特殊な調教を施し、遠くに飛ばないようにしつけることが出来たならば、あの鈴は意味をなしてくるのである。つまり、海外のように高く飛翔させてから狩りを行う(おもにアラブやイギリス)のではなく、中空に上がり次第すぐに狩りをはじめ、または、限りなく鷹匠の近くの獲物を狙わせれば、鈴は大きな意味を持ってくるのである。つまりそれこそが、日本特有の上げ鷹獵の原点なのではないだろうか。

② 天皇家から武士、そして将軍へ。

上げ鷹獵について考察する前に、酒君から宮内省までの間を埋めていかなければならない。以下、鷹匠の歴史を3つに分けて、鷹匠たちが各時代どのように動いていたか、また、隼たちはどのように扱われていたのか、簡単ではあるが、まとめていくことにする。

1. 天皇家と公家の時代

日本書紀にも書かれていたように、日本ではじめて出来た猛禽類調教用部署の名前は、鷹甘部という。

その後文武天皇の時代に入り、大宝律令が発令されると、鷹甘部は放鷹司と名前を変える。養老律令発令後は、名称が主鷹司へと変わり、兵部省に属ようになる。鷹や犬などを調教する宮司であり、長官は主鷹正、主典は主鷹令史と呼ばれていた。ただし、このリー

ダーたちが実際に鷹狩りに関わっていたかどうかは不明である。

時代が進むごとに鷹狩の需要は高くなっていき、猟場の確保、保管が必須となっていく。そこで生まれたのが、禁野と呼ばれる狩猟区域であり、一般人は入ることが許されなかった。この時代から、鷹狩の場を保管するという考えが出始める。

また、鷹狩に対する学問的需要も高まっていき、嵯峨天皇によって『新修鷹経』という日本はじめての専門書が書かれる。内容は、鷹や隼や鶴をどう調教するか、または、飼育の際に発病した病気をどう治療するのかを記した、猛禽類専門書のような物だった。

この時代に隼を使用したのは、きちんとした記録に残っているのは仁明天皇だろう。錦子池での鷹狩の際、隼をつかい、水禽（どの種類か断定することは残念ながら出来ない）を捕らえた記録が『放鷹』（注7）に残っている。

2. 戦国時代

天皇家や公家が支配していた鷹狩も、中世に入ると武家の物となる。そのため、鷹匠たちも各武将の下に付くことになる。

戦国時代では数々の武将が鷹狩を好み、そして新たな体制を作り出していった。数多の武将たちが鷹狩を行ったが、武田信玄、織田信長、豊臣秀吉らが一番目立つところだろう。彼等は自ら独自の鷹狩ルールを制作している。

武田信玄は、家臣が抱える鷹匠たちの数を制限した。

織田信長は、自身の狩場の立ち入りを禁止し、周りで鉄砲を使うことを禁止した。

豊臣秀吉は、鷹狩に使用する鷹を他大名たちに献上させるルート、ルールを制作した。

彼等がどこまで鷹狩を楽しんでいたかはわからないが、一方で鷹狩には政治的意味合いが当時から多く含まれていた。

鷹狩によって捕えた獲物を天皇家に献上するほか、自身が持っている鷹場を歩くことにより、地域民に支配者としての威厳を見せつけることが出来たのだ。

また、鷹狩によって立体的な合戦シミュレーションを行うことも可能だった。

技術面において、もっとも鷹狩に精通したのは織田信長だろう。彼は馬の陰に入り、獲物に見つからないようにそっと近づくと鷹狩をおこなっている。野生の鳥たちは警戒心が強く、鷹だけでなく、いつもと違う人間を見ただけでも警戒してしまう。そのため、馬の陰に隠れて近づき、一気に鷹を放つのである。獲物についても鷹狩戦略についても精通していた織田信長が、鷹狩に関する本を残してくれたならば、日本の鷹狩はかなりの進歩を遂げたであろう。

残念ながら、この時代の隼については、はっきりとした資料がない。この点から考えるに、鷹狩につかう猛禽類は大鷹、というような概念が生まれ始めた時代と考えていいだろう。

3. 江戸時代

江戸時代の鷹狩／鷹匠研究を行っている専門家は数多くいるため、あえて自らページを割くようなことはしない。そのため、ここでは江戸時代の特長をまとめて掲載していく。

1. 鷹匠は集中して将軍家に雇用されるようになる（藩でも少しばかり鷹匠を雇って

いた)。

2. 鷹の流通を政治的に利用していた。将軍家から鷹を進呈されることは名誉であり、認められた証拠でもある。
3. 鷹狩を人工的に演出する方法が考え出される。獲物を人工的に集め、狩りを成功させるために細工をするなど、様々な工夫が施された。

江戸時代の鷹狩の特長は、やはり演出技術にあると思われる。狩場となる畑の整備や、近隣住民への演出命令、または獲物を別の場所で捕獲し、狩場で放鳥するなど、様々な演出が施された。

鷹狩で鶴を捕獲することが一代イベントだったことも、演出技術向上、つまり見栄えを大切にした鷹狩への変化の一つのように思われる。政治性と娯楽性は表裏一体であり、江戸時代はより簡単により面白く、そして失敗が少ないように再構成された鷹狩の時代と考えていいだろう。

さて、江戸時代に隼の調教は、一気に飛躍を遂げる。

鷹匠にも幾多の流派がある。それは鎌倉時代に一度爆発的に増え、江戸時代において、ある程度の完成を見たように思われる。当時将軍家に雇われていた鷹匠は、吉田流と諏訪流という流派によって、大きく二つに分かれていた。

諏訪流は、信州の諏訪大社で行われていた神事(贄鷹の神事)を取り仕切っていた一族が生み出した流派だと考えられている。

一方吉田流は、江戸時代に最盛期を迎え、技術的にも完成し多く普及した流派だと考えられる。

その吉田流の祖でもある吉田多右衛門が発案したのが、隼をつかった上げ鷹狩である。

諸説あるが、これ以前の隼をつかった狩は、基本的には抜き打ちと呼ばれるやり方だったと考えられている(鷹と同じように隼を投げた獲物に向かわせるやり方)。

しかし吉田氏はそうではなく、一度隼を飛ばしてから狩りを行う方法を考えた。

鷹ざいと呼ばれる道具(采配とよく似た道具で、棒の先に紙が結ばれている)を使い、隼を上空に上げていくやり方と考えられる。

この上げ鷹狩は、日本の隼調教の歴史を大きく変える結果となった。

抜き打ちは、大鷹に使用する技術を隼に応用したものである。そのため、隼が本来持っている落下速度が十分に生かし切れなかったと考えられる。

吉田氏は、大鷹のお下がりだった隼の調教技術を、隼専門の技術にシフトさせた変革者の一人である。

第3章 宮内省の隼

1. 歴史

宮内省の隼を説明するには、宮内省の鷹匠がおってきた歴史を説明しなければならない。

江戸時代将軍家に抱えられていた鷹匠たちは、江戸から明治に時代が変わる際、幕府解体に伴って、一旦職を失うことになる。田舎に帰る者や、新たな就職先を探す者など、選択肢はバラバラであった。ただこの際に、多くの鷹匠たちがその技術を捨てざるをえなかったことは安易に想像出来るだろう。

一方、国は明治2年に宮内省を設立する。その後、古技保存として鷹狩を保護することになり、鷹匠たちは宮内省に属するようになる。しかしこの時雇われた鷹匠はほんの数人であり、その他の鷹匠たち、そして彼等が伝えていた技術は、この時途絶えてしまったのである。

一口に鷹狩を保存するといっても、今まで書いてきたように、つかう鳥、やる場所、調教方法は多岐に渡る。この時に保存されたのは、大鷹をつかった鷹狩と、隼をつかった上げ鷹狩、この二つであった。また、別の古技保存として、鶺鴒などが保存された。

大鷹の鷹狩を保存するのはわかるが、なぜ隼の上げ鷹狩を保存することになったのだろうか。歴史も浅く、表舞台では滅多なことがない限りやられてこなかった鷹狩を、明治政府はなぜ保存しようとしたのだろうか。

この時保存されなかった技は、小型の猛禽類（鶺鴒こちょうげんぼうや小長元坊など）をつかったものであり、歴史も古いものだった。この疑問に対しては、今後、さらに考えていく必要があるだろう。

2. 呼子式上げ鷹狩について

さて、宮内省で保存された隼の上げ鷹狩は、先程書いたように、吉田流が作り出した技術を保存したのがはじまりのようである。

しかし、宮内省の上げ鷹狩として写真が残っている物は、吉田流が作り出したものとはかけ離れていた。つまり、宮内省で行われていた上げ鷹狩は、そこで独自の技術発展を遂げたのである。

特長として、第一に鷹が写っていない。その代わりに、呼子が写っているのだ。

呼子とは、隼（大鷹にも使用する場合があります）を呼ぶためのホイッスルのことである。これに関しては狩りの部分できちんと説明するが、この鷹から呼子への変化こそが、宮内省の上げ鷹狩を独特のものとした、大きな変革ポイントとなっている。だからこそ私は、宮内省の上げ鷹狩を吉田流の上げ鷹狩と区別して、`呼子式上げ鷹狩、と呼ぶのである。

宮内省の上げ鷹狩を写真に残しているのは、朝日新聞社の記者だった堀内讃位である。堀内氏は、宮内省が保存していた鷹狩を写真として残した数少ない一人である。また、野鳥や伝統狩猟方法に対する知識が深く、多くの本を出版している。以下、これからまとめる内容は、堀内氏が出版した本（注8）から引用したものをまとめて再構成している。

また、今回のまとめでは、出来る限り古語を現代語訳して使っていくことにする。古語や猟師言葉についてはこれから専門的に研究していく予定のため、今回は省略する。

① 捕獲

昔から上げ鷹につかう隼は、渡り鳥として渡ってきたものを専門の猟師たちに捕獲させ、それを調教していた。それは宮内省時代でも同じである。隼の捕獲地は、江戸時代から鹿島砂丘（奥野屋海岸）と陸奥の岩城が上がっている。しかし宮内省時代に隼狩が行われていたのは、前者の鹿島の砂丘だけだったようである。なぜこの二つが隼狩の場所だったのか。それには、隼の渡りのコースと関係していると思われる。

日本の隼には、大きく分けて、渡り鳥として日本に来る亜種たちと、留鳥として日本に居続けている亜種（Falco peregrinus

japonensis) との二種類がいる。上げ鷹猟につかわれたのは基本的に渡ってくる隼だったため、前者の可能性が強い。

彼等は渡りのコース上、秋に日本にやってくる。堀内氏が記すところを見ると、10月中旬から11月の上旬までに鹿島砂丘の上空を通過するようである。陸奥の岩城も同じ理由から隼猟の舞台になったのだと考えられる。また、鹿島砂丘には当時神の池という池があり、隼の獲物となる鴨が生息していた。海岸沿いには松林があり、隼が休むには適した土地となっていたのも大きいだろう。堀内氏が鹿島砂丘に隼見学に行ったのが昭和9年の10月21日であり、当時隼猟を継承していたのは、たった3名だったと記している。

ではこれから、隼猟とはどんな猟なのかまとめていきたい。

まず、狩りがはじまる時間帯は早朝である。空腹の隼を狙うので、こちらも夜明けまでに準備を終えなければならない。砂丘についたらまずムナグロを取り出し50cmほどの紐をつけ、見える範囲に置く。ムナグロとは千鳥科の鳥であり、隼猟では囿役兼見張り役として使用する。ムナグロはとても視力がよく、野生の隼を一番に見つけ、まず右往左往する。そして最後は地面にしゃがみ込み、へばり付くように身を隠そうとするのである。これを見た猟師が、隼が近くにいることに気がつくことが出来るのである。そして側にはこれも囿役として、土鳩を紐でつなぎ置いておく。

その後猟師は、小鴨に55mほどの紐を巻き付け、上空に投げる。小鴨はまた落ちてくるので、紐を手繰り寄せてまた投げる。これを隼が来るまでやり続ける。このやり方は、逃げた（それた）隼や大鷹を戻す際に鷹匠が行

う振り鳩とよく似ている。小鴨を見つけた隼は、一気にはやって来ず、ゆっくりと近づいてくる。やはり近くにいる人間を警戒しているのだろう。そして最後は小鴨に飛びつく。

一旦飛びついたら、まずはそのまましておく。急に小鴨を引っ張ると、隼は驚いて飛び去ってしまうからである。

猟師はまず、トリモチを塗った木製の棒を留め具と共に立てる。その棒には砂袋と紐玉（置縄）が取り付けられている。仕掛けの準備が整ったなら、猟師は小鴨が繋がった紐を「ショブク」。

ショブクとは手繰るとい意味らしく、隼を捕まえる猟師たちはこの技術が一番大切にしている。このショブクがうまくないと、隼はパッと飛翔してしまう。隼の呼吸を読み、うまく興奮させ、獲物を掴み続けていられるようにしないといけない。

そして先程立てた棒に近づかせ、最終的には棒に接触させる。そしてワッと猟師が飛び出す。隼は驚いて翼を広げる。すると、隼の背中あたりにトリモチがくっ付いてしまうのだ。つまり棒、砂袋、紐玉と全てがくっ付き、飛ぶことが出来なくなる。そして紐玉が解け翼や羽毛に絡みつき、身動きが取れなくなる。こうなれば、後はトリモチを油やからし粉でとってやり、専門の拘束具で縛り、頭に頭巾を被せ箱に入れれば、この猟は一旦の終わりを迎える。頭巾とは、剣道の面のような形をした道具である。人間用と大きく違うところは、前も綺麗に塞がれているという点だろう。

捕れた隼が雌だった場合はそのまま宮内省の鷹匠の元へ送られるが、雄の場合はその場で逃がす。または、隼猟の囿につかう。役割としては、雄の隼にわざと餌を与え、羽毛を

散らかせる。これを見た野生の隼が、獲物を奪いに来るのを捕るものと思われる。

隼獵は宮内省が注文するだけ獲ることになっており、基本的に毎年10羽前後だったようである。

② 調教

隼の調教は、大鷹のように据え回し（鷹を拳に乗けて歩き回る）中心ではなく、飛ばすことが中心である。これは海外の隼をつかう鷹匠たちも同じであり、日本以上に飛ばしこむ。

なぜ据え回しがあまり必要ではないのか。もともと据え回しとは、神経質な大鷹を人間や周りの環境に馴らすためにおこなう調教である。しかし隼は先程書いたような頭巾を、餌を食べる時か飛ばされる時以外はずっと装着されているため、周りのことは関係ない。隼は飛ぶことが仕事であるため、飛ぶことに集中させるために頭巾を被せる。

隼の特長は、調教と狩りがかなり近い部分にあるということだろう。つまり訓練そのものが狩りのスタートと同じものとなっているのである。以下、それを呼子式上げ鷹獵で説明していく。

呼子式上げ鷹獵の特長は、やはり呼子をつかった部分である。

海外の鷹匠たちは、フード（頭巾のこと）をとってから隼が飛ぶのを待つ。ひたすら待つ。そのため、時間もかかり獲物がいた場合でも逃げられてしまう可能性がある。ただし、海外は狩場が広大なため、獲物を追いつければ遠くのほうで捕まえられる。

一方、日本の呼子式上げ鷹獵では、鷹匠が隼を羽合（あわせ）る。羽合るとは、一旦獲

物に向かおうとして拳から飛び立った鷹を、一度引いて、再度押し出すように投げる、日本独自の技術である。これを隼に応用する。

せっかちに隼を羽合するという文化がいつごろからはじまったのかについては、今のところわからない。が、抜き打ちをしていた名残として残っている可能性もある。

羽合の際、向かわせる先は、鳩である。これは狩りの際にも行われるもので、隼を上空に上げる、つまり上げ鷹にするための技術である。

まず訓練の場合、三人から四人の鷹匠が、三角なり四角の形になるように並ぶ。みな、手には生きた鳩を持っており、鳩の片翼には長い紐（忍縄）がつけられている。一人が鳩の紐を持って、鳩を振り回す。この際、呼子を吹く。それに向かって鷹匠が隼を羽合するのである。隼は回る鳩めがけて飛ぶが、あと少しのところで鳩を回していた鷹匠がサッと鳩を隠す。すると隼は旋回しなければならなくなり、少し高度が上がる。するとさっきの鷹匠とは別の鷹匠が鳩を振る。この際もまた呼子を吹く。

隼は、今度はそちらに向かって飛ぶが、今度もすんでのところで隠される。これを繰り返すことにより、隼の高度はぐんぐんと上昇していく。そして約30m付近でこれをやめる。この約30mというのが、日本の狩場事情をとてもよく表現しているように思える。

海外では、隼の限界水準まで高度を上げるように仕込む。それは、高く隼を飛ばしておけば、落下速度も速くなり、遠くの獲物まで届くようになるからだと考えられる。

しかし日本の場合、そこまで高く上がられると逆に困ってしまう。鷹匠たちが遠くまで

追うことが出来ないうえ、狩場そのものも狭いため、そこまで加速させる必要もない。つまり、日本の上げ鷹猟に求められているのは、素早く近くでコンパクトに狩りを収めさせるということなのである。

③ 狩り

次に、狩り本番についてまとめていく。日本の上げ鷹猟では、獲物は雉である。

まず獲物が発見されてから狩りがはじまる。先程のように隼を上げ、勢子と呼ばれる役割の人々が、獲物が潜んでいる草むらに近づいていく。この際、隼が鷹匠から離れないように、時折呼子を吹く。

雉は隼が自身の上空を飛んでいることがわかっていて、ぎりぎりまで隠れている。そして人間に踏まれる、というところでやっと逃げ出す。次の瞬間、隼は雉に向かって落下し、そのスピードのまま蹴り殺す。これが呼子式上げ鷹猟である。

これが江戸時代、または明治初期の宮内省上げ鷹では、呼子の代わりに鷹をつかっていたのだろう。鷹から呼子に変わったきっかけをつくったのは、小林宇太郎という明治期の宮内省鷹匠だった。実は小林氏は、諏訪流の第14代目であり、大鷹の調教に関しても素晴らしい腕を持っていたそうである。

小林氏が鷹から呼子に切り替えたのは、一体なぜなのだろうか。一般的に鷹は振り鳩の代わり、つまりルアー（疑似餌）として使われていたという説があるが、それでは呼子に変えずとも、呼子を追加すればよいだけである。今後呼子式上げ鷹猟との比較のためにも、鷹の使い方、及び江戸時代の上げ鷹猟についても情報を集めていきたいと考えている。

『放鷹』の上げ鷹のページには、不思議なことに、鷹と呼子と一緒に掲載されている。しかし鷹の使い方に関しては記されていない。このことから考えるに、鷹から呼子への変化はいきなり行われたのではなく、徐々に実験的に行われていた可能性がある。

伝統保存として保管している技術を変えるというのはかなりの反感があったものと思われる。しかし、昭和という時代だからこそ、伝統の更新という荒業を行うことが出来たのかもしれない。

3. 古技保存の必要性とその応用について

宮内省の隼たちは、戦争の影響もあり、昭和17年を最後に消える。その後現在まで、一度も補充されていない。そのため呼子式上げ鷹猟も、残念なことに受け継がれぬままその姿を消した。普通の伝統文化ならば、こうなったら最早手遅れである。

しかし幸運なことに、堀内氏が残した大量の写真と、文字記録が呼子式上げ鷹猟には残されている。また、宮内省の鷹匠たちが残した調教日記なども見る事が出来る。

呼子式上げ鷹猟は、日本の隼調教技術が更新された最後の姿、つまり最終形態である。この貴重な文化を残さないというのは、私としては考えられない。

また、呼子式上げ鷹猟、というより日本の上げ鷹猟には大きな特徴がある。それは、隼を一年しかつかわないという点である。隼は頭が良く、すぐに人間の手の内を理解し先読みし、楽をしようとする。こうなってしまっただけでは鷹にはつかえないので、野生に返してしまうのである。そのためか、日本では隼に名前をつけない。これが大鷹と隼の一番の違い

だろう。

隼には1番から10番までの名前が与えられ、隼何号と呼ばれていた。長く飼わないから名前をつけないというのは、確かに正しい判断のような気もする。

このように、たった一年で野生に帰すというのは、ある意味正しい判断だったように思われる。その個体が自然界で子孫を残せば、結果的に自然界へのダメージはなくなるのだ。また、それこそが狩りという自然と向き合う仕事に就く鷹匠にとっても、理想のシステムなのではないだろうか。

また、呼子式上げ鷹隼は狭い土地で隼を上げられることから、都市部での害鳥駆除や、今後増加すると考えられる都市部型風力発電でのバードストライクを防ぐためにも、応用出来ると考えられる。

もう一つ、私が保存、研究していきたいのは、隼の捕獲方法である。鹿島で行われていた隼隼は現在当然ながら失われてしまっている。道具類も現存しているものはないだろう。ただこれに関しても、膨大な量の堀内氏の資料がある。復元することは可能である。

私がこの捕獲方法を保存したいのにはわけがある。日本の鳥類学は海外の鳥類学とは違い、猛禽類の渡りについての研究に遅れがあるように思われる。まして渡り鳥として日本にやって来る隼のコースについては、明らかに研究が遅れているように感じざるをえない。海外では、猛禽類を捕獲し発信機を付けて飛ばしているが、日本では動物愛護の精神からか、行われる回数が低い。

日本にやって来る隼のコースを調べるとするのは、鳥類学の世界にとっても有益な物になるだろう。また、隼の亜種である大隼(*Falco*

peregrinus pealei) については、まったくと言っていいほど生態を含め調査されていない。宮内省時代の上げ鷹では、多くの大隼が使用されたと考えられているため、その点についても、追加情報が必要なのである。

また、この隼の利点は、隼が受けるダメージが少なく済むということだろう。宮内省、つまり天皇に献上する隼が傷ついていたら大変である。そのため、江戸時代から、どれだけ隼を傷つけずに捕獲することが出来るか、つまり無双網などを使わず一羽一羽捕獲するなど、その部分に特化した隼と言えるのである。捕獲して発信機を装着次第すぐ離すだけでもいい、それだけでも文化として隼隼が残るのならば、それでもいいのである。

しかし出来るのならば、呼子式上げ鷹隼と隼隼と一緒に保護出来る日が来ることを、私は祈っている。

第4章 最後に

宮内省時代に変化した技術は、呼子式上げ鷹隼以外にもいくつかあり、そのほとんどが以前よりも劇的な技術向上を迎えている。ただこの時生まれた技術が、狩りの成果と繋がったかどうかは定かではない。鷹狩りの目的が狩猟成果ではなく、古技保存が目的になったことにより、鷹狩りは鮮麗された文化へと変貌したのである。天皇は時折鳴場（人工的に作り出した箱庭型狩り場）を訪れ、鷹匠の左腕に行儀よく立つ猛禽類を眺め、その鳥たちが狭い庭で華麗に獲物を押さえるのを観て楽しんだ。これらの変化は、日本人の思想が大きく変化したことをよく表わしている。

宮内省の技術を前後の鷹狩技術と比較することにより、この時代に日本人の美学が大きく変化したことがわかってくるだろう。

今回の論文では、集めた資料をまとめ掲載することしか出来なかった。今後はこれらを立体的に復元し、そこで起きた現象を文字化し、比較していくことが必要となるだろう。来年度からは、技術の比較文化と、古技復元に力を入れていきたいと考えている。

《注》

- 1・坂本太郎, 家永三郎, 井上光貞, 大野晋『日本書紀 (二)』岩波書店, 1994. 111p.
 - 2・倉野憲司『古事記』岩波書店, 1963. 266~268p.
 - 3・倉野憲司『古事記』岩波書店, 1963. 111p.
 - 4・宮内省式部職が昭和六年にまとめた鷹狩総合図鑑.
 - 5・宮内省式部職『放鷹 新装版』吉川弘文館, 2010. 227~228p.
 - 6・周達生『民族動物学ノート』福武書店, 1990. 240p.
 - 7・宮内省式部職『放鷹 新装版』吉川弘文館, 2010. 9p
 - 8・中西悟堂(編集)『野鳥 第三卷 第十一號』巢林書房, 1936.
- 堀内讚位
『写真記録 日本伝統狩猟法』科学総合研究所, 1984.
『鳥獣の習性』昭森社, 1942.
『鳥と獵』昭森社, 1945.
『日本鳥類狩猟法』三省堂, 1939.
 - 牧野吉晴(編集)『東陽 第一卷 第二號』

巢林書房, 1936.

《参考文献》

- 秋吉正博『日本古代養鷹の研究』思文閣出版, 2004.
- ヴェロニカ・イオンズ『エジプト神話』青土社, 1991.
- 大塚紀子『鷹匠の技とところ—鷹狩文化と諏訪流放鷹術』白水社, 2011.
- 大林太良, 伊藤清司, 吉田敦彦, 松村一男『世界神話事典』角川学芸出版, 2005.
- 岡崎寛徳『鷹と将軍 徳川社会の贈答システム』講談社, 2009.
- 折口信夫『折口信夫全集 第十七卷 藝能史編1』中央公論社, 1976.
- オルテガ・イ・ガセー(訳者 西澤龍生)『狩猟の哲学』吉夏社, 2001.
- 宮内省式部職『放鷹 新装版』吉川弘文館, 2010.
- 倉野憲司『古事記』岩波書店, 1963.
- 小宮輝之『日本の野鳥』学研教育出版, 2000.
- 坂本太郎, 家永三郎, 井上光貞, 大野晋『日本書紀 (一)』岩波書店, 1994.
『日本書紀 (二)』岩波書店, 1994.
『日本書紀 (三)』岩波書店, 1994.
『日本書紀 (四)』岩波書店, 1995.
『日本書紀 (五)』岩波書店, 1995.
- 周達生『民族動物学ノート』福武書店, 1990.
- 笠原英彦『歴代天皇総覧』中央公論新社, 2001.
- 菅原浩, 柿澤亮三『図説 鳥名の由来辞典』柏書房株式会社, 2005.

- ステファヌ・ロッシニ, リュト・シュマン＝アンテルム『図説エジプトの神々事典』河出書房, 1997.
- 中西悟堂(編集)『野鳥 第三卷 第十一號』巢林書房, 1936.
- 根崎光男『将軍の鷹狩り』同成社, 1999.
- 橋口尚武『東京の鷹匠－鷹狩りの歴史とともに』けやき出版, 1993.
- 花見薫(聞き書き 佐伯脩)『天皇の鷹匠』草思社, 2002.
- 堀内讃位
 - 『写真記録 日本伝統狩猟法』科学総合研究所, 1984.
 - 『鳥獣の習性』昭森社, 1942.
 - 『鳥と獵』昭森社, 1945.
 - 『日本鳥類狩猟法』三省堂, 1939.
- 牧野吉晴(編集)『東陽 第一卷 第二號』巢林書房, 1936.
- 森岡照明, 叶内拓哉, 川田隆, 山形則男『図鑑日本のワシタカ類』文一総合出版, 1995.
- 矢嶋泉『古事記の歴史意識』吉川弘文館, 2008.
- 米田雄介『歴代天皇・年号事典』吉川弘文館, 2003.

指導教員のコメント

松村 一男

荻島大河くんの「宮内省の隼」は実践と歴史の再構築という両面を統一しようとする試みとして理解出来るだろう。彼は和光大学で学びつつ、鷹匠にもなりつつある。訓練の様子や各地での催し物への参加はすでにメディアでも何度も紹介されている。しかし彼は鷹匠を超えた地点にも目標をすでに定めているようだ。それは一つには鷹、隼、ミサゴ、ハイタカといったワシタカ類を使った猟の日本における歴史を再構築することである。またその先には、鶉飼との比較や、世界の文化における鷹狩の比較研究や、さらには動物を使った狩猟の歴史全般についての研究、現代社会における動物イメージの活用など多岐に亘るテーマが控えている。実践と研究の両面において彼の今後のテーマ展開に注目していきたい。

今回の研究はそうした鷹狩を中心とする総合的研究への第一歩となる基礎的研究である。本稿は日本における鷹匠の歴史を『古事記』の垂仁天皇の条や『日本書紀』の仁徳天皇の条から説き始め、江戸時代における将軍や大名の鷹狩についての記録、戦前の鷹狩の写真や文字記録も手掛かりとして、平安時代、戦国時代、江戸時代、そして明治以降現在までと概観し、鷹狩が時の権力者によって庇護されてきたこと、そしてその結果、時代の変化によって鷹狩と鷹匠にも変化があったこと

を示している。またそれと並んで大鷹と隼での調教法や狩りの仕方の違いも指摘されている。明治維新で武家政治が終わると、宮内省は鷹狩と隼を使った上げ鷹猟を保存した。しかし雇われた鷹匠はわずかであり、多くの技が失われた。本稿はそうした失われた技を復元する可能性についても論じている。

人類は狩猟する存在、動物を殺害する存在として生きてきた。それが狩猟時代の野生の動物から家畜に代わっても、殺害してその肉を摂取することは変わらない。動物を飼いならして猟をすることは、元来は狩猟民の仕事であったが、後には西洋では王侯貴族、日本でも貴族や武士の楽しみになった。その一環として鷹匠や鶉匠も存在してきた。人間は食料としてそしてペットとして動物なしでは生きることが出来ない。鷹狩をめぐる研究は自然と人間の関係、人間と他の動物との関係の未来を考える重要なポイントとなるに違いない。

当事者研究の語りのテキストマイニングによる分析

A textmining analysis of the narrative in self-helping studies

09P087 多加 蝶加 (タカ デジャ)

【キーワード】 当事者研究、浦河べてるの家、語り、ナラティブ、テキストマイニング

【Keywords】 self-helping studies, Urakawa Bethel House, narrative, textmining

第1章 統合失調症と 当事者研究について

1 統合失調症について

統合失調症は躁うつ病と並ぶ2大内因性精神病で、自我機能の障害のために対人関係や社会生活が困難となる。青年期の発症が多く、精神科の対象となる重要な疾患で、治療やリハビリテーションにより回復の可能性がある。

昔は精神分裂病と呼んで社会から隔離させられた。精神障害者に対する差別と偏見のため2002年全国精神障害者家族連合会が要請を行って日本精神神経学会が統合失調症と改名した(小平, 2007)。

陽性症状である妄想・幻聴、奇異行動や思考形式の障害を引き起こす。陰性症状は注意力の低下や思考の貧困化、情動の平板化や感情鈍麻や能力・生活への障害を起こす。対人関係能力や作業能力、注意力や応用力が低く

なる。情報の処理も難しくなる。意欲・発動性の低下、非社交性、対人関係能力の欠如など、陽性症状と陰性症状は混在している。ささいなことがきっかけで、数時間単位で症状が入れ替わる。統合失調症が発症しやすいのは10代や20代の若者たちであり、進学や就職と人生の節目を迎えることも多い。望まないことの繰り返しで心はさらにもろくなる、本人にとっては莫大なストレスとなる。病気を抱えることで苦手なこと、うまくいかないことも生じてくる。

統合失調症の当事者に必要なものは自分のもろさや病気を認める勇気である。同じ辛さを分かち合える仲間ともろさを修復していく自信である。幻聴・妄想・混乱は薬の力を借りないと抑えられない。薬で症状を抑えている間に恐怖にたどりつく思考回路をリハビリで変えていける(佐保, 2010)。

2 統合失調の人たちの 当事者研究とはなにか

べてるしあわせ研究所・向谷地（2009）によると、北海道の南の先、襟裳岬の近くにある「浦河べてるの家」（以下、「べてるの家」または「べてる」とも表記）という1970年代から活動を続ける精神障害を経験した当事者たちの共同体がある。

べてるの家は、110人ほどのメンバーが地元の日高昆布の加工・販売をはじめとする様々な事業を地域で担いながら、国で講演も行うなど、多岐に渡る活動を行っている。

当事者研究は、症状、服薬、生活上の課題、人間関係、仕事などのさまざまな苦勞について自分が苦勞の主人公となって、自ら主体的に「研究しよう」と取り組み、従来とは違った視点や切り口でアプローチしていくことによって起きてくる困難を解消し、暮らしやすさを模索していこうというものだ。

当事者のかかえる苦勞のメカニズムの解明や見極めの方法として生まれたのが「当事者研究」だ。きっかけは、べてるで活動するあるメンバーの度重なる爆発の苦勞からだった。当事者研究は、統合失調症などさまざまな障害を持ちながら地域で暮らす当事者の活動のなかから生まれた「自分を助ける」プログラムだ。当事者のかかえる幻聴や妄想も含めた生きづらさの世界に共に降り立ち、苦勞を共有しながら、そこから、自分に合った生き方や暮らし方を研究的に模索していこうとするプログラムである。

3 当事者研究の特徴

べてるしあわせ研究所・向谷地（2009）によると当事者研究の特徴は、自分のかかえる

苦勞への対処を専門家や家族に丸投げしたり、諦めたりするのではなく、自分らしい苦勞の取り戻しを通じて「苦勞の主演」になろうとするところにある。そして、仲間と経験を分かちあい、専門家や家族とも連携しながら、自分にやさしい生き方・暮らし方を模索していく営みが当事者研究において大切になってくる。そこから生まれた基本理念が「自分自身で、ともに」だ。当事者研究では、研究が深まれば深まるほど、そこに豊かな人とのつながりが生まれてくる。

当事者研究では「自己病名」を大切にしている。「自己病名」とは、主治医からもらった医学的な病名ではなく、自分の苦勞のパターンを見極めて、仲間や関係者と一緒になって楽しく考えていったなかで与えられるものだ。

私たちは、弱い部分を否定して、より強さを求めたり、弱い部分を克服して強さに変えようとしがちだ。当事者研究では、お互いの弱さや苦勞をありのまま持ち寄ることによって、その場に連帯が生まれ、人の苦勞や弱い部分が、そのまま人を慰め励ます力に変えられることがある。

当事者研究では、どのような失敗や行きづまりの経験の中にでも、そこには未来につながる大切な「生活情報(資源)」という宝が眠っているという理解をする。今の苦勞や困難を解消する知恵とアイデアの素材は、自分自身と仲間の経験の中に眠っているからだ。

問題だらけで、出口の見えない状況の中でも、その「問題」の中心に、大切な新しい生き方の情報が蓄積されている。そして、その経験は誰にとっても有用な生活情報として活用される価値がある大切な資源なのだ（べて

るしあわせ研究所・向谷地, 2009)。

当事者研究で大切にしていることは「人」と「問題」を分けて考えることだ。どんな出来事でも「人が問題ではなく“問題”が問題なのだ」と考えるところから研究は始まる。トラブルが起きて、当事者の周辺にさまざまな困難が山積してくると、いつのまにか「人」と「問題」が一緒になって、その人自身が「問題扱い」されがちで、自分もつい自分自身を問題視しがちだ。そこで「人と問題の切り離し」が大切になってくる。具体的には、「“問題”の外に出る」「“問題”を外に出す」「“問題”を置き換える」という方法を取る。そのことによって「とらわれ」が「関心」に、「悩み」が「課題」に、「孤立」が「連携」へと変わってくる（べてるしあわせ研究所・向谷地, 2009）。

当事者自身が見て、聞いて、感じている世界を尊重し、受け止めようとする姿勢を大切にしている。そのためには、当事者が抱えている幻聴や妄想などのエピソードも、共にその世界に降り立ち、現実を共有し、苦勞に連帯しながら、新しい生き方のアイデアを一緒に模索し、探求する。さらに、既成概念や常識を反転させたりして、苦勞の現実が持つ新しい可能性を見出そうとする。そして、ワイワイ、ガヤガヤ、あーだ、こーだの自由な雰囲気ですり合い、議論し合う研究のなかから、思いも寄らないユニークな研究成果が生まれる。

当事者研究で大切にしていることは、かかえている苦勞や起きている困難な出来事を共有するために、絵に書いてみたり、苦勞の内容をロールプレイで実際に演じてみたり、物に置き換えてみたり、具体的に練習したりす

るなど、さまざまなツールを積極的に活用する。そして、「何がどうなっているのか」と「何をどうすればよいのか」が明らかになり、研究の成果が目に見える形で日常生活のなかに具体的に実現され、生かされ、安心が増えていくということを大切にする。その意味でも生活の場は試行錯誤を可能にする大切な「実験室」なのだ（べてるしあわせ研究所・向谷地, 2009）。

4 当事者研究の6つのポイント

- (1) 日常生活上の出来事、困りごとを素材にする。
- (2) 苦勞や悩みをテーマ化し、「何かどうなっているのか」「何にどう対処していたのか」「何にどうすればよいのか」を考える。どうしたらその苦勞を起こせるかなど逆転したアプローチも効果的。起きている出来事のパターンやメカニズムを図にしたり、ロールプレイで演じたりもしてみる。苦勞に助けられている側面も考えてみる。その苦勞を持っている意味や可能性も吟味してみる。
- (3) 苦勞への対処方法を話し合い、検討する。必要に応じてSSTを使って練習する。
- (4) 研究から生まれたアイデアは生活場面で「実験」して効果を見極める。
- (5) 効果があればそれでOK、なければまた次のセッションで再検討する。
- (6) 一定の成果を発表し、有用な生活情報として仲間と共有する。

以上のように、お互いの苦勞や困りごとを、共同研究して、それを実践的に解決していくのが当事者研究の特徴でありスタイルである（べてるしあわせ研究所・向谷地, 2009）。

第2章 当事者研究の実際 浦河べてるの家の見学報告

2011年9月25日から28日までの日程で北海道の浦河べてるの家を見学したので報告する。

1 目的

浦河べてるの家の見学の目的は、第一に統合失調症の当事者は自分の病気をどのように受けとり、それをどう生かしていることを観察することであった。

第二に当事者たちは自分の病気を仲間と共にどのように研究しているかを実際に体験することであった。

2 実際の様子

(1) 浦河べてるの月曜日と火曜日のスケジュールに参加することができた。月曜日の朝9時より福祉ショップべてる（写真参照）の一階で見学者、研修者を含めて30人ぐらいの人が参加した。



当事者たちやスタッフ全員から今日の体調と気分を報告し、働く時間の申告をした。共同住居の様子も合わせて報告を行った。これ

を「月曜の朝のミーティング」という。ミーティングの司会者、チェック員は当事者であった。引き続き各事業のチームごとにメンバーが事業や人間関係で良かったことや苦勞していることやさらに良くする点を話し合う。これを「仕事振り返りミーティング」という。最後に芸能会から、当事者たちが作った歓迎の歌を歌った。全員拍手した。



芸能会による歌



浅野さん（左側）の当事者研究 右側は向谷地さん

(2) 11時より、今回は特別に韓国でおこなわれた当事者研究の講座のことを参加したべてるメンバーの当事者たちが報告した。韓国での講座は一週間の長い旅であった。参加してきた当事者たちが自分たちの自己管理や病気への対応などをどの様に行ったかを報告し

た。そして、当事者研究をはじめた。

当事者の浅野さんの苦勞である、死にたい病との付き合い方の研究が始まった。21-23歳頃に、どん底の時期で生きる意味を失った。病気を持ちながらずっと受験して失敗した。23歳でべてると出会い、べてるにきたら「死ぬるかも」とおもった。その理由は電車もある、海もある。しかし生活が楽しくなり、目的ができて、生きるっていいことと気づいて札幌に戻って勉強しに行くがついていけない。

浅野さんの目標は、生きる意味を取り戻すことだった。そのために医者になる。医者になれば、高学歴、高収入で、女性にもてるのではないか。目標と現実の差が大きいためか再び症状が出て、他の人から狙われるという体感幻覚が出た。他の当事者から目標をやり直すことや仲間を作って楽に勉強することなどのいろいろなアイデアが出た。

こうして自分の経験や生活情報を皆の目の前に広げて、それを眺め、皆の目線でワイワイと対話を重ねる。そこでいろいろなアイデアが生まれる。当事者研究の後に浅野さんに尋ねたところ、「力をもらった気分」といい「元気で札幌に戻って受験を頑張る」と言った。

(3) 翌日の火曜日10時よりスタッフであり当事者でもある伊藤知之さんが見学者たち(約20人)に、べてるについて簡単に紹介した。べてるは主に昆布事業、出版事業、介護事業であり、100人ぐらいの当事者が暮らしている。引き続き伊藤知之さんは共同で暮らしている各ハウスを見学するために案内してくれた。べてるセミナーハウス、元祖べてるの家、リカハウス、グループホームべてる、カフェ

ぶらぶらぎの4箇所であった。

午後1時より、「自己 お助けミーティング」を行った。このミーティングでは仕事して良かったこと、苦勞したこと、さらに良くする点を、明日に持ち越すことなく新鮮なうちに、自分の気持ちを言葉にして仲間に伝える。引き続きSST(社会技能訓練)では生活や病気の苦勞などを具体的な課題としてあげ、コミュニケーションをする場であった。

3 感想

私がべてるの当事者研究に参加して感じたことは、第一にユーモアの議論である。例えば、当事者の浅野さんが苦勞を絵で描いたり、整理しながらそれに対して皆から目標について、目標が高すぎではないか、友達をつくって楽しい試験勉強がよいではないか、医者ならなくても女にモテる、などいろいろな議論に思わず笑う声が満ちた。

第二には仲間のお互いを思いやる雰囲気の中で感じる事ができた。例えば、爆発しても責めたりはせずに逆に「いい爆発したね、その苦勞を皆で演じてみよう」と共感してくれる。皆に練習場面を見てもらえること、成果を他の皆と共有できること、一人でやるのが不安なら手伝ってもらえること、うまくいけば皆にも喜んでもらえることなどは、当事者の取り組むモチベーションの維持に最も有効な素材と言われている。

第三には予測不可能な思わぬ方向への迷走的な、破天荒なストーリー展開の仕方である。例えば、各ミーティングの司会が当事者であることや自分の弱さを堂々と皆の前で公開することや自分が抱えている苦勞を歌で表現している。

べてるに暮らしている当事者たちは病気とうまく付き合おうとする姿勢があり、それは見学や研修の人々にも大きな勇気を与えた。当事者から学ぶことにより、仲間の力と笑いの力、そして人と人との絆の大切さを実感できたのである。



元祖べてるの家の前の伊藤知之さんと早坂潔さん

第3章 当事者研究の テキストマイニング分析

1 問題

人は自然のうちに、見たり、聞いたり、触れたりするなかで、置かれた状況を判断してもっとも適切な行動を選択しながら暮らしている。しかし統合失調症では、そのいずれの部分にも不具合が生じてしまう。それが、日常生活のなかで周囲とのコミュニケーションに支障をきたし、さまざまな生活障害につな

がっていく（浦河べてるの家, 2002）。

統合失調症を定義したり説明する言葉は多々あるが、それは一言でいうと「人づき合いに困難を生じる病い」である。誰しもが生きていくうえで美德とする社会規範、勤勉で、思いやりにあふれ、笑顔を絶やさず、他人と協調するといった事とは正反対のことが起きてしまう。それゆえ社会から孤立し、とくに身近な人間関係である家族や職場において軋みが生じ、生きづらさを抱えてしまうことになる。礼節を重んじる一般社会のなかでは、真っ先に叱責の対象となり、排斥される。もちろん当事者は、わざとしているわけではない。理解力や記憶力が低下したり、根気がつづかなくなったり、人の話し声が悪口に聞こえる。そういった現実の苦労のなかで、だれよりもそのような自分に落胆し、不甲斐なさに腹を立てながら、普通に暮らすことに何倍ものエネルギーを費やしながらかは生きていく。そして、それらの「弱さ」は、つねに、病気の症状の一つとして治療や訓練の結果、克服すべきものとしてあった。「病気の克服」と「社会復帰」という周囲の期待と、それができない現実との狭間で、いつも自分に鞭をふるいながら暮らしていた。

2 目的

統合失調症などの精神障害にとって病気からの回復に有効な心理教育プログラムとしての当事者研究がある。当事者の苦労を語り仲間とともに研究して病気との付き合い策を探る当事者による物語りである。

本研究の目的は、べてるしあわせ研究所・向谷地（2011）の当事者の記述を対象にして、「苦労を仲間とともに取り戻す」ための当事

者研究の特徴をテキストマイニングの手法を用いて明らかにすることである。

3 方法

(1) 分析対象

2011年に出版された、べてるしあわせ研究所・向谷地（2011）より当事者研究の記述部分を分析対象とした。

本書において当事者研究は第2部「当事者研究の実際」に以下の19事例が記述されていた。なお、「当事者研究的 タイプ別恋愛の傾向と対策」の事例は当事者研究から得た結論のみが書かれていたので分析対象から除外し分析対象は以下の18事例とした。

- ①「コンプレックスの研究」（久保田誠）
- ②「自分探しの四年間の研究」（江良泰一）
- ③「ドラマチック幻聴さんのつきあい方の研究」（千高のぞみ）
- ④「幻聴さんとのつきあい方の研究」（武田さやか）
- ⑤「気分年齢低下の研究」（下野勉）
- ⑥「おせっかいバリアの研究」（千葉大介）
- ⑦「リストカットの研究」（木村千佳）
- ⑧「被害妄想爆発からの脱却の研究」（森亮之）
- ⑨「親離れの研究——大人になるために」（工藤祐）
- ⑩「かっこつけ状態の研究」（木村新一）
- ⑪「生き方と死に方の研究」（山本賀代）
- ⑫「振り返す彼女、振り返される彼氏の研究」（小林絵理子、荒井克尚）
- ⑬「苦勞の仕分け人——恋愛マニフェストの研究」（山崎、伊藤知之）
- ⑭「ふたりの付き合い方の研究」（辻ひと

み、和田真）

- ⑮「起業の苦勞の研究」（浅古朗）
- ⑯「自分の運轉の仕方の研究」（松原朝美）
- ⑰「息子関白の研究」（浅野智彦）
- ⑱「自分いじめからの脱却の研究」（渡辺さやか）

(2) 分析手順

分析手順としては、べてるしあわせ研究所・向谷地（2011）をテキストファイル化し、Microsoft Office Excel 2007により、テキストマイニング用にCSV（タブ区切り）データを作成してText Mining Studioに読み込ませた。

テキストマイニングによる分析は（1）基本情報、（2）単語頻度解析、（3）係り受け頻度解析、（4）特徴語分析の順に行った。

4 結果と考察

(1) 基本統計量

基本情報とは表1に示されたような18事例から得られたテキストの基本的な情報である。18事例のテキストは119行に分割して入力した。平均行長（文字数）は251.3であり、総文数は1463文で平均当たりの文字数は20.4であった。また、内容語の延べ単語数は

表1 テキスト全体の基本統計量

	項目	値
1	総行数	119
2	平均行長(文字数)	251.3
3	総文数	1463
4	平均文長(文字数)	20.4
5	延べ単語数	11367
6	単語種別数	3252

11367であり、単語種別数は3252であった。
 タイプ・トークン比は、0.286であった。

(2) 単語頻度解析

単語頻度解析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントすることによる分析である。ここから、当事者研究に特有の表現(に登場した単語)を明らかにできる。3番目にある「苦勞」が当事者研究のキーワードである。当事者が自分のかかえる苦勞への対処を専門家や家族に丸投げしたり、諦めたりするのではなく、自分らしい苦勞の取り戻しを通じて「苦勞の主役」になろうとすることである(向谷地, 2011)。

113回出現した「苦勞」は、原文参照したところ3つの種類であった。1つ目は当事者が苦勞の経験を仲間に語るようになったこと。2つ目は、苦勞のメカニズムやパターンを研究すること。3つ目は、苦勞を理解するようになったことであった。したがって当事者研究の目的は本人の「苦勞」をどう理解して予測して改善することがわかった。

5番目の「仲間」が82回出現しており、仲間と一緒にするのが当事者研究である。

6番目の「幻聴さん」については、当事者間では、生体不明の声(幻聴)を「幻聴さん」と親しみを込めて呼んでいる。10番目の「お客さん」とは、何かを行おうとしたときに突然起きる不安や心配事である。自分は嫌われている、必要とされていない、などはマイナスの「お客さん」と呼んでいる(向谷地, 2011)。

「自己病名」は25回出現しており、べてるにいる当事者たちは医学的な病名ではなく自分の症状とふさわしい病名を持っていること

であった。

「弱い」は13回あり、原文参照したところ「弱い」という単語は2つの形で出現した。それは、自分の苦勞や弱さの情報を公開する事と人間の持っている弱さについて語っていることであった。したがってありのままの自分を受け入れて、弱さを力に弱さを絆となっていることをわかった。

表2 単語頻度解析(上位20単語)

	単語	品詞	頻度
1	自分	名詞	250
2	人	名詞	128
3	苦勞	名詞	113
4	研究	名詞	91
5	仲間	名詞	82
6	幻聴さん	名詞	66
7	母	名詞	65
8	仕事	名詞	51
9	いる	動詞	48
10	お客さん	名詞	47
11	行く	動詞	45
12	来る	動詞	44
13	病氣	名詞	43
14	浦河	名詞	43
15	わかる	動詞	42
16	まわり	名詞	41
17	良い	形容詞	41
18	やる	動詞	40
19	入る	動詞	39
20	考える	動詞	36

(3) 係り受け頻度解析

係り受け頻度解析とは、テキストに出現する係り受け表現の出現回数をカウントすることによる分析である。表3の全18事例における係り受け頻度結果によれば、全18事例において最も高い係り受けにある「浦河」とは、地名であり、当事者研究が生まれた場でもある。

「当事者研究」では、日常的に「ミーティング」が行われ、日常のリズムのなかに至極当たり前に定着している。日々の生活であた

りまえとなったこのミーティング自体が日常となり、当事者研究自体が日常的テーマとなるのだ。

ここでいう「爆発」とはさまざまな困難に直面した時の自己対処や自分の助け方の方法

の一つである。壁に穴を開けたり、大声をあげたりの方法などがある。だが効果は一時的で、後始末が大変で、次の爆発のきっかけとなることが多いという欠点がある（向谷地, 2011）。

表3 係り受け頻度解析

	係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
1	▶ 浦河	名詞	来る	動詞	13
2	自分	名詞	苦勞	名詞	13
3	お客さん	名詞	来る	動詞	12
4	当事者研究	名詞	ミーティング	名詞	12
5	自分	名詞	助ける	動詞	12
6	人	名詞	いる	動詞	9
7	デイケア	名詞	通う	動詞	7
8	自分	名詞	運転	名詞	7
9	スイッチ	名詞	入る	動詞	6
10	メカニズム	名詞	解明	名詞	6
11	爆発	名詞	繰り返す	動詞	6
12	精神科	名詞	受診	名詞	6
13	幻聴さん	名詞	来る	動詞	5
14	入退院	名詞	繰り返す	動詞	5
15	研究	名詞	始める	動詞	5
16	研究	名詞	続ける	動詞	5
17	薬	名詞	のむ	動詞	5
18	仲間	名詞	いる	動詞	5
19	状態	名詞	続く	動詞	5
20	SOS	名詞	出す	動詞	4

(4) 特徴語分析

特徴語分析とは、テキストに付随する属性ごとに、特徴的に出現する単語を抽出したものである。表4-1から表4-6は特徴語分析の結果をあらわしたものである。ここでは先行研究（佐藤, 2009）および当事者研究の構造に合わせて、各セクションに対して属性の編集を行い、「はじめに」「苦勞のプロフィール」「目的」「方法」「内容（結果と考察）」「おわりに」という各項目を作成し、属性として

まとめた。なお向谷地・浦河べてるの家(2006)を対象に分析した佐藤（2009）では「結果」と「考察」は別のセクションであった。

6つのセクションの特徴語について

「はじめに」(表4-1)は、どういう研究かを示す導入部分である。たとえば、「被害妄想爆発からの脱却の研究」事例では、「僕は統合失調症になって、爆発という苦勞を抱えて悩んでいた2005年に当事者研究と出会いました。それから今まで研究を続けてきまし

表4 特徴語抽出結果

表4-1 「はじめに」

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1 ▶ 苦勞	名詞	20	113	64.593078
2 研究	名詞	17	91	56.076127
3 当事者研究	名詞	8	31	29.132787
4 発表	名詞	6	9	25.156751
5 発表+したい	名詞	5	5	21.544163
6 浦河	名詞	6	43	17.265982
7 まとめる	動詞	4	9	16.074923
8 燃発	名詞	5	32	15.277964
9 取り組む	動詞	3	4	12.694416
10 学ぶ	動詞	3	7	11.998172
11 自立	名詞	3	7	11.998172
12 持つ	動詞	4	27	11.897457
13 出会う	動詞	3	10	11.301928
14 経験	名詞	3	16	9.909439
15 借りる	動詞	2	2	8.617665
16 紹介+したい	名詞	2	2	8.617665
17 深まる	動詞	2	2	8.617665
18 親離れ	名詞	2	2	8.617665
19 幻覚妄想大	名詞	2	3	8.385584
20 取り戻す	動詞	2	3	8.385584

表4-2 「苦勞のプロフィール」

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1 ▶ 自己病名	名詞	24	25	39.461552
2 家	名詞	24	31	35.867002
3 母	名詞	28	65	24.571024
4 高校	名詞	15	16	24.438811
5 入院	名詞	16	22	23.112545
6 統合失調症	名詞	16	24	21.914362
7 精神科	名詞	14	17	21.571434
8 学校	名詞	13	14	21.100424
9 病院	名詞	14	22	18.575975
10 繰り返す	動詞	15	27	17.848802
11 卒業	名詞	11	12	17.762037
12 父	名詞	13	20	17.505873
13 浦河	名詞	19	43	17.336475
14 大学	名詞	10	10	16.691935
15 行く	動詞	19	45	16.138291
16 中学	名詞	8	8	13.353548
17 通う	動詞	10	18	11.899201
18 薬	名詞	10	19	11.300109
19 友達	名詞	10	19	11.300109
20 暴力	名詞	8	12	10.957181

表4-3 「目的」

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1 ▶ 研究	名詞	12	91	46.590813
2 苦勞	名詞	11	113	36.973622
3 パターン	名詞	7	26	32.427981
4 メカニズム	名詞	6	22	27.850797
5 自分	名詞	14	250	26.474373
6 解明	名詞	5	11	24.630538
7 目的	名詞	4	4	20.634893
8 死ぬ	動詞	4	16	18.308736
9 人	名詞	8	128	18.008217
10 関係	名詞	4	20	17.533351
11 子ども	名詞	4	33	15.013347
12 整理	名詞	3	8	14.506938
13 始める	動詞	3	12	13.731552
14 助け方	名詞	3	19	12.374627
15 親	名詞	3	25	11.211549
16 する+した	動詞	2	3	10.1236
17 現実感	名詞	2	3	10.1236
18 方向	名詞	2	3	10.1236
19 居場所	名詞	2	4	9.929754
20 現象	名詞	2	4	9.929754
21 脱却	名詞	2	4	9.929754
22 話+ない	名詞	2	4	9.929754

表4-4 「方法」

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1 ▶ 研究	名詞	22	91	75.253571
2 当事者研究	名詞	13	14	54.000532
3 ミーティング	名詞	12	12	50.067883
4 仲間	名詞	14	82	42.114657
5 苦勞	名詞	12	113	25.860748
6 方法	名詞	7	21	25.850821
7 スタッフ	名詞	7	23	25.371471
8 行う	動詞	6	16	22.637195
9 メカニズム	名詞	6	22	21.199148
10 デイケア	名詞	6	23	20.959473
11 協力	名詞	5	6	20.621943
12 目線	名詞	5	12	19.183896
13 がまん	名詞	4	8	15.730596
14 メンバー	名詞	4	9	15.490921
15 書く	動詞	4	9	15.490921
16 参加	名詞	4	10	15.251247
17 お客さん	名詞	6	47	15.207283
18 場	名詞	4	14	14.292548
19 もらう	動詞	4	15	14.052874
20 経験	名詞	4	16	13.813199

表4-5 「内容 (結果と考察)」

	単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1	自分	名詞	143	250	31.157472
2	病気	名詞	29	43	14.168742
3	考える	動詞	25	36	13.304334
4	助ける	動詞	15	17	12.672693
5	良い	形容詞	27	41	12.20716
6	お客さん	名詞	30	47	12.090777
7	森式	名詞	14	16	11.691902
8	ワーカーさん	名詞	13	15	10.711111
9	する	動詞	14	17	10.672317
10	仕事	名詞	31	51	10.012812
11	恋愛	名詞	11	12	9.769115
12	行動	名詞	12	14	9.73032
13	小林	名詞	12	14	9.73032
14	解離	名詞	13	16	9.691526
15	電話	名詞	11	13	8.749529
16	ときめき	名詞	8	8	7.846327
17	山崎さん	名詞	8	8	7.846327
18	思い出す	動詞	8	8	7.846327
19	歩く	動詞	8	8	7.846327
20	運転	名詞	13	18	7.652355
21	評価	名詞	13	18	7.652355

表4-6 「おわりに」

	単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1	自分	名詞	34	250	46.245835
2	研究	名詞	15	91	26.265748
3	わかる	動詞	9	42	19.588388
4	声	名詞	6	15	17.009418
5	良い	形容詞	8	41	16.297659
6	生きる	動詞	6	23	14.578345
7	男性	名詞	5	17	12.807037
8	ときめく	動詞	4	6	12.555148
9	多い	形容詞	5	18	12.503153
10	苦勞	名詞	13	113	12.391074
11	幻聴さん	名詞	9	66	12.295171
12	嬉しい	形容詞	4	8	11.94738
13	父	名詞	5	20	11.895384
14	聞こえる	動詞	4	9	11.643496
15	お金	名詞	4	11	11.035728
16	技	名詞	4	12	10.731844
17	札幌	名詞	4	13	10.42796
18	聞く	動詞	4	15	9.820192
19	死ぬ	動詞	4	16	9.516308
20	やる	動詞	6	40	9.412317

た。そこで、今回は被害妄想を見極めて、爆発やひきこもりから脱却する自分の助け方についてまとめてみました」と述べている。

「苦勞」という語は病気から来る生活上の困難や困り事についての当事者研究に特有の表現である。また「苦勞」を「取り戻す」というのはべてるでは、治療という観点よりも、「苦勞する力を取り戻す」「病気を生きる」といった視点が強調されている。それは、援助者が話を聞くことではなく、当事者が自らを知り、自分を自分の言葉で語り、自分自身で悩むことを通じて初めて自己治療へと向かうという意味がある。

「爆発」とは先にも説明したように、さまざまな困難に直面した時の自己対処や自分の助け方の方法である。

「幻覚妄想大会」はべてるで年に一回行わ

れる一番感動的で多くの人を勇気づけた幻覚妄想の体験をしたメンバーを表彰する大会のことである。

「苦勞のプロフィール」(表4-2)は、本人の生育歴や苦勞の経験が述べられている部分である。たとえば、「生き方と死に方の研究」事例では以下のように述べている。「私の自己病名は、自分のコントロール障害です。私の家では父が絶対的権力を持ち、緊張や暴力の絶えない中、私はこの家をなんとかしようとがんばる一方で団体行動ができず、弱い子をいじめる問題児でした。中学はイギリスに留学しましたが、ルール違反の限りをつくして退学になり、高校はフリースクールでした。最初の大学では、すぐにトラブルを起こして退学し、再度大学に入り卒業はしましたが、在学中にネパールに逃亡し、結婚相手を見つ

け人生をやり直そうと思いましたが、父の猛反対であきらめるなどトラブル続きで、静養しようと浦河まできました。しかし、どこで働いてもケンカするか泣いてばかりで、心配した友達に連れられ、精神科を受診しました。そして、べてるにスカウトされ、今はパンチンググローブという音楽ユニット活動と、女性メンバーで起業したむじゅん社の代表をしています」。

「家」「母」「父」「卒業」「学校」の語は生活歴の中のイベントであり、「繰り返す」の原文を参照すると（１）当事者が幻聴を繰り返すことと、（２）「中学」「高校」「大学」で不登校を繰り返すことと、（３）「精神科」に入退院を繰り返すという３つの意味があった。

「自己病名」は主治医からもらった医学的な病名に対して、当事者自身の実感に基づいた生活感があふれる「病名」である。当事者研究でみんなと考えることによりユニークな自己病名が生まれる。

「目的」（表４－３）は、具体的な研究の目標が書いてある部分である。たとえば、「気分年齢低下の研究」事例では「子どもがえりや妄想依存のメカニズムに気づき、そこから脱却するためです。」と述べられている。「苦勞」の「研究」による「苦勞」の「パターン」と「メカニズム」の解明により自分の助け方を整理するという研究の共通の目的が見えてくる。

「方法」（表４－４）では、どのような研究のやり方を行ったかが書いてある。たとえば、「親離れの研究—大人になるために」事例では、「べてるに通い、当事者研究ミーティングに参加し、仲間やスタッフとの振り返り作

業などで研究しました。」と述べられている。

「ミーティング」という語は当事者が自分のかかえている苦勞や経験を語る場であり、またコミュニケーションの練習場でもある。

「お客さん」とは、前に述べたように、何かをしようとしたときに突然起きる不安や心配のことである。自分は嫌われている、必要とされていない、などはマイナスの「お客さん」と呼んでいる。当事者研究では「仲間」や「スタッフ」の力を借りながらお客さんへの対処法を練習することを大切にしていることがわかる。

「内容（結果と考察）」（表４－５）では、研究内容と得られたことや気がついたことが書いてある。たとえば、「親離れの研究—大人になるために」事例では「グランプリも獲り、やっと人間になれましたが、これからは本当の大人になる研究をしなければと思っています。現在は長年の母親依存や爆発などから脱却できたので、自分のなかが空っぽな感じで、病気というコードがなくなって素っ裸（すっぱだか）で寒い状態です。これから自分に似合う服や、生き方のスタイルを探していきたいです」と述べられている。

当事者研究では、「考える」という営みの回復を大切にしている。それは、当事者が自己病名を考えたり、幻聴さんへの新しい対処方法を考えたりすることである。

「森式」とは、「気分年齢低下の研究」事例において、当事者研究メンバーである森亮之さんが開発した技で、身体のふるまい方によって誤作動を修正する方法である。森氏が一人で研究を行い、実際の対処法としての「森式」を開発した。

「おわりに」（表４－６）では、当事者たち

は「自分」の「研究」を通じてわかったことや気がついたことを語っている。「自分」の「苦労」のパターンや「幻聴さん」との付き合い経験を聞いてくれた仲間に対して嬉しい気持ちが表れている。

「幻聴さん」とは、前にのべたように、当事者研究では、生体不明の声（幻聴）を「幻聴さん」と親しみを込めて呼んでいる。

なお、「苦労」という単語に着目してみると、表4-1「はじめに」では特徴語第1位であり、表4-3「目的」には特徴語第2位であり、表4-4「方法」では第5位であり、最後に表4-6「おわりに」では特徴語第10位であった。6つの属性のなかで、「苦労」という単語が4つのセクションに上位10語の中にエンタリーしている。また、全体頻度は113であるが、属性頻度が順に20（表4-1）、11（表4-3）、12（表4-4）、13（表4-6）となっており、筆者の分析能力の限界を超える結果となった。なお、「当事者研究」という単語も表4-1「はじめに」では第3位で8（属性頻度）/31（全体頻度）であるとともに、表4-4「方法」では第2位として13（属性頻度）/14（全体頻度）という頻度となっていた。

特徴語の先行研究（佐藤, 2009）との比較

向谷地・浦河べてるの家（2006）を対象した佐藤（2009）の研究と本研究とは共通した表現が多いことが見出された。個別にみると「はじめに」のセクションで「研究」という単語が共通しており、「苦労のプロフィール」では「学校」「母」「精神科」「家」「高校」などが共通していることがわかった。また、「目的」のセクションでは共通単語が見られなかった。「方法」のセクションでは「ミーティ

ング」「苦労」「協力」「研究」「メンバー」などの単語が共通しており、佐藤（2009）の「結果」と「考察」と、本研究の「内容（結果と考察）」セクションとの比較では「お客さん」「自分」「助ける」という単語が共通していた。

佐藤と本研究の異なる単語に着目したところ、大きな違いが2点ある。

第一は、佐藤（2009）の分析対象とした向谷地・浦河べてるの家（2006）では「結果」と「考察」のセクションが独立していたが、本研究の分析対象である、べてるしあわせ研究所・向谷地（2011）ではそれらの2つのセクションが「研究内容」として統合されていたことである。本研究の分析対象は月刊雑誌である『メンタルヘルスマガジン こころの元気+』の連載記事「べてるの家の当事者研究」（第21号～第39号）に基づいて作成されたものであった。この連載記事は、2011年の最新号においても、同じセクションで区切っていることが確認できた。第二の相違点として、「自己病名」のセクションの位置づけの違いがある。佐藤（2009）（向谷地・浦河べてるの家（2006）では「はじめに」のセクションに位置づけていたけれども、本研究（べてるしあわせ研究所・向谷地（2011）では、「苦労のプロフィール」のセクションに頻出しており、その位置づけが変化していたことが確認できた。

5 本章（テキストマイニング）のまとめ

—当事者研究における仲間の重要性

テキストマイニングによる分析の結果、以下のように仲間の重要性が明確になった。

テキストマイニングによる「仲間」は当事者研究の構造のなかでの位置づけについて着

目したところ、研究対象となっている18事例全体の単語頻度解析で「仲間」は82回出現している。どの部分で一番役割をはたしているかについては、各セクションごとの結果を確認したところ特徴語抽出の結果、方法セクション14回で「仲間」という単語が出現していることから当事者研究は仲間一緒に行うということを方法セクションで現れた。

当事者研究は仲間なしに成り立つことが非常に難しいのだろう。大高（2008）は、「仲間」の重要性について、初めは赤の他人だった「人」が浦河べてるでの生活や当事者研究を通じて、「人」と関わりを持っているいく中で「仲間」へ変化していくと述べている。

浦河べてるの家の特徴である当事者研究の中で「仲間」の重要性をテキストマイニングによる量的分析により認識された。当事者たちがそれぞれの症状や苦勞を持っているが病氣とともに生きるために付き合う方法を探ろうとする共通点が見られた。それで同じ目標を持っていることやべてるの家の独特の「弱さ」（弱さはべてるの家の理念である）でつながりができ、本人が一人で苦勞してないことを初めて知ることによって信頼される環境や安心感が生まれたからこそ「他人」だった立場から「仲間」に変化していくのだろう。この一連の流れで「仲間」に自ら心を開いて語りができるようになったと考えられる。このように人と関わりにくいところを乗り越えたのではないかな。

浦河べてるの家の理念の構造は、当事者研究の「レッツ当事者研究2」においても「苦勞」や「仲間」の重要性といった当事者の回復に関するキーワードがテキストマイニングによって出現した（表4-4）この結果か

ら、ミーティングをすることによって自分の苦勞を話せることや仲間の苦勞を聞くことで自分と向き合うようになると考えられる。したがって自身の新たな発見や、自分のつらいことを一生懸命聞いてくれた仲間からのアドバイスによって大切にされている感覚ができて前向きに考えるようになるのではないかな。以上のような仲間のあり方における浦河べてるの家の理念の構造が明らかにされた。

第4章 全体のまとめ

本研究では、第1章で先行研究を通して当事者の抱えている苦勞や、当事者が当事者研究を始めたことで自分の弱さ知りそれを受け入れたことが自信につながることなどの特徴を明らかにした。第2章では浦河べてるの家に暮らしている当事者たちの生活の様子や当事者研究を見学することにより実際に体験したことを報告した。さらに第3章では当事者研究の語りの文章をテキストマイニングによって分析を行い、当事者研究の表現の特徴を明らかにした。

私はべてるの当事者たちはお互いに精神障害にたたかう戦友であると思った。自分と同じ精神の悩みを持った人間に共通性を見つけ、共通の問題を克服しようという戦友仲間の意識が生まれていると想像している。精神の問題は大きすぎて、一人では克服できないが戦友仲間というチームで克服に向かうことが結果的に一人を強くしているのだと知った。一般人にも精神の悩みは存在するが決して、一人で悩まず、我慢せず、べてるの当事者たちのように戦友を見つけることが統合失

調症の予防につながる一つの希望の光になると理解できた。

本研究の限界は、まず第2章の見学では、浦河べてるの一週間の全体のスケジュールに参加できず月曜日と火曜日の2日の参加にとどまったことであり、その全貌を体験することがかなわなかったことである。また、第3章のテキストマイニングの分析では、当初は今回の研究対象となった、べてるしあわせ研究所・向谷地(2011)と浦河べてるの家(2005)とを比較する予定であった。しかし、時間的な制約により、前者の文献を分析することにとどまった。

北海道の浦河べてるの家から発した当事者研究は、当初の地域における精神障害の自助的な活動をこえて、全国的な運動になるとともに韓国にすでに当事者研究を始めおり、中国にも当事者研究を広げようとしている。

今後の課題としては中国の統合失調症を抱えている当事者の治療や実際の様子を調べていきたい。さらに、それを踏まえて当事者研究の考え方と実践を中国で広げていければ素晴らしいと思う。

謝辞

浦河べてるの家をご案内してくださったスタッフたち、特に向谷地生良さんに感謝します。Text Mining Studioを貸与してくださった(株)数理システムに感謝いたします。テキストマイニングという研究方法を教授していただき、ご指導してくださった伊藤武彦先生と大高庸平さんに感謝いたします。

引用・参考文献

- べてるしあわせ研究所・向谷地生良 (2009) レッツ！ 当事者研究 1 NPO法人コンボ
- べてるしあわせ研究所・向谷地生良 (2011) レッツ！ 当事者研究 2 NPO法人コンボ
- 伊藤絵美・向谷地生良 (2010) 認知行動療法 べてる式。 医学書院
- 小平朋江 (2007) 統合失調症 日本応用心理学会 (編) 応用心理学事典 丸善 (PP.262-263)
- 向谷地生良 (2005) 浦河べてるの家当事者研究 医学書院
- 向谷地生良 (2006) べてるの家から吹く風のちのことば
- 向谷地生良 (2009a) 技法以前 べてるのつくりかた 医学書院
- 向谷地生良 (2009b) 統合失調症を持つ人への援助論：人とのつながりを取り戻すために 金剛出版
- 向谷地生良・辻信 (2009) ゆるゆるスローなべてるの家 大月書店
- 向谷地生良・浦河べてるの家 (2006) 安心して絶望できる人生. 日本放送出版協会
- 大高庸平 (2008) 当事者研究の部屋から見た当事者の記述分析
- 佐俣由美 (2010) マンガでわかる はじめての統合失調症 エクスナレッジ
- 斉藤道雄 (2002) 悩む力：べてるの家の人びと みすず書房
- 佐藤友香 (2009) 当事者研究における語りの分析 和光大学卒業論文 (未公開)

- 浦河べてるの家（2002）べてるの家の非援助論：そのままがいいと思えるための25章
医学書院
- 横川和夫（2003）降りていく生き方：「べてるの家」が歩む、もう一つの道 太郎次郎社

指導教員のコメント

いとうたけひこ（現代人間学部）

タカデジャさんは、中国のシルクロード新疆ウイグル自治区の出身で、家庭ではモンゴル語、近所ではウイグル語、学校では中国語というマルチリンガルで、日本に研究生として来た時は、ほとんど全く日本語が出来なかったが、編入生3年生として今回の研究発表を日本語でできるまでこぎつけた努力家である。今回の研究は、精神障害者のコミュニティ援助として有名な「浦河べてるの家」を調べ、見学に行き、単行本のテキストマイニングを行ったという構成である。調べて分かったこと（事実や他人の意見）と自分の意見を分けて書くように指導したつもりであったが、不十分な箇所も未だ残っている。そういう弱点が残っているとはいえ、がんばって論文を仕上げたことは喜ばしい。

浦河べてるの家で発祥した当事者研究については、毎年、当事者研究全国大会が行われており、またべてる祭りが翌日に行われるので、この時期を見計らって、浦河町でのフィールドワーク（授業名「実践研究a1」）を和光大学生とともに行なってすでに4年になる。当事者研究が知識創造理論の観点から見て、優れた知的活動であることは、別の機会（いとう, 2012）で論じた。タカデジャ論文をふまえ、意味再構成理論（Gillies & Neimeyer, 2006；川島, 2008）から当事者研究を考えると、精神障害という慢性化した病いに対

する意味の再構成がグループで行われるプロセスであるといえる。

意味再構成理論によれば、病いなどによる苦労の意味を再構成するには「意味了解」「有益性発見」「アイデンティティの変化」の3つからなる新たな意味の生成の過程がある。意味了解とは、当事者研究では、困った苦労を「良い苦労」に転換させるプロセスであるといえる。これまで経験した苦労に新しい意味を付与する作業である。有益性発見とは「病気になってよかった」というメリットを発見するポジティブな考えである。浦河の当事者研究では、タカデジャさんが指摘するように、仲間の存在意義が大きい。当事者研究は仲間に支えられながら行うものであり、幻聴さんさえ仲間となる。病気によって仲間を得られたというベネフィットの世界である。3つめのアイデンティティの変化は、病気による苦労を仲間とともに研究することにより、病気によって失ったものから、病気によって得られた自分自身の再定義ができるようになることである。これは病気というトラウマを経験しながら、それを糧として、その後の人格的成長を達成するトラウマ後成長（Posttraumatic growth）という考え方も深く関連している。

岡上の自然環境

－キャンパスにある自然を管理する意味－

和光大学・かわ道楽研究班

09W053 八幡 敬士 10W049 野中 あずさ 10W025 久保田 はるな
10W030 齋藤 武 10E008 石井 直樹 09W039 田中 太一
09B054 笠井 昂太 09U042 林 大地

1. 始めに

和光大学は東京都町田市に所在しているとされているが、キャンパスの半分以上は神奈川県川崎市麻生区岡上に位置する。例えばA棟は町田市にあたるが、H・J棟あたりは岡上地域である。

岡上地域は古くから岡上村として人々が暮らしており、尾根線から鶴見川沿いあたりまでが人々の生活圏であった。その生活圏の範囲は現代にも続いており、南に隣接する横浜市奈良地区よりも川崎市柿生地域との交流が多く、川崎市の飛び地となった。それ故に宅地開発が遅れ、今でも湧き水が流れ、豊かで貴重な自然が多く残っている。

また、岡上の周辺地域は尾根と谷が組み合わさっている「谷戸」と呼ばれる地形で、和光大学はその尾根の部分にあたる。しかし、尾根の部分であるがために、少し高いところからでも辺りを見渡す事が出来る。そして、見渡すと大学が緑で囲まれている事に気が付く事と思う。

だが、そうした緑は定期的な手入れをしな

いと極相の植生となり、いわゆる「暗い森」となってしまう。そうになると、地面に生える草が少なくなり、生物多様性が失われる。この岡上周辺にはタマノカンアオイやキンラン等の貴重な植物や、ホトケドジョウやホタル等が棲める環境があるが、それは人の手による管理がなければ、植物は盗掘に合ったりや日差しが当たらなくなったり、また、ホトケドジョウやホタルのいる生息環境は変わってしまう。そして、そのままにしておけば、何時しかそれらはいなくなってしまう。

それを防ぎ、この環境を後世に伝えていくために、研究をして、生息環境を理解した上で自然保護をすることが重要だと考える。

そのため、上記のタマノカンアオイとキンラン、ホタル、ホトケドジョウを調査、研究をしている。

本論文ではその調査結果と研究の報告をする。

2. かわ道楽の歴史

まず初めに、かわ道楽の結成と歴史について

て述べる。和光大学・かわ道楽は、2002年度人間関係学部人間関係学科講義「フィールドワークを学ぶⅠ」で、鬼ノ窪川の生物調査・ゴミ掃除などを行ったメンバーを、主な構成員として結成された。その後、岡上の自然保護活動、岡上の地域社会活動、鶴見川流域での活動の大きく分けて三つの活動を続けている。

自分たちの足元である岡上の自然保護活動としては、2003年より、岡上・鬼ノ窪川の周辺の雑木林と小川の生態系の復活を図り、アズマネザサとクズからなる擬似的極相状態の笹を刈り取り続けた。以前から鬼ノ窪川のゲンジボタルを復活させるよう地域の要請があったことをうけ、地域個体群が絶滅したとされるゲンジボタルの生息環境調査として、同年5月に「フィールドワークを学ぶⅠ」の授業を通じて鬼ノ窪川カワニナ全数調査をし、800匹以上の棲息を確認し、カワニナを餌とするゲンジボタルの生息の可能性が高いことを明らかにした。そして、同年7月に板橋区ホタル飼育施設（現・板橋区立ホタル生態環境館）より麻生区由来のゲンジボタルの卵を受け取り孵化を確認した後、7月下旬に二回にわたって鬼ノ窪川に幼虫を放流した。8月から、和光大学学生研究助成金の補助を受けて鬼ノ窪川水質調査を開始した。また、同じ頃、植生調査（タマノカンアオイ）をはじめて行った。翌2004年6月2日に地域住民が、鬼ノ窪川にてゲンジボタルの発光飛翔を確認した。これを受けて同月6日から、ホタル成虫生息数調査を開始し、この年よりゲンジボタルの保護とあわせて、ホタル見物客が地域住民や駐車場利用者との間で引き起こしうる摩擦を防ぐために、毎年実施している。

2005年6月には、和光大学人間関係学科科目「フィールドワークを学ぶA」の講義中に、岡上三又水田（通称坂下水田）にて、絶滅危惧種IB類に指定されているホトケドジョウの稚魚を確認したのを受けて、それ以後、和光大学・かわ道楽として、水田では、「ホトケドジョウ生息環境調査」を実施している。2006年度3月に、和光大学新体育館パレストラの屋上に人工的なホトケドジョウ繁殖池（以下「屋上池」）が建設された。

足元の自然のである岡上の地域社会活動としては、2003年に先述した岡上地域の伝統行事の「どんど焼き」に和光大学・かわ道楽として初参加をした。この年より、毎年「どんど焼き」に参加している。2003年6月には小学生の親子を対象に、第一回「岡上自然観察会」を実施し、地域の人々との交流と、地域住民の自然保護への理解を深める端緒とした。2003年8月岡上西町会納涼大会を手伝い、この年より毎年参加して、地域との交流を深めている。2006年7月には、川崎市麻生市民館岡上分館主催の岡上谷戸を中心とした自然観察会（植生観察会、ホタル観察会、鶴見川魚調査）の講師を勤めた。2008年と2009年の3月に岡上こども文化センター、岡上老人いこいの家、麻生市民館岡上分館にて「おかがみふれあいまつり」に出展参加した。2009年から7～9月に行なわれる、岡上小学校「流域学習支援」にも、支援スタッフとして参加をした¹。2008年からは毎年8月に鶴見川大正橋付近のクリーンアップをしており、2010年にはさがまちコンソーシアムと連携して市民講座としても行なった。2012年の1月には財団法人学生サポートセンターの助成を受け、表彰を受けた。

足元の広がりである鶴見川流域を舞台とした流域活動としては、創立した2002年の暮れに、鶴見川流域の40以上の市民団体などからなる鶴見川流域ネットワーク（TRネット）および鶴見川源流流域の自然保護団体の連合体である鶴見川源流ネットに、正式に加盟した。また、2003年5月、鶴見川源流の小山田緑地で毎年開催される、「鶴見川源流祭」（源流ネット主催）に主催団体のひとつとして初めて参加し、以後、毎年参加している。2003年10月からNPO法人TRネット主催の「鶴見川クリーンアップ作戦」に参加して、大正橋付近クリーンアップを担当し、以後毎年参加を継続している。2004年11月町田市・相模原市の後援を得て「鶴見川源流ウォーキング」を主催する。2005年12月にはNPOいるか丘陵ネットワーク「岡上寺家ウォーキング」に主催団体のひとつとして参加した。ま

た、2006年8月鶴見川源流ネットワーク主催の「ウォーキング月間」の参加イベントとして、鶴見川源流から鶴川大正橋までのウォーキングを実施し、市民の参加を得た。12月に鶴見川流域ふれあいセミナー「寺家・岡上ウォーキング」にスタッフとして参加した。2006年に慶應義塾大学を会場として催された流域小学生の総合学習の成果発表会「鶴見川流域ふれあいセミナー夢討論会」をスタッフとして支援して以来、和光大学に会場が移った2007年、2008年、2009年、2010年、2011年そして2012年は名前が変わり「夢交流会」（会場は慶應義塾大学）となったが、それを含めて、7年連続でスタッフとして支援した。

以上が、岡上とそれを含む鶴見川流域の自然と社会を一体と捉えて関わってきた和光大学・かわ道楽結成から現在までの9年間の概略である。

1 堂前雅史、木暮剛、形山浩子、平本信也、<和光大学・かわ道楽> 研究班 「岡上地域の自然環境と保全活動」『現代社会関係研究、和光大学人間関係学部紀要』 2006年 第10号 20頁

3. ホタル調査

3-1. 調査背景

和光大学は東京都町田市と川崎市岡上の川井田谷戸に跨って位置している。川井田谷戸奥の低地はかつて「鬼ノ窪」とよばれていた。この地域の小川（以下「鬼ノ窪川」）には1980年ごろまでゲンジボタル (*Luciola cruciata*) が生息していたが環境の悪化などにより姿を消していた。しかし、和光大学人間関係学科のフィールドワークの講義での整備や調査により、鬼ノ窪川は豊かな生物相を持ち得る場所であるとの結果を得た。我々か

わ道楽は、地域からのホタル復活を望む声があったことと、以下4点の理由からホタルの復活と自生を選択し、環境の保全を行うことにした。

- ゲンジボタルが一つの環境指標になり得ること

ゲンジボタルは幼虫期を川の中で過ごし、川岸の土の中で蛹となり、成虫は川の周りを飛び回り繁殖し、川岸のコケに産卵するため、水だけでなく水辺一帯の自然環境が整っていなければ生きていけないため、生息しているかどうか環境指標となり得る

- ゲンジボタルがもともと岡上に自然に生息していた生物であること
- ゲンジボタルが「身近な存在」として地域住民の関心と共感を得やすいこと
- ゲンジボタルが象徴的環境財として受け入れやすいこと

昔から日本で親しまれてきたホタルであるから、水辺の再生などの象徴的存在となりやすい。

鬼ノ窪川のゲンジボタルは2004年の6月に復活し、その後毎年発光が確認されている。しかし年々推定総羽化数が減少しており、それに歯止めをかけるためにもこの調査は重要な意味を持つ。

3-2. 調査方法

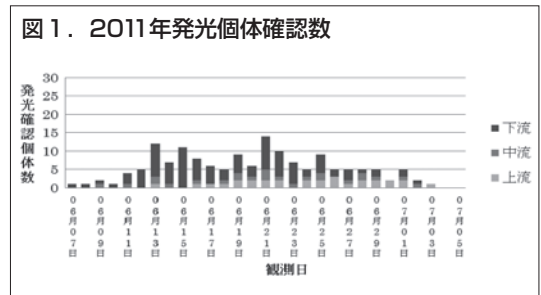
ゲンジボタルの発光飛翔データの取得のために、かわ道楽は毎年『ホタルパトロールマニュアル』(和光大学・かわ道楽 2006)の通りホタルパトロールを行っている。5月下旬からプレホタルパトロールとして鬼ノ窪川を毎夜まわり、発光が確認され次第ホタルパトロールを開始する。プレホタルパトロールとは鬼ノ窪川でのその年の最初の発光を確認するための調査で30分間川の付近を観察するものであり、またホタルパトロールはゲンジボタルのその年の発光飛翔データを取得するための調査である。詳細は以下に記す。またこの調査活動は、ホタルの繁殖活動の保護と、近隣住民の方への迷惑防止という目的ももつ。

ホタルパトロールとは、川を4か所(上流・中流・下流(上・下))の観測ポイントに分け、18:40から21:00まで10分ごとにその瞬間の発光数を計測・記録していくというものであ

る。発光確認個体数が0の日が2日間続いた時点で終了とする。また発光数のほかに、気温、天気、ホタルの観察に来た近隣住民の方の人数も観測ポイントごとに記録している。

3-3. 今年度の調査結果

図1. 2011年発光個体確認数



2011年度は昨年度と同じ5月24日からプレホタルパトロールを行った。そして、昨年よりも4日遅い6月7日に下流(下)にてゲンジボタルの発光を確認し、同日から本格的に調査を開始する。そして7月5日に発光数0を二日間連続で確認したためホタルパトロールを終了した。ゲンジボタルの発光確認個体数は図1に示したとおりである。

6月7日に1匹確認されて以降10日までは同数ほどしか見られなかったが、11日より多少の増減はあるものの徐々に確認個体数は増えていった。

16日ごろから確認数が減ったが、その後21日には今年度最高の14匹を確認した。その後6月の下旬ごろから確認数は徐々に減っていく。26日から7月1日まで、6月30日に2匹まで減るものの、確認数は5匹を保ち、7月3日に上流にて1匹を確認したものが今年度最後の発光となった。昨年度のホタルの発光が確認された期間が6月3日から7月12日までの40日間であるのに比べると、今年度は30日間と10日も短い。しかし2004年から2009年

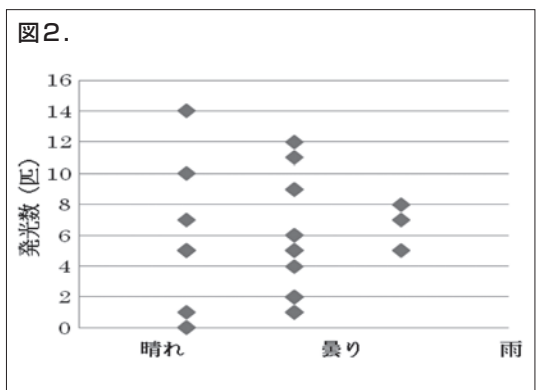
の記録の最後の発光日が6月27日～7月4日であったこと、日数が26日間～32日間であったことを踏まえると、今年度の期間が短かったとは言えない。やはり昨年度のゲンジボタルの羽化時期がかなり遅くまで延びていたことがはっきりした。

図を見ると、グラフには6月13日から15日と、21日・22日の2回山ができていているように見える。このことは例年と異なる印象を受ける。例年は6月の中旬に徐々に数が増え、9日前後から確認個体数のピークが続き、下旬ごろから右肩下がりに数が減るといふ山のグラフができていた。しかし今年のグラフを見ると、最高数が14ということからも分かる通り1日に確認できる数が少なく、ピークと言えるほどの期間がなかったうえに、最高数を確認したのは6月の下旬である。

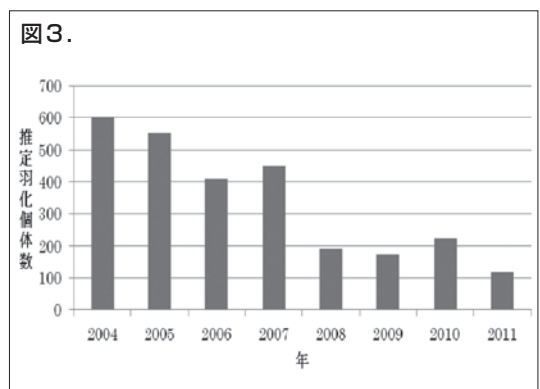
ホタルの数が徐々に減っていったのは羽化のシーズンが終わって新たに成虫になるホタルがいなくなったためと考えられるが、例年とは違う形のグラフになった理由は現在はまだ不明である。

次に発光が確認された地点をみると、発光は下流で多く確認された。このことは、水の流れによりホタルの幼虫およびその餌となるカワニナが下流側へ流された、もしくは移動したからではないかと考えられる。

2009年度から羽化条件を考察するために「発光数と天気の関係」のデータ化を行っている。今年度の結果は図2のとおりである。今年度は雨の日が少なかつたため比較しにくいですが、晴れや曇りの日には9匹以上の確認した日があったが、雨天の日には9匹以上のホタルを確認できたことがなく、天候の影響があり得ると考え得られる。



さらに2004年度から今年度までの鬼ノ窪川におけるゲンジボタル推定羽化個体数を比較する(図3)。推定方法は遊磨(1993)の推定式 $\text{推定総羽化数} = \langle \text{積算目撃数} \rangle \times 3 \div 3.9$ を用いて求める。それによると今年度は約118匹が鬼ノ窪川において羽化したと考えられる。



2004年以降減少傾向にあったが、2007年度には前年に板橋区ホタル飼育施設からカワニナを譲り受けて放流したために若干の増加が見られ、2010年度は板橋区ホタル生態環境館(旧・板橋区ホタル飼育施設)から譲り受けた麻生区王禅寺のゲンジボタル系統の幼虫を2009年度に追加放流したためか若干増加し、推定羽化数225匹を記録していた。しかしながら今年度はその二分の一にも迫る勢いで減

少してしまった。最も多かった2004年の数値と比較すると約六分の一という、過去最少の結果である。

昨年度実施した、ゲンジボタルの餌となるカワニナの生息数調査とカワニナなどを捕食するアメリカザリガニの捕獲調査の結果を、板橋区ホタル生態環境館・阿部宣男氏に報告、相談した。まず、カワニナについては川10cmのラインに10匹以上生息していることが望ましいということで、昨年度に確認できた約670匹という数値は約120mある鬼ノ窪川に対して少ないと考えられる。そこで同施設より和光大学周辺地域由来のカワニナ10kgを譲り受け、5月18日鬼ノ窪川に放流した。また、カワニナが少ない理由に、水質調査の結果の項でも述べるが、鬼ノ窪川に鉄が少なことが影響しているのではないかと考えられる。鉄イオンはマグネシウムやカルシウムなどを摂取するためにも不可欠なものである。それが少ないためにカワニナの殻の成分であるカルシウムが摂取できずに数も増えないのではないかと考えられる。そこで、同施設より頂いたケイ酸マグネシウムを5月22日に撒き、その後、安全対策を施したうえで、錆びた鉄釘を鬼ノ窪川上流に9月中旬に設置した。さらにアメリカザリガニの数を減らすためにサンゴ砂を譲り受け、6月6日に上流から撒くという対策を行った。サンゴ砂は水に溶けることで水の硬度が固くなり、アメリカザリガニの脱皮を妨げ徐々に数を減らす効果が期待されるために撒いた。今年度はアメリカザリガニの生息数確認をしていないため数が減少したかは今のところ不明である。

ホタルパトロールの結果を受け、今年度はホタルの活動条件に満たない事柄があったと

考え、その条件を調べた。東京ゲンジボタル研究所（2004）によると、ホタルの活動条件には次の3点がある。

- ① ある一定の温度であること。15℃以下の時には出てこない。
- ② 飛翔するための空気の停滞する空間があること。
- ③ 他のホタルの発光を確認できる暗さであること。

ホタルパトロールの記録より、6月7日から7月5日までの気温は18～29℃であり①の条件は満たされていただろう。ゆえに今年度の鬼ノ窪川のゲンジボタルの推定羽化数が激減したのは、②③またはその他の点で何か不十分な状態があったからではないかと思われる。そこで、不定期且つ簡単なものではあるが、鬼ノ窪川の視察を8月～9月にかけて実施した。その結果からホタル減少の理由として考え得ることを以下に挙げる。

1つには上でも述べたように、ゲンジボタルの幼虫の餌であるカワニナが少ないことが挙げられる。5月に放流したにもかかわらず、詳細な生息数調査はしていないが視察ではあまり数が見えないという印象を受けた。

2つ目にはホタルの産卵に適するコケが少ないことを挙げる。ゲンジボタルは川岸のコケに産卵するのだが鬼ノ窪川には水のすぐそばにはコケがあまり無いように思われる。川から離れたお伊勢山の木の幹や住宅地側のコンクリートの壁にはあるが産卵しやすい場所とは考えにくい。

3つ目に川底に砂や小石が少ないことを挙げる。ホタルの幼虫やカワニナが天敵から身を隠したり、水に流されないようにするためには川底に顆粒状の砂や、浮き石が必要不可

欠である。しかし、上流や中流の流れが速い所やまっすぐな所には小石がなかった。上流と中流の間の地点には、川底に砂も無く岩肌が出ている所も見られた。下流や川が曲がる地点には比較的小石等が多かったため、水の働きにより上流から小石等が流されてしまっているのだろう。

4つ目に、飛翔空間に草が生い茂り過ぎている可能性があることを挙げておく。ゲンジボタルの成虫は水しか摂取しない。その水を得るためには表面に細かい毛が生えているような植物が川のそばに生えていることが必要である。また、成虫が羽休めをするためにも植物はなくてはならない。鬼ノ窪川で確認できた植物は、タデ科の植物、キシヨウブ、シャガ、シダ類、ツブキ、などがあつた。また川近くの斜面にはカナムグラ、イロハモミジ、ヤマダマ、アズマネザサなどが見られた。よつて、水を摂取したり休んだりする場所としての植物は十分にあると思われる。しかし人が入るのをためらうほど生い茂る場所もあり、ホタルが飛んだり、他のホタルの光を探す妨げになっている可能性も否定できない。また、鬼ノ窪川における日照も妨げていることも考えられる。日照がないと植物による水質浄化の働きにも影響が出ると思われる。

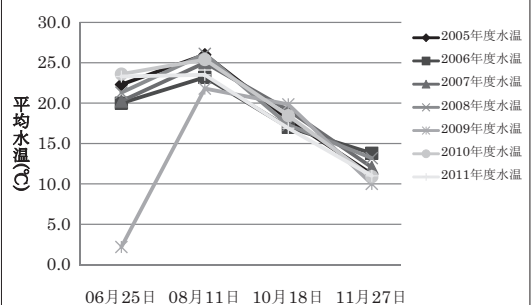
3-4. 水質調査の結果

ゲンジボタルは幼虫期の約9カ月を水中で過ごすため、その水環境を生物が住みやすい状態に保つことは重要である。また小川はゲンジボタルだけでなく、ホタルの幼虫の餌となるカワニナを含め多くの水生生物の生息場所であり、陸上生物の水分補給の場でもあるので、鬼ノ窪川周辺の自然環境の現状を把握

するためにも鬼ノ窪川の水質調査を続けている。

今年も水質調査6月、8月、10月、11月の計4回実施した。調査項目は水温、溶存酸素濃度(DO)、水素イオン濃度(pH)アンモニウムイオン濃度(NH₄⁺)、化学的酸素要求量(COD)、カルシウムイオン濃度(Ca²⁺)、硝酸イオン濃度(NO₃⁻)、リン酸イオン濃度(PO₄³⁺)、亜硝酸イオン濃度(NO₂⁻)、マグネシウムイオン濃度(Mg²⁺)、全硬度(TH)、鉄イオン濃度(Fe³⁺Fe²⁺)である。調査時には、水が流出している場所から下流まで10m間隔で区切り10区画の地点で水を採水し、水温と溶存酸素濃度はその場で、その他化学的水質の調査は採水した水を学校に持ち帰り測定を行った。溶存酸素濃度の測定にはケメットDO計・AZ-DO-10(共立理化学研究所製)を、その他科学的水質についてはすべて共立理化学研究所のパックテストを使用した。以下、今年度の水質調査の結果を2005年からの結果と比較しつつ記す。

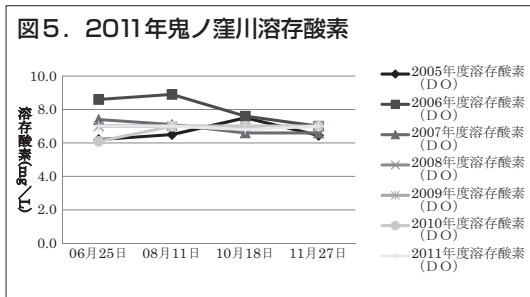
図4. 2011年鬼ノ窪川水温



• 水温 (図4)

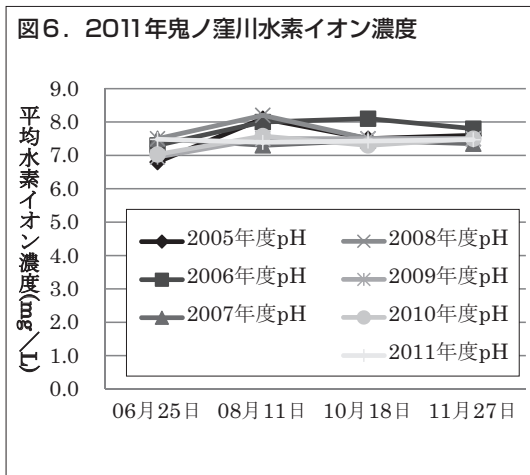
ゲンジボタルの生息に適した水温は2℃～28℃、カワニナの生息に好適な水温は14℃～20℃とされている。今年度も過去のデータと比べても特に目立った変化は無く、夏は20℃

以上、冬には15℃以下を示している。ゲンジボタルの幼虫及びカワニナが生息するのに問題は無い数値であるといえる。



• 溶存酸素濃度 (DO) (図5)

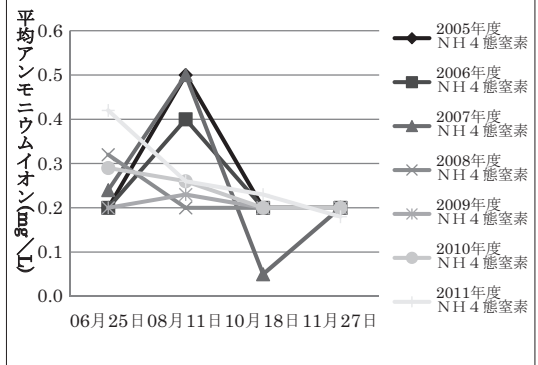
今年度の結果は総じて7 mg/lを示しており、安定しているといえる。ゲンジボタルの生息に適している数値は6.8~11.8mg/lとされているので、こちらも生息に問題はないと思われる。



• 水素イオン濃度 (pH) (図6)

水素イオン濃度はpH7.5前後の弱アルカリ性を保っている。過去のデータと比較しても特に目立つ変化はなく、1年を通して安定した数値であると思われる。ゲンジボタルの生息に適した数値はpH6.5~8.3であり、生息に問題はないと考えられる。

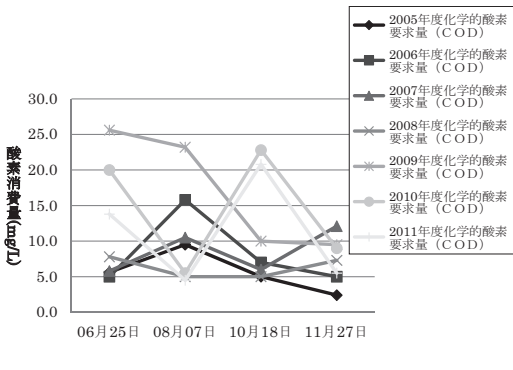
図7. 2011年鬼ノ窪川アンモニウムイオン濃度



• アンモニウムイオン濃度 (NH₄⁺) (図7)

今年度は、6月の数値が最も高く0.42mg/lを示しており、8月以降若干の減少を示している。8月、10月、11月結果は過去4年間のデータとそれほど変わっていないが、ゲンジボタルの生息に適する数値は0.03~0.12mg/lであるため、それよりも高い数値を示しているといえる。2007年度以前に見られた、数値が夏に上昇し、冬に低下するという現象はあまり見られず、高い数値ながらも安定しているかもしれない。アンモニウムイオンはセキショウ、キショウブ等の抽水植物の根や石などについているバクテリアによって分解されるが、その分解の割合によって、アンモニウムイオン、硝酸イオン、亜硝酸イオンの3つの形で存在するため、残り2つについても後に記し、水中の窒素による富栄養について考える。

図8. 2011年鬼ノ窪川化学的酸素消費量

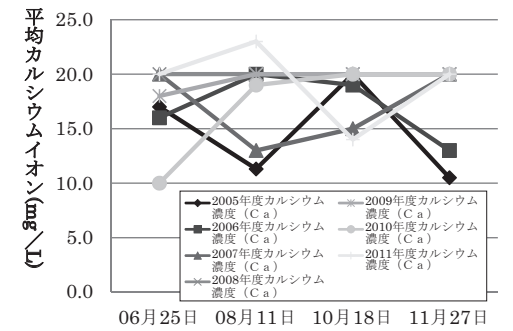


• 化学的酸素要求量 (COD) (図8)

これは人工的な化学物質による水の汚れを確かめられるのだが、6月と10月が特に高くなっている。ゲンジボタルの生息に適する数値は0.5~3.4mg/lであり、過去のデータ同様高すぎる数値だと言える。鬼ノ窪川には家庭からの排水が流れ込んでいるとは考えにくい。しかし、前項で述べた通り、鬼ノ窪川の川底には小石が少ない。そのため泥がむき出しの部分もあり、泥の中に生息している嫌気性の細菌がアンモニアを増やし、結果CODを高めている可能性もある。

CODは生物学的には難分解性の有機物もあるため、高いことがただちに水質上の問題とは限らないが、富栄養化の参考指標として考えたい。

図9. 2011年鬼ノ窪川カルシウムイオン濃度

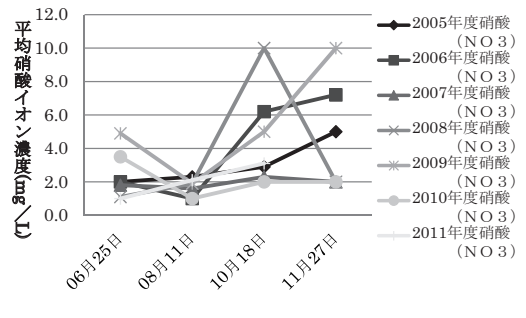


これは人工的な化学物質による水の汚れを確かめられるのだが、6月と10月が特に高くなっている。ゲンジボタルの生息に適する数値は0.5~3.4mg/lであり、過去のデータ同様高すぎる数値だと言える。鬼ノ窪川には家庭からの排水が流れ込んでいるとは考えにくい。しかし、前項で述べた通り、鬼ノ窪川の川底には小石が少ない。そのため泥がむき出しの部分もあり、泥の中に生息している嫌気性の細菌がアンモニアを増やし、結果CODを高めている可能性もある。

• カルシウムイオン濃度 (Ca²⁺)

今年度は10月に14mg/lと少し減少しているが、他の月は20前後を示しており過去のデータと比較しても目立った変化は見られない。ゲンジボタルの生息に適した数値は11.46~13.2mg/lであり、他の生息地と比べ高い数値を今年度も保っている。殻の材料としてカルシウムを必要とするカワニナが生息するにもカルシウムイオン自体は十分な量があるといえる。

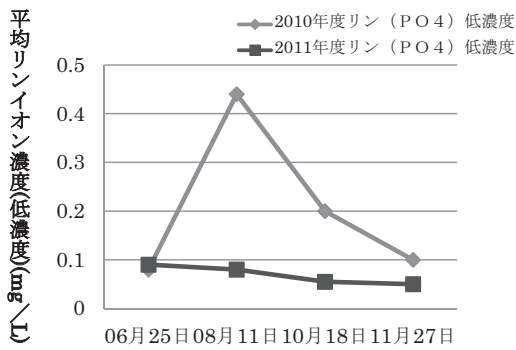
図10. 2011年鬼ノ窪川硝酸イオン濃度



• 硝酸イオン濃度 (NO₃⁻) (図10)

今年度は11月を除く3回は1~3.1mg/lといずれも低い数値を示している。しかし11のみ7mg/lと上昇した。10月または11月になると数値が上がるという現象は2005年度、2006年度、2008年度、2009年度にも見られた。硝酸イオン濃度の値が低いということは、水源地や水系の周囲に落葉広葉樹や雑木林が多く存在し十分に有機物が分解され、植物に吸収されていることを示している。秋、冬に上昇する現象は落ち葉の影響ではないかと以前より考察されている。硝酸イオンは先に述べたように窒素分を正確に測定するために調べているが、これによる富栄養化はしていないと思われる。

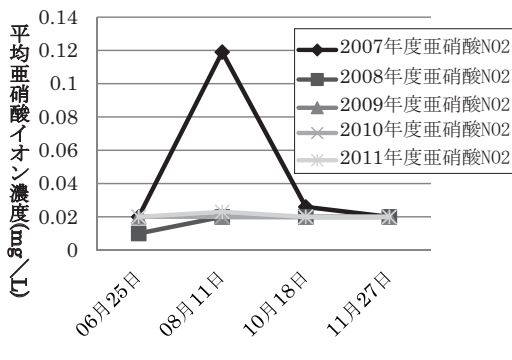
図11. 2011年鬼ノ窪川リン酸イオン濃度(低濃度)



• リン酸イオン濃度 (PO₄³⁺) (図11)

昨年度からより詳細なデータを得るため低濃度用のパケットテストを使用している。今年度は一貫して0.1mg/lを下回る数値を示しており、リン酸による富栄養化はしていないと考えられる。

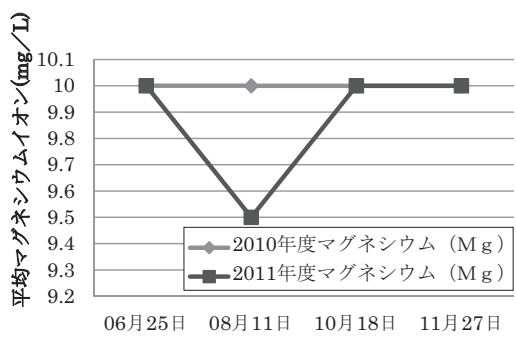
図12. 2011年鬼ノ窪川亜硝酸イオン濃度



• 亜硝酸イオン濃度 (NO₂⁻) (図12)

今年度も過去のデータとさほど変わらず0.02mg/lを保っている。硝酸イオン同様、過去のデータと比較しても変化はなく、非常に低い値である。水中の窒素分はアンモニウムイオンが主な源であると思われる。

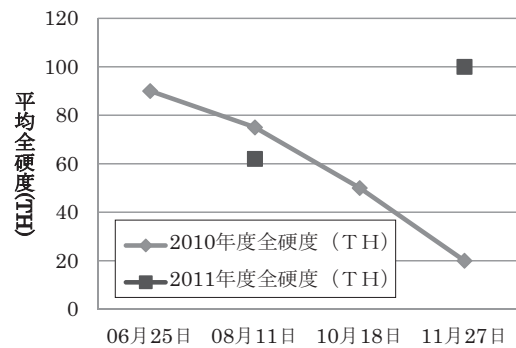
図13. 2011年鬼ノ窪川マグネシウムイオン濃度



• マグネシウムイオン濃度 (Mg²⁺) (図13)

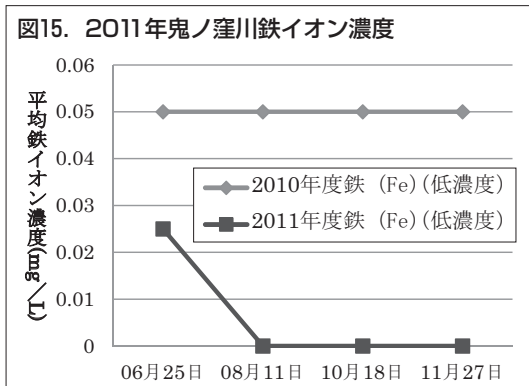
板橋区ホタル生態環境館の阿部宣男氏の助言により昨年より調査項目に入れている。マグネシウムを摂取したカワニナを食べることによりホタルの発光が強くなるとのことである。ホタルの生息する場所のこの数値は5～15mg/lが適しているとされており、今年度の結果は大体10を保っていることから特に問題はないと思われる。

図14. 2011年鬼ノ窪川全硬度



• 全硬度 (TH) (図14)

ホタルは全硬度が100以下の軟水を好むといわれている。今年度は8月と11月の2回しか調査を行わなかったが、それぞれ62、100を示しているため鬼ノ窪川の水は軟水であるといえる。



・鉄イオン濃度 (Fe²⁺、Fe³⁺) (図15)

鉄については前項でも触れたがここでも述べる。鉄は水中で酸化鉄となって他の栄養素 (MgやCaなど) をカワニナが吸収するのを助ける役割を持つ。阿部氏の助言によると、鉄がないとマグネシウムやカルシウムが水中にあってもカワニナが摂取することはできない。先に記したとおり、マグネシウムイオンやカルシウムイオンの数値には問題はなかった。しかし、今年度の鉄イオン濃度のデータは0.05mg/lと低かった昨年度よりもさらに低下し、0という結果になってしまった。前項でも述べたとおり、助言を得てケイ酸マグネシウムを散布する、錆びた鉄釘を設置するなどの対策を行ったがその後も結果は出なかったといえる。鉄が無いためカワニナが減少している、または成長が妨げられているとすれば、ホタルの幼虫の餌が徐々になくなってきていたことを表す。今年度の鬼ノ窪川におけるゲンジボタルの数が減っている要因の一つとしては大いに考えられる。鉄は自然界で作られるのは難しく、何か対策が必要である。

しかし、調査方法にミスがあって数値が0となった可能性も否定できないため、次回調査の際に方法を今一度確認し調査すべきであろう。

3-5. 考察

今年度は鬼ノ窪川におけるゲンジボタルの推定総羽化数がこの地域にホタルが復活した年の六分の一ほどまでに減ってしまった。考えられる要因として、昨年も考察したことだが、鬼ノ窪川の環境収容力が200匹程度が限界という可能性がある。前述してある、ホタル減少の要因として考えられる5点 (鉄イオンの不足、カワニナが少ないこと、コケが少ないこと、川底の小石等が流されること、植物が繁茂しすぎていること) は今後の調査や活動によって改善できるだろう。

また、ホタルの減少は上陸時の天候等の条件に何か要因がある可能性もある。ホタルの幼虫は春の長雨のあと頃に川から上がり、川岸の土の中にもぐって蛹として過ごす。その上陸にもいくつか条件があるため (東京ゲンジボタル研究所 2004)、今年度の上陸時期に何らかの条件が満たされていなかったならば、今後比較として何らかの調査が必要であるとも考えられる。

ここで、今後の調査課題と、活動の改善点を述べたい。まず上に記したとおりホタルの幼虫の上陸時期の調査・観察の方法を模索したい。

次に、鬼ノ窪川を今一度調査したい。全長、川幅、飛翔空間、付近の植生、今年度行わなかったカワニナやアメリカザリガニの生息数などを調査し、2004年度と変化した点はないか、現在の鬼ノ窪川はホタルが住むのに適しているのかを確認するべきだと思われる。それにより鬼ノ窪川の環境収容力を推し量る一つの指針になるのではないかと。特にカワニナの生息数を調べることは鉄の不足による影響を確かめるうえでも重要になると考える。ア

メリカザリガニの生息数の調査では、サンゴ砂を撒いた結果が出たのかも確認したい。ホタルの幼虫の生息に影響しないような調査方法を考えつつ実施したい。加えて鬼ノ窪川の源流の様子も視察したい。源流は東京都町田市の玉川学園の敷地内にあるのだが、その方向からホタルが飛んできたことがあった。そのことも踏まえ、そちらでもホタルが生息できる可能性があるのか、水質はこちらと比較してどうなのかなど、可能ならば調べたい。

また、昨年度からかわ道楽の活動場所が増えたこともあり鬼ノ窪川での活動が不定期でしか行えなかったが、今後は枝払いや草刈り、川底の石や礫を必要と思われる部分に積むなどの作業を、他の活動と並行して実施したい。作業を行うことでホタルやカワニナの生息に変化が見られるか、経過を観察したい。

それから、引き続き水質調査を定期的に行う。特に鉄イオンの結果に変化はないか、どういった対策を取るべきかを専門家の助言を仰ぎつつ考えていきたい。また、アンモニウムイオン濃度や化学的酸素要求量の数値が高

い原因も同時に検討してみたい。調査方法に誤りがないかどうか十分に気を配る。

さらに、地域住民の方との関わりについても考えていきたい。ホタルパトロールにおいてギャラリーの方とお話しする機会も多い。その際に、「毎年見に来るんですよ。この前は夜中に家の裏にホタルが来たんです。」「今年は少ないね」「いつか工事をしたから…それってホタルに悪いんじゃないかしら」等々、ホタルに関する感想をいただくことも少なくない。ゲンジボタルが「身近な存在」として住民の方の関心・理解・共感を得てきていると言えるだろう。また、ホタルだけでなく我々かわ道楽に関心を持って下さり、応援や心配をいただくこともある。毎年ホタルパトロールのギャラリーの人数も記録しているのだから、それを遡ることで、我々かわ道楽とホタルと地域との現在のつながり方やこれまでとの変化が見えてくるのではないかと期待する。今後も地域の方にご理解ご協力をいただきつつ研究、活動をつづけていきたい。

-
- 1 松本慶太、田中祐磨、佐藤頌子、金森弘美、志田伸仁、庄司幸太郎、内藤香奈枝、かわ道楽研究班 2006年「私たちのフィールド」「和光大学 学生助成金論文集」14 15-17頁
 - 2 東京ゲンジボタル研究所『ホタル百科』丸善株式会社 出版事業部2004
 - 3 遊馬正秀『ホタルの水人の水』新評論1993
-

4. ホトケドジョウ

我々かわ道楽はホトケドジョウ (*Lefua echigonia*) の繁殖・保護、自然個体群の調査を行っている。何故ホトケドジョウなのか、ホトケドジョウとかかわ道楽の関係について以下にその点を論じていきたい。

まず、はじめにホトケドジョウの成体につ

いて紹介する。ホトケドジョウは日本の青森県、中国地方西部を除く本州、四国東部に分布する。流れの緩やかな細流の砂底や砂泥底に生息し、関東では湧水のある水田用水路に多く棲んでいる。ドジョウよりも太く、短い体をしており、体長は成体でも6cm程度である。浮き袋が発達していることから、水草の間など中層を単独で泳いでいることが多い。

産卵期は3月～6月。粘着卵を水草などに産みつける。中国大陸や朝鮮半島に近縁種が存在するが、日本の固有種である¹。

ホトケドジョウの分布域は広範囲に見られるが、近年の動向として分布域の減少によってホトケドジョウも減少傾向にある。環境省は、ホトケドジョウが生息する丘陵・台地地域の水系において市街地化にともなう破壊・攪乱の激化の進行や水田等への農薬散布などを原因とした生息域の危機が全国規模で見られることから、環境省レッドデータブックの汽水・淡水魚類（平成15年更新）においてホトケドジョウは絶滅危惧種IB類（EN）（ごく近い将来に絶滅する危険性が高い種を指す。ENはEndangeredの略）に指定されている。

また、神奈川県レッドデータ生物調査報告書（1995）によるホトケドジョウの生息評価は、危惧種F（かつて広分布種であったが分布が限定されるようになり、かつ個体数が少なくなっているという種）として記載されている。

1999年に行われた汽水・淡水魚類のレッドリスト見直しの中で、環境省はその見本例として「メダカ (*Oryzias latipes*)、ホトケドジョウなど、普通に生息していると思われていた種でも、絶滅のおそれがあることがあきらかになった」とホトケドジョウの名前が挙げられている。レッドリストは2007年版まで改訂され、メダカやドジョウ類は新たな知見に基づき評価し直されたがホトケドジョウは今もなお、絶滅危惧種IB類に指定されている。

2000年の調査を最後に岡上地域では見られなくなり、絶滅したと思われていた。

しかし、ホトケドジョウは我々が通う和光大学のすぐ近くに生き残っていた。和光大学

人間関係学部人間関係学科講義「フィールドワークで学ぶA」で、2005年6月7日に、和光大学坂下水田にてホトケドジョウの稚魚が発見されたのである。その時点では小さな稚魚であったため種の同定は困難であったが、一週間後には2.5cmほどに成長し、その個体の写真から魚類生態学者の岸由二慶応義塾大学教授（和光大学兼任講師）によって同定確認された。

ホトケドジョウを確認した水田は和光大学の北部にある和光坂下のマンション敷地駐車場の北隣にある。水田の北側は民家、西側には高さ約2mのコンクリート三面張り水路と小田急線の線路肩の斜面があり、東側の高さ2mの擁壁の上には道路が走っている。

岡上西部は古くは川井田谷戸と呼ばれる谷戸からなる。川井田谷戸は玉川大学農学部キャンパスから、上川井田地区にむけて延びている。当該の水田がある地は、かつて「三又（みつまた）」という地名で呼ばれている。川井田谷戸が分岐する場所で、一方は小田急線沿いに、一方は線路の反対側へ、もう一方は和光大学下の道沿いに杉山下・鬼ノ窪方面に谷間が伸びている。水系も、小田急線沿いの水路と、鬼ノ窪川が暗渠化して杉山下地区を経て流れてきた水が三面張りの水路とが合流して、当該の水田に農業用水を供給する用水路となっている。用水路の水は灌漑期には水田に供給され、水田からあふれた水は下流で再び用水に戻り、コンクリート張りの暗渠を経て鶴見川に流れ込んでいる。水田の水源は上記用水の他に二カ所の湧水点があり、非灌漑期のホトケドジョウは湧水点とその周辺の水域で生息していると考えられる²。そのことから、毎月第二土曜日に水田

のホトケドジョウの生息状況を調査している。

その他にも、2006年からホトケドジョウの稚魚の一部を和光大学新体育館パレストラの屋上にある池で保護繁殖を開始している。2008年からは三又水田の一部を使いホトケドジョウのビオトープ（水田沼と呼ぶ）を作った。そして、ホトケドジョウが生存できる貴重な自然とともに岡上でホトケドジョウの生息環境調査を行っている。

4-1. 新体育館屋上池の経過

屋上池とは、2006年3月に和光大学H棟横に建設された、新体育館パレストラの屋上に作られた池のことである。屋上池が造られる以前は、水田で発見されたホトケドジョウの稚魚の一部が和光大学G棟堂前研究室の水槽で飼育されていたのだが、狭い水槽では繁殖が困難であり、また伝染病等での全滅のリスクが高いので、屋上池が作られた。これにより、屋上池の個体群を自然個体群のバックアップとし、かわ道楽の学生が管理している。そこでは、毎週三回、月曜日、水曜日、金曜日の休み時間に我々かわ道楽のメンバーが気温、水温、目撃個体数、個体の体長、ホトケドジョウの状態を記録している。しかし、自然状態で生息させるにはより大きな池で飼育する必要があり、また、集団で病気に感染し死亡する恐れもあり、一つの場所でなく、いくつかの場所で分散して飼育するのが望ましいと考えた結果である。

経過としては、2006年3月7日3匹の親ホトケドジョウを屋上池に放流した。目視で、雄と雌を判断し、雄4匹・雌4匹の計8匹を放流し繁殖に試みたが、4月12日に原因不明

であるが、11匹全て死亡した。その後、4月13日に再び8匹放流した。また同時に産卵、酸素供給のため市販の水草マツモを、またアサザなども入れてみた。その後5月21日に屋上池にて、推定100匹以上の稚魚が誕生した。2007年ではホトケドジョウの稚魚が確認できなかったが、2008年の6月に稚魚が確認できた。2008年には水温を下げるために、ヨシズを水槽に被せたり、浮き草を浮かべたりして水温を下げる工夫をした³。2008年までに屋上池にいるホトケドジョウの数は30匹近くおり、稚魚は4匹ぐらいしか確認することができなかった。2009年の4月8日に屋上池の個体数は27匹確認できた。密度が高すぎて繁殖しなくなったと考えて、6cm以上のホトケドジョウを水田沼に逃がして、池の中の成魚数を13匹に調整した。その後、7月8日に屋上池にいるホトケドジョウの稚魚の数を確認した。稚魚は全部で59匹確認できた。屋上池で取れたホトケドジョウの稚魚を全て研究室に移動した。

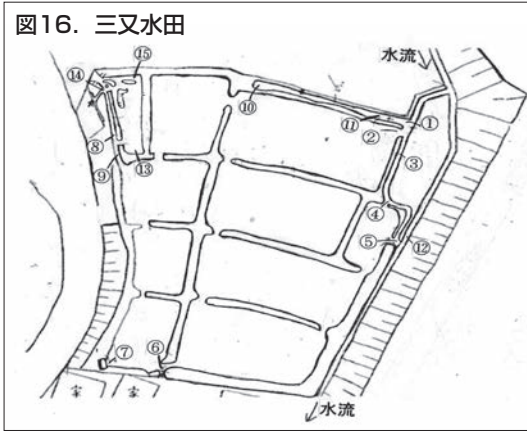
夏期の日照を和らげて水温を低くするために、7月10日に大学構内の池で発見されたサンショウモを屋上池に入れた。7月11日のホトケドジョウ調査の時に水田で捕まえたホトケドジョウ6匹を屋上池に移し、屋上池にいた6cm以上のホトケドジョウ8匹を水田沼に逃がした。これで屋上池にいるホトケドジョウの数は全部で11匹になった。

2010年6月、ホトケドジョウの繁殖のため、25匹いたホトケドジョウを13匹に固定した。6～8月までの期間で合計55匹の稚魚を確認した。

2011年8月、屋上池で34匹の稚魚を確認した。稚魚は全て堂前研究室の水槽に移動した。

屋上池におけるホトケドジョウの対策としては、ホトケドジョウの密度を低くすることが重要である。ホトケドジョウを繁殖させていくには、今後もホトケドジョウの個体数を確認しながら、屋上池のホトケドジョウの密度を減らしていき稚魚が生まれるための環境作りを進めていく。

図16. 三又水田



4-2. 水田ホトケドジョウ調査

ホトケドジョウの生息を確認した地点をまわり、水温とホトケドジョウの個体数を確認している。調査日は毎月第二土曜日とした。

決定した地点のうち、⑥⑦地点（水田の住宅側、および道路側の方向の角）は、8月以降は土用干しのため上流から流れ込む水を止めるので、水溜まりが（雨天を除いて）なくなることから8月以降から12月まで記録がとれなくなる。また、土用干しが行われる以前の4月から7月までは①から⑫地点だけでなく、水田から水田へ水が流れ込む地点の稲を傷つけないために目視で個体の確認調査を行うようにしている。地点①から地点⑫の調査はタモ網（枠36cm、長さ160cm）を使い、各地点に網を置き、網の向い側から足を2回網へ向かって蹴り込んで、網の中へ入った個体

数を確認するという方法で行った。⑫地点においては⑤地点にあるコンクリートの割れ目からコンクリート三面張り水路へホトケドジョウが流れ込んでいる可能性があるため、⑤地点から1mほど離れた地点から玉川学園方向に遡り、⑫地点の約30cmの高さから水が流れ落ちている場所ですくい上げる方法を採った⁴。

4-3. 水田ホトケドジョウ調査結果

2011年度の三又水田におけるホトケドジョウの個体数調査の結果は、図①のとおりである。最も多く見られたのは12月の9匹と例年に比べて、確認個体数が少ないという結果となった。昨年度は最高で9月の53匹確認した記録をみるとその数は減少している。

ホトケドジョウが減少した理由としては昨年度にもました水温の上昇が減少の理由として考えられるのだが今回はあまりにも少なくなってしまった。しかし、6月や7月の水温が高まった時期に体長1～2cmの小型のホトケドジョウを数匹確認されているため、水田で繁殖していることが分かる。

図②は2011年度の水田調査地における地点別のホトケドジョウ個体数調査の結果である。昨年度、年間を通してホトケドジョウを多く確認できた地点④と地点⑤だが、今年度あまり多く確認することが出来なかった。傾向としては流れが少なく水深の深い地点①や地点⑮に多くのホトケドジョウが確認できた結果となった。

図③は水田調査地における温度別のホトケドジョウ個体確認数を表したグラフである。昨年度は21℃から26℃のぐらゐがホトケドジョウ好みの水温ではないかとされていた

が、今年度は12℃から20℃くらいの水温の地点が多く確認することが出来た。しかし今年度は全体的な確認個体数が少ないため、あまり参考にはならないかもしれない。今年度は昨年度にまして最高水温が更新された。最高水温は昨年度より2℃高い7月の35℃。ホトケドジョウには棲みにくい温度である。水深の深い場所で多く確認できた理由として、水深の深い場所は温度の低いことがあげられる。2008年に水田沼が完成し、地点⑬、⑭、⑮を設け観測したところ、ホトケドジョウの生息環境が広がり、ホトケドジョウが移動していることと、今年の猛暑で水温がホトケドジョウにとって好ましくない温度になったため、少しでも水温の低い場所に移動したことが考えられる。

三又水田におけるホトケドジョウの個体数は、今年度は大幅な減少が見られた。以後調査を進めていき、何故減少したのか、ホトケドジョウがどの地点を好むかを調査していく。

図17. 2011年ホトケドジョウ個体数変化

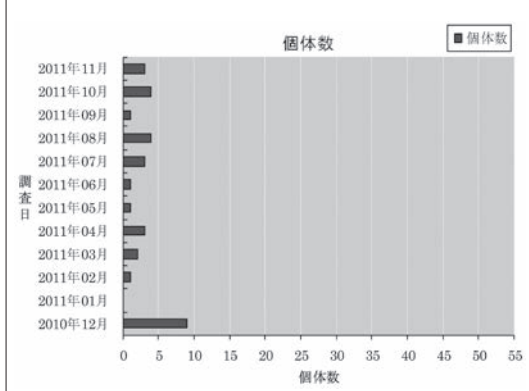


図18. 2010年ホトケドジョウ個体数変化

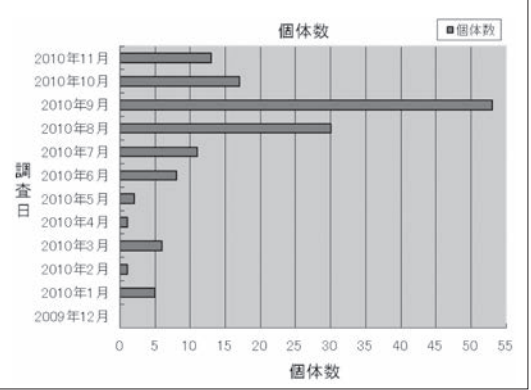


図19. 三又水田地点別個体数

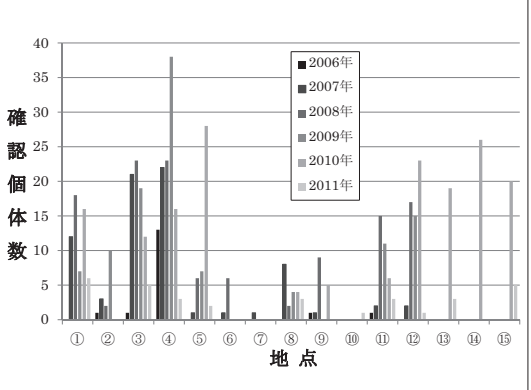
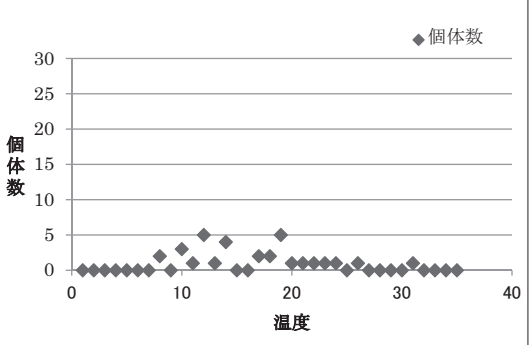


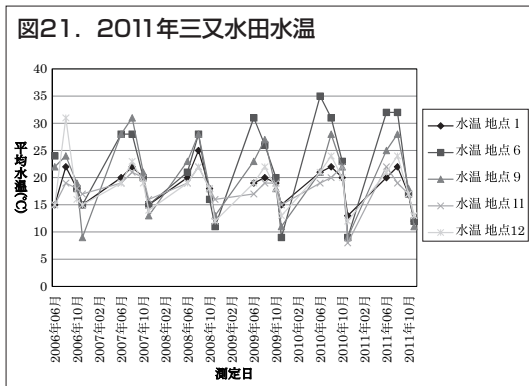
図20. 水田沼における水温ごとのホトケドジョウ個体数



4-4. 三又水田水質調査

和光大学坂下の水田においてホトケドジョウの生息環境を把握するために水質調査を

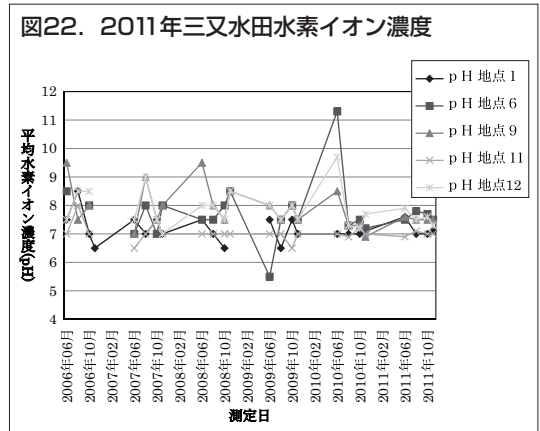
行った。調査項目と測定方法は鬼ノ窪川と同様である。調査日は昨年との値と比較するため、原則としては昨年と同じに月日に行うようにし、前日に雨などが降った場合は水質が通常の値よりも大きく変わり、正確な値を求められないと判断して、調査日をずらすことにした。2011年は6月25日、8月11日、10月18日、11月27日に調査を行った。測定地点は2008年度と同様図の①、⑥、⑨、⑪、⑫地点で行った。この5地点を選択した理由として、1年を通して常に水が溜まっている場所であり、⑥⑫地点はホトケドジョウが水田を離れて別の場所へ移動する水路への入口があるからである。また2010年度の調査結果と比較するためである⁵。



水温

水温は図のとおり各地点は夏に最高水温を記録し、冬に最低水温になるという傾向である。5地点を通して水温の変動が大きいのは地点⑥、地点⑨、地点⑪の三箇所である。特に今年の地点⑥においては6～8月にかけて30℃前後の水温が確認されている。一方、2011年度の8月のホトケドジョウは多くの個体数、7月は3尾、8月は16尾が確認できたにも関わらず、2011年度の地点⑥（7月：35℃ 8月：32℃）、地点⑨（7月：27℃

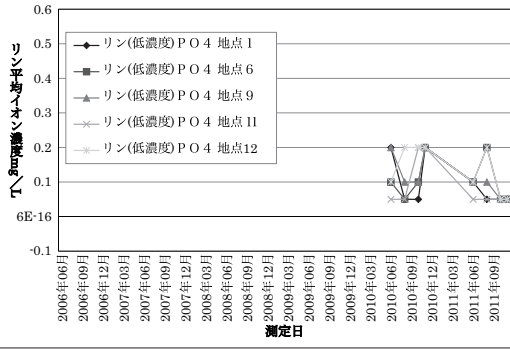
8月：28℃）、地点⑪（7月：19℃ 8月：11℃）のどの地点もホトケドジョウは多く見られず、地点⑥に関しては1尾も見られなかった。ホトケドジョウの生息に適している水温は5℃以上25℃以下であり⁶、このことから、ホトケドジョウは高温の場所を避けて生息していることが示唆される。



水素イオン (pH) 濃度

ホトケドジョウの生息に適していると思われる水素イオン (pH) 濃度はpH7.2±0.6の中性域である。しかし、図のとおりこれに該当する地点は時期によってあるものの、5年間を通して全地点適正範囲内に収まっていない。特に2007年度8月の地点⑫では2匹のホトケドジョウの個体確認が出来たが、水素イオン (pH) 濃度は9.0であった。これらのデータを見るとホトケドジョウの生息適正範囲 pH7.2±0.6を超えていることから、ホトケドジョウは適正範囲ではなくとも生息できるのではないかと考えられる。

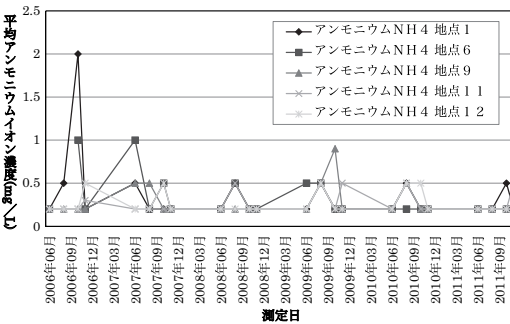
図23. 2011年三又水田リン(低濃度)イオン濃度



リン酸イオン (PO₄³⁻) 濃度

リン酸イオン (PO₄³⁻) 濃度は昨年度から調査キットを低濃度に変更した。理由は低濃度にすることにより、より細かなデータを取れるようにするためである。リン酸イオン (PO₄³⁻) 濃度は図のとおり、10月に高い数値を出す傾向があるが2008年度は各地点のリン酸イオン (PO₄³⁻) 濃度が0.2mg/1となっており、2010年度以降、0.2mg/1以下の数値を保っている。2007年度10月の地点⑪のリン酸イオン (PO₄³⁻) 濃度は2 mg/1という他に比べて高い数値であったが、水田でのホトケドジョウの個体確認数4匹中2匹は地点⑪であった。よってリン酸イオン (PO₄³⁻) 濃度によるホトケドジョウへの影響は少ないものと考えられる。

図24. 2011年三又水田アンモニウムイオン濃度



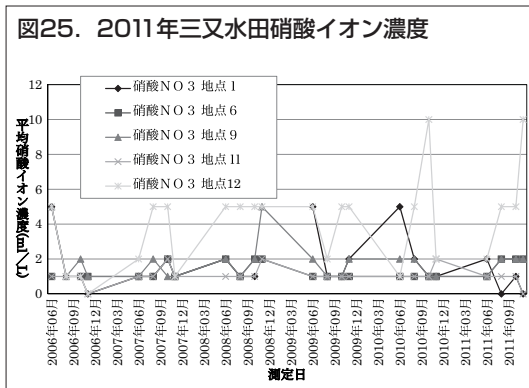
アンモニウムイオン (NH₄⁺) 濃度

アンモニウムイオン (NH₄⁺) 濃度は図により地点⑨、地点⑫のいずれも0.5mg/1以下であり他に比べて高いのは2006年度の10月の地点①の2 mg/1である。しかし2007年度10月の地点①では0.2mg/1と下がっている。これは地点①が和光大学地下の暗渠から流入してくる水が一時的に影響を及ぼしたのかもしれない。また2006年度10月と2007年度6月の地点⑥においては1 mg/1の数値を出しているがそれ以外の時期において地点⑥では0.2~0.5mg/1の範囲を示していることがわかる。2006年度のホトケドジョウの各測定地での個体確認数は不明なので2006年度10月の地点①の2 mg/1と2006年度10月の地点⑥の1 mg/1がホトケドジョウの生息に影響を与えたかは不明である。

2007年度6月の地点⑥でのアンモニウムイオン (NH₄⁺) 濃度は1 mg/1であり、ホトケドジョウの個体確認数は全体で11匹中0匹であったが、同地点での2007年度8月のアンモニウムイオン (NH₄⁺) 濃度は0.5mg/1でホトケドジョウ確認数は全体の8匹中1匹であった。

2008年度8月の水田でのホトケドジョウ個体確認数は全体で52匹、そのうち地点⑨で0匹、地点⑪で7匹、地点⑫で17匹確認され3つの地点で計24匹の個体が確認できた。2009年には全地点の中でホトケドジョウは地点⑫で2匹確認できた。2010年度は地点⑥を除く地点で5~23匹のホトケドジョウが確認され、2011年度もアンモニウムイオン (NH₄⁺) 濃度が0.5mg/1以下の数値だった。よってアンモニウムイオン (NH₄⁺) 濃度は0.5mg/1以下の範囲がホトケドジョウは生息に適して

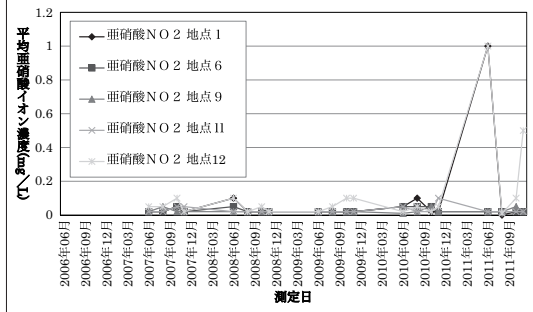
いるのではないかと考えられる。



硝酸イオン (NO₃²⁻) 濃度

硝酸イオン (NO₃²⁻) 濃度は図のとおり、地点①以下はほぼいずれの時期も2.0mg/lを示している。とくに変動の激しい地点⑫では最高10.0mg/lを記録し最低では0 mg/lに近い数値を出した。地点⑨も2006年度6月には5.0mg/lを記録しているがそれ以外は2.0mg/l以下である。2008年度8月の地点⑫でのホトケドジョウの個体確認数は水田全体52匹中、17匹が確認された。2009年度8月では26匹中2匹、2010年度は22匹中14匹、2011年度は16匹中2匹確認された。よって硝酸によるホトケドジョウの影響は10.0mg/lでもあまり影響はないと考えられる。また地点⑫は地点①からの水の流入の影響によって溜まっていた水が流れやすい場所であると考えられ、そのためこのような変動につながったのではないかと考えられる。

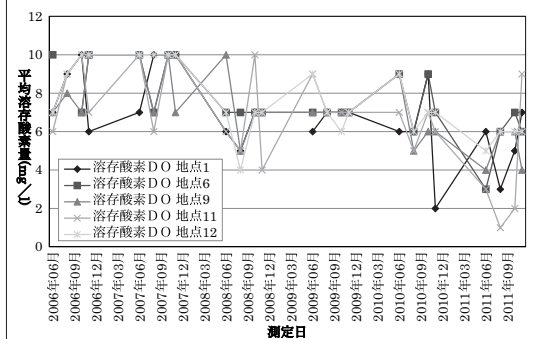
図26. 2011年三又水田亜硝酸イオン濃度



亜硝酸イオン (NO₂⁻) 濃度

亜硝酸イオン (NO₂⁻) 濃度は図のとおり、鬼ノ窪川同様2007年度から調査項目に加えた。いずれも0.1mg/l以下を示しており2010年度をとおしてあまり変化は見られない。しかし2011年度は6月に1 mg/lというとても激しい変化が記録された。高濃度を記録した時は0尾なのでホトケドジョウの生息に適していないと考えられる。

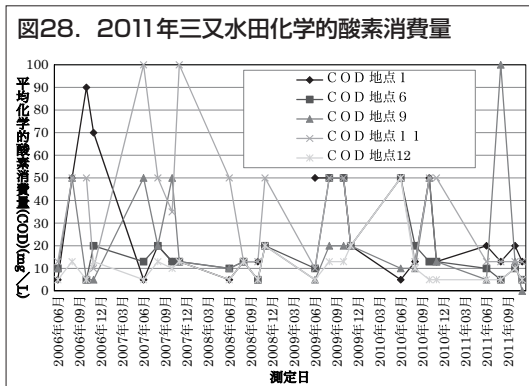
図27. 2011年三又水田溶存酸素量



溶存酸素 (DO)

溶存酸素 (DO) は図のとおり、水田の2011年度の溶存酸素 (DO) の範囲は1～9 mg/lであった。本来、生物的影響がなければ、気体の溶解度は温度に反比例するため、水温が高い夏に溶存酸素量が減り、冬は増加するはずだがあまりそのような傾向に近い地点はないといえる。これは付近の環境における生

物の活動の影響と考えられる。しいて言うならば地点⑥、地点⑪が本来の夏に下降し冬に上昇する傾向に一番近いと思われるが、2011年度の地点⑥の個体確認数は0尾、地点⑪は3尾であった。水田の溶存酸素量は水生生物が生息するのに好適な数値であるといえる。

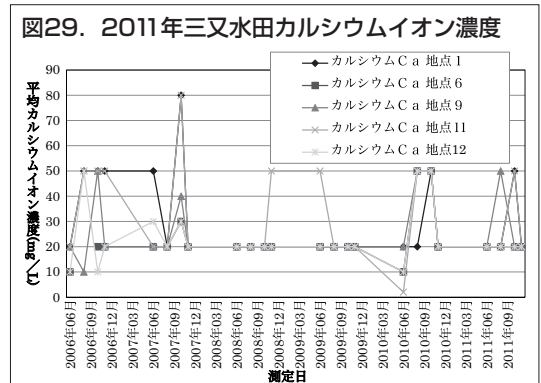


化学的酸素消費量 (COD)

化学的酸素消費量 (COD) は図のとおり、地点⑥と地点⑫は2006年度、2007年度ともに20mg/1以下である。地点①は2006年度10月90mg/1、地点⑨は2006年度8月と2007年度6月と10月に50mg/1、地点⑪は2007年度6月と11月に100mg/1の各地点の最高値を記録しており地点⑥と地点⑫と比べると化学的酸素消費量 (COD) が高いことがわかる。またその時の地点①、⑨、⑪ではホトケドジョウの個体確認数は0匹であった。化学的酸素消費量 (COD) はバクテリアなどの分解者が有機物を分解するために使う酸素量を測定する。つまり、富栄養な状態であるほど化学的酸素消費量 (COD) も高くなる。そのことから2007年度において地点⑪と地点⑨は他の地点と比較して富栄養の環境であるといえ、また夏や冬の季節の変化に左右されるわけではないと考えられる。

2007年度6月に地点①で1匹、2008年度7

月水田全体で27匹中地点①で5匹の個体確認がされ、2008年度8月は水田全体で52匹中、地点⑥で6匹、地点⑫で17匹のホトケドジョウが確認され、2009年度6月は地点①、⑥、⑨、⑪、⑫全てのポイントで確認出来なかったが、9月では地点⑪で4匹、地点⑫で10匹が確認された。2010年度6月も同地点は確認出来なかったが、9月では地点⑨で5匹、地点⑪で3匹、地点⑫で7匹が確認された。2011年度6月は①、⑥、⑨、⑪、⑫のポイントでホトケドジョウを確認することが出来ず、9月は地点①で1匹確認した。よって化学的酸素消費量が低いほうがホトケドジョウは生息しやすいと考えられる。



カルシウムイオン (Ca²⁺) 濃度

カルシウムイオン (Ca²⁺) 濃度は図のとおり、地点⑪の2007年度10月の80mg/1を記録し、2007年度は地点も20mg/1以上である。2008年度の鬼ノ窪川のカルシウムイオン (Ca²⁺) 濃度は10~20mg/1であり水田でもカワニナなどの貝類の生存に適したカルシウムイオン (Ca²⁺) 濃度であることは言える。しかし水田沼での貝類の個体確認数は少なく、農薬など他の水質の影響も考えられる。

2010年度8月は濃度が著しく下がっているが、これはその地点の水が蒸発などで減った

ことによるものだと推測される。水田は各地域によって水質は大きく異なる。広い水田で移動可能な水路があるのに、ホトケドジョウが各地点にとどまるというのは、水田のその地点がホトケドジョウの生息に差し支えない、適した環境であるといえよう。しかし生存に適しているといっても、ホトケドジョウ

の繁殖にも適した条件であるとは限らない。2011年度は年間を通してカルシウムイオン濃度は20~50mg/lであり、変化はあまり見られなかった。よってカルシウムイオン濃度の変化によるホトケドジョウの繁殖に適した条件が分からない。

- 1 松本慶太、田中祐磨、佐藤頌子、金森弘美、志田伸仁、庄司幸太郎、内藤香奈枝、かわ道楽研究班 2006年「私たちのフィールド」『和光大学 学生助成金論文集』14 15-17頁
- 2 形山浩子 2006年「岡上地域に生息する生物と地域社会の関係—ホトケドジョウ残存個体数調査」(和光大学人間関係学部卒業論文) 61-80頁
- 3 石川禎規、齋藤透、山西未紗、渡辺美里 2009年「岡上の自然環境保全のための研究—身近な自然。なぜ岡上なのか—」『和光大学 学生助成金論文』17 45-68頁
- 4 形山 (前掲書)
- 5 田中佑磨、金森弘美、大石絵美、佐藤頌子 2007年「足元の自然をみろ」『和光大学学生助成金論文集』15 17-49頁
- 6 大澤進、高野繁昭、田邊光夫、平岡正三郎 「ホトケドジョウ (ドジョウ科ホトケドジョウ属) の生息環境調査」1998年 自然環境科学研究No.11 70頁

5. 逢坂山・お伊勢山における希少植物植生調査

5-1. 調査目的

和光大学の近隣には、逢坂山とお伊勢山という二つの斜面林が存在している。逢坂山は和光大学の敷地の一部で、「岡上和光山緑の保全地域」として川崎市の「緑の保全地域」に指定されている。なぜ川崎市なのかというと、和光大学のキャンパスの半分以上が神奈川県川崎市にまたがっており、この逢坂山は川崎市にあるからである。その逢坂山の南側に位置するのがお伊勢山である。逢坂山・お伊勢山の双方ともに、コナラやクヌギなどの、雑木林に典型的な樹種が多く、カブトムシやクワガタの幼虫はそれらの腐葉土を糧とし、その成虫などはそれらの樹液を頼りに生活している。また、林床に目を転じれば、キンラン (*Cephalanthera falcata*)、タマノカ

ンアオイ (*Asarum tamaense*) などの環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類に指定されている植物や、同じく環境省レッドデータブック準絶滅危惧種に指定されているエビネ (*Calanthe discolor*) が確認されている。

このように貴重な植物が確認されている和光大学周辺の雑木林を中心とした環境を保全し、より良い自然環境にするため、かわ道楽では月二回の定例活動を行っている。雑木林の手入れでは、山を覆い日当たりを悪くし、他の植物の発育を阻害するアズマネザサ (*Pleioblastus chino*) を中心とした林床植物の選択的下草刈りや、春季に新しい芽を出し成長する植物にとって必要な落ち葉かきを行っている。そこでこの植生調査を通して、和光大学周辺自然環境の現状を把握し、絶滅危惧種の個体数の増減と活動との関連を考察する。

5-2. 調査方法

対象はキンランとタマノカンアオイの2種とした。両種は二種ともに環境省指定絶滅危惧Ⅱ類に分類されている。場所は逢坂山（岡上和光山緑の保全地域）とお伊勢山であった。調査実施日はキンラン調査は2011年5月7日（土）（天候：雨）で、タマノカンアオイは2011年5月22日（日）（天候：曇り）と2011年11月12日（土）（天候：曇り）であった。方法は、石川禎規ら（2008）の方法に準じて、歩きながら視認し、カウンターを用いてカウントした¹。

昨年タマノカンアオイの調査をした際にダブルカウントのミスの可能性が考えられたため、逢坂山において斜面にそって縦に人員を並べ、それぞれが地面に対して並行に移動していく過程で見つけた個体数をカウンターで合計していくという体制を取った。これは、隣同士でカウントした株を確認し合うことでダブルカウントを防ぐことと、人員を多く要することで、隠れている株まで目を行き届かせることをねらいとした。キンランの調査は2008年度から、キンランの横に番号を付けた杭を挿し盗掘防止を図った。ただし、昨年度までは杭を挿しながらのカウントは逢坂山に限り行っていたが、今年度はお伊勢山でも杭を挿しながらキンランの個体数をカウントする方法を取った。上記の方法で、キンランを一回、タマノカンアオイを2回、合計3回の調査でカウントした。なお、逢坂山・お伊勢山ともに玉川大学の区域を仕切るフェンスがあるため、2004年から玉川大学の敷地内は調査対象から除外している。

5-3. 結果

2011年5月7日（土）に行った第一回植生調査ではキンランの個体数をカウントし、逢坂山にて119本、お伊勢山にて110本確認した。2011年5月22日（日）に行った第二回植生調査ではタマノカンアオイの株数をカウントし、逢坂山にて385株、お伊勢山にて109株確認した。更に2011年11月12日（土）に同じくタマノカンアオイの株数をカウントした第三回植生調査では、逢坂山にて292株、お伊勢山にて125株確認した。

5-4. 考察

キンランにおいて、逢坂山の個体数は2009年度から2010年度にかけて減ってしまっていたが（表1を参照）、今年は2009年には及ばないものの、回復しているように見える。また、お伊勢山については、明らかに例年よりもキンランの個体数が増えている。杭を挿しながらカウントしているためダブルカウントとは考えにくく、キンランの個体数が増えたと考えられる。しかし、2010年度に比べ逢坂山の個体数も増加している（表1）のを見ると、昨年の反省を生かし、落ち葉かきをきちんとした結果が出たのではないかと思う。

表1. キンランの生息数調査

キンラン生息株数調査			
調査年数	逢坂山	お伊勢山	計
2004	20	14	34
2006	175		175
2007	98	55	153
2008	131	89	220
2009	144	63	207
2010	65	65	130
2011	119	110	229

タマノカンアオイにおいては、過去のどの植生調査と比べても圧倒的に多くのタマノカンアオイを確認することができた（表2）。これは、前述にもある通り、調査法の変更と調査人員の増加によって、見えづらい場所にある株も発見することが出来るようになり、カウント漏れの可能性が減ったことが理由だと考えられる。逢坂山にて、第二回植生調査時に385株確認したタマノカンアオイが、第三回植生調査時には292株に減少しているように見えるが、夏過ぎに行った逢坂山の草刈りで着手できた範囲が十分でなかったため、カウントに他の草が邪魔だったことが原因だと考えられる。また、お伊勢山のタマノカンアオイも、2010年から以前に比べ増加しているのがわかる。今年度は、お伊勢山の上を通っている送電線の保護のために電力会社の業者が背の高い樹木を伐採したことや、3月の東日本大震災の影響で倒れた樹木などによって、日当たりが良くなったことが関係するのではないかと考える。キンランでも述べたが、今年度は逢坂山に比べお伊勢山の手入れをしっかりすることができたことも、お伊勢山のタマノカンアオイの増加につながったのではないかと考える。

表2. タマノカンアオイ生息数調査

タマノカンアオイ			
調査年数	逢坂山	お伊勢山	計
2006	223	51	274
2007	172	92	264
2008	154	63	217
2009	233	83	316
2010	190	135	325
2011	385	109	494

今年度の植生調査では、多くのキンラン、タマノカンアオイを確認することができた。様々な要因が考えられるが、アズマネザサの伐採や、植物の芽を覆う落ち葉の除去などの、希少植物に日光が当たるようにするかわ道楽の定例活動は、絶滅危惧種を保護する役割を果たしていると考えられる。しかし今年度は、定例活動を逢坂山・お伊勢山で行う機会が例年より少なかったため、来年以降のキンラン、タマノカンアオイの植生に影響が出る可能性がある。今年度の反省を活かし、来年度以降はキンラン、タマノカンアオイの個体数の増減に更に注目するとともに、逢坂山・お伊勢山の希少植物が存在し続けられる環境の維持をできるようにしていきたい。

1 石川禎規 齋藤透 山西未紗 渡辺美里 2008年「私たちの身近な自然環境保全の必要性」『和光大学 学生研究助成金論文集』16

6. 今後への提供と課題

まず、今年度の調査結果を報告する。

ゲンジボタル調査の結果だが、過去最少の数値となった。考えられる原因はホタルの項目にも書いてある理由が考えられる。しか

し、今年度は鬼ノ窪川の周辺の変化が多かった。なので、我々も気付いていない別の何かが原因の可能性もある。

屋上池のホトケドジョウについては、今年度も稚魚の繁殖に成功した。水田のホトケドジョウについては、今年は確認できた個体数

が減少した。考えられる原因はホトケドジョウが調査地点以外の場所に移動したか、調査に落ち度があった可能性が考えられる。

植生調査はお伊勢山のタマノカンアオイ以外はどれもかなり増加をしている。その理由として考えられるのは、植生の項目でもふれたが、調査方法の変更と調査人員の増加、震災の影響で倒れた樹木のおかげで日当たりがよくなったことなどが考えられる。次に、お伊勢山のタマノカンアオイが30株ほど減少した理由は倒木などによって押しつぶされたか、お伊勢山の調査人数が少なかったためと考えられる。

以上を踏まえて、我々かわ道楽は今後も研究活動を続けていく。そのためにいくつか提言を示しておきたい。

まず、植生調査に関してだが、全体的に増加傾向にあるため、この状態を維持できるように今後も活動を続けていきたい。また、去年の論文に書いた逢坂山（和光山）を講義で使う際の入山の制限（入山人数何名など）の効果があった可能性があるため、今後も出来れば制限を続けてもらいたい。

次に、ホタルに関してだが、今までの調査と手入れを続けるとともに、新しい対策を考えねばならないと考える。

そして、最後に、我々がこれまで研究活動を続けてこられた理由の一つには、地域の方々からの理解があるということが重要な理由としてあげられよう。地域と我々大学生が、地域の行事や、普段からの地道な交流があったからこそ、住宅地の中にある地域の自然環境についての研究を続けてこられた。それは、地域住民との自然と地域へのお互いの理解という点が大い比重を占めている。その積み

重ねがあるから、地権者さんから、水田への調査の了承を得られ、水田跡地の使用許可も得てビオトープ（水田沼）も作ることができた。地域の人の理解と協力なしでは、この数年における研究の成果は得られなかったであろう。

定例活動及び、夏場のホタルパトロールについても同様である。特にホタルパトロールに関しては、上流は民家に隣接する水路で計測し、中流は民家の前のゴミ収集所、下流は民間の駐車場の川沿い付近で計測することになっている。学生が計測するため、不審行動として、扱われてもあろうことだが、毎年の積み重ねの信頼関係があるからこそ、当然のようにできる。そういった信頼関係を築くためには当然、大学側の理解も不可欠なので、今後ともご理解とご協力願いたい¹。

特に岡上は、多くの住民が住んでいるにもかかわらず、貴重な雑木林が残っている。環境保護活動をするにあたって、地域社会と自然環境の関係を考える上でここは大変よい資料となる。そんな緑に囲まれた土地に立地している和光大学、そして、その大学の学生である我々は幸運と言える。また、和光大学が立地している鶴見川流域は85%が住宅で埋まっており、岡上地域はその中でも有数なまとまった自然である。だからこそ、岡上地域の自然環境と人々の生活の両立のあり方についてはこれからも研究していく必要性は高い。

7. 終わりに

以下の調査結果から言っても、岡上全体が貴重な自然環境と地形が残っているといえる。都市と自然は相反するものだ、普通ならばそう思うだろう。だが、実際には都市といわれる場所にもこういった貴重な自然は残っているのである。

我々の周りの自然に目を向けると、逢坂山、またキャンパス南隣のお伊勢山には貴重なキンラン、ギンラン、タマノカンアオイなどの絶滅危惧種を含んだ希少植物が生息している。かつての雑木林の典型的な植生であることが判明した。鬼ノ窪川や和光大学の坂下にある水田での水質調査では、化学的酸素消費量やアンモニウムイオン濃度において富栄養化がみられるものの、ホトケドジョウやゲンジボタルといった谷戸にくらす水生生物が生息するために必要不可欠な水質条件の多くを備えていることが示唆されている。

我々かわ道楽は岡上の自然を保護するためには、無方針に活動するのではなく、植生調査やホタルパトロール、ホトケドジョウ調査などの調査、研究をし、その調査結果に基づいた保全改革を立てて、岡上に残った貴重な自然環境を守る必要がある。自然環境は日々少しずつ姿を変え、人間がその変化を認識するにはとても長い時間を要する。それゆえに、そうした変化を確認し、変化に対応した保全活動を実施するために、我々の研究・自然保護活動は今後も引き続き行っていく。自然環

境保全はホタルの生息だけ、ホトケドジョウの生息だけというように、一部分を保全して復元するべきものではない。谷戸の自然生態系全体を保全していくことで、はじめて意味のあるものとなるのである。

8. 謝辞

本研究とそのもととなった活動にあたってはキャンパス内において、筆者らの勝手な調査や森の手入れを快く見守ってくださり、様々なご協力をいただいた和光大学資産管理係の皆様、ホトケドジョウ調査のたびに屋上池の開錠にご協力下さった警備員の方々に負うところが大きく、またキャンパス敷地外においては、地権者である宮野薫氏、宮野憲明氏のご理解とご協力を賜ったことが大きな力となった。研究計画や緑地保全技術については、岸由二慶応義塾大学教授およびNPO鶴見川流域ネットワークの方々、鶴見川源流ネットワークの方々、板橋区ホタル生態環境館の方々から様々なアドバイスやご指摘をいただいた。調査と定例活動にご理解とご協力して下さいました岡上西町会住民の皆様、定例活動などにご協力下さった高橋透氏、こういった理解と信頼の上に本研究論文は成り立っている。あわせてここに感謝する。

文献リスト

- ・大澤進、高野繁昭、田邊光夫、平岡正三郎

- 「ホトケドジョウ(ドジョウ科ホトケドジョウ属)の生息環境調査」1998年『自然環境科学研究』No.11 70
- 木暮剛、佐藤誠、上野晶代、小泉真奈美、伊藤薫、平本晋也 「岡上の自然環境とその保全研究」2005年 『和光大学学生研究助成金論文集11』 19-51
 - 田中祐磨、金森弘美、大石絵美、佐藤頌子、かわ道楽研究班「足元の自然をみろ」2007年 『和光大学学生研究助成金論文集15』 17-49
 - 東京ゲンジボタル研究所『ホタル百科』丸善 2004年
 - 堂前雅史、木暮剛、形山浩子、平本晋也、〈和光大学・かわ道楽研究班〉「岡上地域の自然環境と保全活動」2006年 『現代社会関係研究 2005』 人間関係学科紀要編集委員会
 - 平本晋也、木暮剛、桑原英輔、上野晶代、伊藤薫、深海阿佐子、鳴島航志 「岡上自然環境と保全研究」2006年 和光大学 『助成金論文集13』
 - 松本慶太、田中祐磨、佐藤頌子、金森弘美、志田伸仁、庄司幸太郎、内藤香菜枝 「私たちのフィールド—岡上の自然環境と保全・保護研究」2007年 『和光大学学生研究助成金論文集14』 3-29
 - 遊馬正秀『ホタルの水、人の水』新評論 1993

指導教員のコメント

堂前 雅史 (現代人間学部)

本研究は、9年前より和光大学キャンパスおよび付近の川崎市麻生区岡上地域において自然環境保全活動を行ってきた学生グループによる自然環境調査の報告である。同じ場所であっても環境は刻々と変化していくので、毎年調査を行うことの意義は大きい。タマノカンアオイやキンランの株数が増加傾向にあるのに対して、ゲンジボタルやホトケドジョウ生息個体数が水質に大きな変化が生じていないのに減っていることは、大学付近の内水面環境で何かが起きていることを示していると考えられる。この原因を考えることは、この二種以外の生物を含む小流域生態系について重要な要因を見出すことになりうる。

しかし同時に毎年調査を行うということは、データ蓄積があるということでもあり、蓄積データのメタ解析をして、新たな結論を導き出すことや、新たな課題設定がなされてしかるべきである。例えばホトケドジョウの生息条件やゲンジボタル飛翔の天候条件などは、この1年間のデータから考察するだけではなく、過去数年分のデータをまとめて解析すれば、より正確な推定できるはずである。

ゲンジボタルの経年減少については、専門家のもとにデータを持って行き相談し、助言に従った対策を行い、新たな調査項目を設定し、その結果を討議し、さらに専門家にフィードバックするようになったことは評価した

い。論文にするのには間に合わなかったが、今年は専門家の助言を受けて、放射線の影響調査も行っている点も興味深い。

一方で結論部の提言について、研究結果を踏まえて、この研究を行ったからこそ判明した成果を論拠とした提言をしてほしい。「キャンパスを包むもの」という題名に込める内容になっていないことも気になる。キャンパスを包むものが何で、キャンパスが包まれていることが何を意味しているのかを論じているものを期待されるが、そうはなっていない。この研究テーマを考えた時は、そういう問題意識があったのであろうから、初心を思い出してほしかった。

また長年の活動をやっていればこそ、それによって地域の人々との関係がどのように変わってきたのかについての着目があっても良かったのではないか。文科系大学である和光大学の学生であれば、単に生物学的データを取るだけではなく、和光大学生でなくては議論できないような文化的・社会的視点からの環境論を論じてほしかった。

現在、都市部の生物多様性を保全する活動は市民セクターが担うべき公共的活動として先進国で注目されている。身近な環境保全を担う市民による市民科学としても、こうした研究は社会的意義を持っている。

生活圏を意識した 地域子育て支援と大学の連携の可能性

—岡上こども文化センターにおける親子ムーブメントの実態—

遊び種^{ぐさ}～たんぼっぼ～

09W022 小関 涼子 09T082 椎野 純
08W013 小澤 菜摘 08W043 南波 遥菜

1. はじめに

1-1. 「遊び種～たんぼっぼ～」とは

(1) 団体名の由来

2009年より和光大学におけるムーブメント教育・療法の研究グループを「遊び種～たんぼっぼ～」と名付けた。「遊び種」は、遊びの材料や遊びの相手という意味が込められている。その「遊び種」という言葉のように、ムーブメント教室に参加する子どもたち、母親、父親、学生が遊びの種を持ち寄り、みんなが集まることによって「たんぼぼ」の花のようなあたたかい場をつくりたい。そして、そのたんぼぼが綿毛のように飛んでいき、また他の場で花を咲かせていきたいという思いが込められている。

(2) 昨年度までの遊び種

～たんぼっぼ～の活動実績

昨年度の活動実績は、2004年度から和光大

学内で開催されてきた和光大学親子ムーブメント教室の活動を基盤とするものである。和光大学親子ムーブメント教室には、これまで、障害児を含む地域の親子が参加しており、開始当初より和光大学の学生が企画・運営に関わり自主的な研究活動を展開してきた。2007年度より継続して、学生助成金の制度の下で研究成果をあげており、2009年度からは学生研究グループを「遊び種～たんぼっぼ～」と名付け、過去の研究を経て「共に存在し合う場を創るドラマムーブメントの可能性～和光ムーブメント教室の実践をもとに～」という研究テーマに辿りつき、ムーブメント教室の参加者は子ども達だけでなく保護者や自分達学生も含んでおり、そこに居る全ての人達が「楽しい」と感じる環境づくりを目指して、プログラムを考案し全8回の教室を行った。また、学外で開催される子育て支援や障害児支援の活動にも積極的に参加しており、2009年2、3月には、大学と地域の双方におけるさらなる人材育成の場として「さがまちコンソーシアム大学『学生講師』プログラム」という、地域市民向けの講座の企画・カリキュ

ラムづくり・当日の講師までの一連の講座運営を学生グループが担当する試みに、本研究グループの企画が採用され、室内プール（さがみはら北の丘センター）、劇場（グリーンホール相模大野）という地域の施設（環境）を活かした親子ムーブメント教室を開催した。2010年度から、和光大学付近にある「岡上こども文化センター」にて幼児親子を対象としたムーブメント教室を月に一回のペースで行った。

（3）遊び種～たんぽぽ～になるまでの 和光大学によるムーブメント活動実績

和光大学では、2004年度から学内で、和光大学親子ムーブメント教室の活動をしてきた。

和光親子ムーブメント教室では、ダンスムーブメントを活動の基軸として取り入れている。

主に、ダンスムーブメントを中心に教室を実施してきたが、学生たちの参加で構造的な活動へと発展し、2007年度からは、特にプログラムにテーマ性を持たせたりして、その世界観を演出するオリジナルの遊具を創作し、一貫したドラマ性のある環境づくりを目標とした。毎回、活動の最初から最後まで統一感を持たせるように工夫されたプログラムづくりを意識した教室を展開した。

1-2. 活動の基盤となるムーブメント 教育・療法とは

（1）ムーブメント教育・療法の概要

ムーブメント教育・療法とは、マリアンヌ・フロスティグ博士（Frostig,M）の長年の研究により体系づけられてきたものである。1970年に理論や実践の著書を公にし、体系化を行い、欧米諸国では、人間の発達の基礎づくりのために有効な手段として注目されてきた。国内では、小林芳文らがフロスティグの論を基礎に、スイスの神経心理学者であるナビール（Naville,S）やドイツのキパード（Kiphard,E）らと交流を深めながら、研究と臨床を行い普及させており、既に、心身の発達に障害のある子どもたちの療育に有効であると評価されている。近年は、保育や教育の現場、高齢者を対象としたリハビリテーションなど、幅広い活用が報告されている。

ムーブメント教育・療法で行われる身体運動の課題には、身体技能だけでなく、「情緒や社会性」、「認知」といった他の諸機能の発達を支援するところにある。つまり、子どもの発達の全体に関わる機能を身体的の結びつけてとらえており、諸機能の発達にとって必要な身体運動を十分に経験させることで、調和のとれた発達を支援する。また、指導者中心の訓練的活動とは異なり、遊び的要素やファンタジーの要素を活かした子ども中心の活動の中で、子どもたちの主体性や喜び、達成感を引き出すことをねらいとしている。そのために、個々の子どもたちのニーズに合った適切な環境を設定することを重要視し、様々な遊具や音楽の工夫などによって、参加する子どもたちが自ら動きたくするような環境を創造することで、自然な動きの拡大を目指している（大橋、2008）。

(2) ムーブメント教育・療法の基本理論

① 動くということの重要性

ムーブメント教育・療法では、「動く事を学ぶ (Learn to move)」と、「動きを通して学ぶ (Learn through move)」という2つの能力を育てること基本にしている。

「動くことを学ぶ」とは、主に運動発達（あるいは精神運動発達）を助長することであり、それには運動能力（姿勢の安定性能力、移動能力、物の操作能力）や身体能力（健康な身体、調整力などの運動適性）が含まれている。

「動きを通して学ぶ」とは、認知能力を助長すること、すなわち身体についての意識、周囲や空間の探求・認知能力や視・聴知覚運動能力と概念化などの文字や言語に通ずる全教科的能力、さらには情緒発達（自己の概念の確立、仲間関係）を育てることである（小林、1985）。

② 健康と幸福感

身体的な活動は、子どもの成長パターン、血液の循環、病気に対する抵抗に大きな影響を及ぼす。子どもの情緒的な健康は、運動を行う時のも子どもの無邪気な喜びや、運動の諸技能の学習が進歩するときに伴う習得の感情によって高められる。逆に、優れた身体的、かつ情緒的な健康は、課題に集中したり、学習したりする子どもの能力に関係している。

ムーブメント教育の最終的な課題は「健康と幸福感の達成」と言われている。参加者一人ひとりの「成功体験」を大切に、挑戦する気持ちがおきることで、更に活動に対する集中力も上がるのである。

③ 「環境」の重要性

ムーブメント教育・療法では、環境のあり

方が大事だといわれている。特別な器具がなくても活動ができるが、自ら動きたくなる環境として空間や遊具を有効に活用し、人材という環境として参加者が関わりあうことで、充実した展開を生むことができる。身体を取り巻くさまざまな「もの」は、全てが動きを引き出す「環境」であると考えられる。多様な「環境」創りの工夫によって、個々の主体的な動きを引き出し、新たな環境が作り出され、またさらに動きが拡大していく（大橋、2008）。最も着目すべき点は、「人も環境である」ということである。生きることに於いて、一番身近な環境は自分自身の身体であり、共に生活する誰かの存在なのだ。身体意識の発達や、時空間概念の形成によって、「自分－他人」の関係が把握できるようになる。そして自己と他者との認識が確立され、コミュニケーションの世界が広がると考えられている。物理的な「場としての空間」だけでなく、「人と人」との関係性、「地域の中から生まれる繋がりとしての環境」も重要なのである。

④ 集団の中で個を活かす・個の支援に集団を活かす

情緒的および社会的発達によって、人間は各年齢段階で、さまざまな社会的役割が課する要求に適応することができる。ムーブメント教育・療法は、子どもたちに成功経験を与え、集団活動において他の子どもたちやパートナーとの相互関係を持たせるので、子どもが社会的および情緒的に適応することに役立つ。身体的な活動を通して空間を共有する中で、他者を気づかうことを知りながら、「交代する」「順番を待つ」「協働する」ことなどを学ぶ。前述した通り、子どもの情緒的な発達は運動によって促進され、活動の中で

身体を動かしながら達成感を覚え、社会的関係で満足を得る。

⑤ マイナスを減らすよりもプラスを増やす
ムーブメント教育・療法には、福祉や医療、教育の現場に個性を尊重しながら人間を包括的に考え、「生きることの全体像」をとらえようとする動きや個人と環境の関係性から「〇〇があれば、△△ができる」という視点、「マイナスを減らすよりもプラスを増やす」という視点から支援の方向性を探ろうという取り組みが増えてきた（小林・大橋、2010）。

1-3. 研究目的と方法

(1) 研究目的

本研究の目的は、家族がつながりあってできる「地域」という場における子育てのあり方を見つめ、現代の家族内および家族間のコミュニケーション能力や生活圏内にある「遊び場」の実態を探り、地域コミュニティ形成のためのムーブメント教育・療法の可能性を確認することである。様々な立場の者が、共に生きる場の一員という自覚を伴って関わりあうことを前提とした「遊び」の力の影響を考察していく。互いに学びあう地域コミュニティの形成、家族間コミュニケーションに焦点をあてたムーブメントプログラムの考案とその実践を目標とする。

様々な形で、子育て支援の必要性が叫ばれたのはこの数十年のことではないだろうか。核家族化の進行や、遊べる場が減っているという事実は既に驚かれるものではなくなっている。現代の子育て環境の中で、家族の隔てなく「地域」という単位で子どもを育

てていくことは難しいだろう。子どもの育て方を誰かと共有できない親の中には、子育てのための支援を、何かを教え与えてくれるもの、つまりサービスと捉える傾向があるのではないかと、今までの実習を通して感じた。「サービス」としての地域（家族）支援ではなく、親・子ども・学生・行政など多様な立場にあるからこそ互いに学びあえるという相互補完的コミュニティの中にこそ、子育ては根づいていくべきではないかと私たちは考えた。

今回は和光大学から徒歩圏内にある岡上こども文化センターでの実践を中心に、日常生活に密着した共生の場づくりを目指す。そして「集団」と「個」が矛盾しないコミュニティのあり方を、ムーブメント教育・療法の理論を基に明らかにしていく。また、「児童館と地域」「大学と地域」などの関係性や「子育て支援」という言葉が近年叫ばれるようになった背景を探りながら、広くは現代における「市民観」を見つめなおすと同時に、「ご近所」の環境力を支えるムーブメント教育・療法の可能性を追求する。

(2) 研究方法

本研究は、岡上こども文化センターで行うムーブメント教室での調査を基本の題材とする。岡上こども文化センターでの教室では、遊び種～たんぼっぼ～を中心に、ムーブメント教育・療法の授業を履修する学生達で運営し、月に一度実施する。その際、保護者の了解を得た上で、ビデオや写真に活動の様子を記録する。実習の最後には必ず、職員の方々も交えた反省会を行う。また、岡上こども文

化センターでの活動は昨年度から引き続いて行っているため、昨年度の記録も使用する。

また、和光大学内外で実施される他の親子ムーブメント教室にも可能な限り参加し、比較対象として記録する。

活動に関わる学生や、岡上こども文化センターのスタッフ、参加する親子などを対象としたアンケートやインタビューもあわせて行う。

2. 日本の子育て支援の現状と課題

2-1-1. 現代の日本における 子育ての大きな課題

現代日本は様々な問題を抱えているが、中でも子育てに関する課題は依然として大きい。すでに、子育て支援という言葉（その存在）は新しいものでなくなりつつある印象を受けるが、北野ら（2006）はその著書の中で、「20世紀末から21世紀にかけて、子育て支援の課題は大きな転換期を迎えた」と述べている（p.4）。

社会の一部の専門機関が、特別の限られた対象に支援をするのではなく、社会全体が次世代の子どもの育ちに関心を持ち、それぞれの立場で多種多様なニーズにあわせて支援することが必要とされているのである。そんな現代の日本の子育てが抱える問題点を、改めて整理し大まかに3つに分けて論じる。

(1) 子育ての孤立化

戦前の日本では、生まれ育った場所で親子と祖父母世代が同居し、三世代家族や大家族

族がほとんどであった。子育ては地域全体で分担され、祖父母から母親など、教育情報伝達機能がきちんと働いていたのである。しかし、1960年以降、高度経済成長期に入った日本は、都市化の進行により、地域共同体の急激な変化や崩壊を迎え、核家族化が進んだ。

第一次産業から第二次産業へ、さらには第三次産業の台頭により労働事情も激変したために、いわゆる「転勤族」の一般化など、地域コミュニティーを作りにくくなったことで、核家族化の一般化が進み、子育ての孤立化の大きな背景となっている。

近所で世間話をしたり、子育ての悩みを気軽に相談したりできる人が身近にいないことで、母親が一人ですべてを抱え込んでしまう状況が増加しているのである。

(2) 親になれない親

現代において一般的に子育て世代と呼ばれる20代～30代は、いわゆるバブル期を幼少期あるいは青年期に経験し、コンビニエンスストアの普及など、物的豊かさや便利さの追求が加速する時代の中で育ってきた。

それは、言い換えると、都市整備や再開発などを背景に遊び場となる自然環境が減少する一方、テレビゲームなど一人でするものが増えることで遊びを通じた交流が少なくなった時代である。つまり現代の子育て世代は、コミュニケーションの形が急激に変化していった、不安定な時代のまっただ中に育った世代なのである。

また受験戦争などを背景とした習い事の増加などにより、家事労働を自然に子どもが手伝い体験する場がなくなっていった時代でも

あるため、自らが親になる以前に小さな子どもの面倒をみる機会が非常に少ないことや、他の子育て環境と交流をもつことが少ないことが要因となり、現代の親世代が子育てに対する具体的あるいは現実的イメージを持ちにくいことが子育てにおける大きな障壁となっている。

母親たちの主な情報源は育児雑誌やインターネットであるという調査もあり、その場合一般的な子どもと自分の子どもの発達差異に不安を感じても、すぐに相談できる場がなく対応できないなど、子育てにマイナスイメージをもつ親も少なくない。

(3) サービス化する「子育て支援」

現代は、サービスをお金で買うことが一般化した時代でもある。地域コミュニケーション、ひいては個人間のコミュニケーションの在り方も変容し、知り合いと子どもを預け合うことに煩わしさを感じるために、子育てを専門家に外部委託する傾向も一層強まっている。お金を払ってサービスを受けるというシステムの中で「子育て」が商品化されていくのである。サービスを与えるもの／受けるものという構造が強まり、サービス受給者として必要以上に権利主張をする親も増えている。

以上の問題点を踏まえ、重要なのは、親が親として育つこと、そして社会機能のためではなく、家族機能に対する支援が必要であるということである。

「子育て支援は単なる親支援ではなく、親子関係、家族関係など様々な関係性への支

援でもあります」という大豆生田(2007)の言葉にあるように、現代において「子育て支援」は、その在り方を問われる重大な課題であることは間違いないのである。

2-1-2. 子育て支援の始まり

そもそも、「子育て支援」という言葉が声高に叫ばれだしたのはいつなのだろうか。子育て支援という言葉の始まりについて、北野(2006)は以下のように述べている。

日本で「子育て支援」という言葉が広く用いられるようになったのは、1994(平成6)年12月16日に「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」(エンゼルプラン)が発表されてからである。(中略)以前の保育政策は、家庭で十分保育できない子どもに対する、いわば「消極的な」政策であった。それに対し、「子育て支援」は、地域・社会で子育てを援助しようという、いわば「積極的な」政策である。(p.20)

政策転換の背景は少子化問題である。少子化が社会問題として注目されるようになったきっかけは、1990年(H.2)6月9日に厚生労働省が「1989年人口動態統計の概況」において、合計特殊出生率が史上最低の1.57%と発表した、いわゆる「1.57ショック」だ。そのため、1990年代の「子育て支援」は、少子化対策としての子育て支援だったのである。しかし「子育て支援」とは、そもそも特に今現在子育てをしている親や家庭を支援することが目的であるはずだから、少子化対策として行われる子育て支援における現状分析的

確さやその対応には、問題点や疑問点が多い状況であった。

2-2. 現代日本の子育て支援の背景にある制度

少子化対策のためだけの「子育て支援」という考え方ではなく、現代における家族や社会（地域）の在り方が様々な面から見直され出されたのが、「次世代育成支援対策推進法」である。この法律は、急速な少子化の進行や家庭及び地域を取り巻く環境の変化に伴い、次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ育成される環境の整備を図ることを目的として2003年7月に成立した。「少子化対策」という言葉ではなく、「次世代育成」というキーワードを打ち出したことなど国民的運動として子育て支援を進めていくための布石が打たれた。次世代育成支援とは、「家庭や地域の子育て力の低下に対応して、次世代を担う子どもを育成する家庭を社会全体で支援すること」と定義されている。

1990年代の子育て支援の反省を活かし、性別役割分業が少子化の背景にあることが明確に示され、改めて「何のため（誰のため）の子育て支援なのか」が問われたのである。

同時期に、「少子化社会対策基本法」という、少子化社会において講ぜられるべき施策の基本理念を明らかにした法律が国会審議を経て議員立法として制定されるなど、それまでの対処療法的な対策ではなく、総合的な社会転換を目指した法整備が進められた。

少子化社会対策基本法は、総合的かつ長期的な少子化に対応するための大綱の策定を政府に義務づけており、「少子化社会対策大綱」

が2004年6月に閣議決定された。「若者の自立」や子育ての社会的支援を考えた「子育ての新たな支えあいと連帯」という考え方が重要課題に取り上げられたことが特徴である。

少子化社会対策基本法や少子化社会対策大綱の趣旨や理念に基づき、2004年12月には「子ども・子育て支援プラン」が策定される。これは新々エンゼルプランとも呼ばれ、それまでのエンゼルプラン・新エンゼルプランにできなかった、全ての地方公共団体および301人以上の企業に行動計画の策定を義務づけたことなどは画期的であると評価されている。

また、2001年7月の学校教育法や社会教育法の改正を背景に、文部科学省が次世代育成支援の一環として、2003年度より「地域と学校が連携協力した奉仕活動・体験活動推進事業」を展開している。これは地域と学校の連携によってコミュニティーの活性化と再生を図り、地域の教育力の向上を目指すものである。

子育てに関する様々な問題は、個人（女性）や家庭の問題ではなく、社会全体の問題であるという捉え方に、日本が変化しはじめたのである。

2-3. 地域拠点型子育て支援の取り組み

少子化社会対策などを背景に子育て支援が広く認識される中で、それぞれの地域における拠点型の子育て支援が大きな広がりを見せている。

拠点型子育て支援には、主に保育所などに併設されている「地域子育て支援センター」をはじめ、NPO法人などが運営している「つどいの広場事業」、社会福祉協議会が中心と

なって進めている「子育てサロン」などがある。

今までは、拠点型子育て支援は行政が進めるものという考えがあったが、現在では2で述べたような法整備を背景として、NPO法人をはじめとする様々な団体において実施されるようになった。地域ボランティアや企業との連携を深めるなど、既存の施設型福祉支援を超えた新たな形が模索されているのである。

拠点型子育て支援における「子育てひろば」事業のポイントを挙げると、

- ① 総合性：総合的な視点から子育てを育成する
- ② 主体性：単なるサービスの支援ではなく、それぞれ力を持った人たちが力を発揮できる場であるとされている。

この流れの中の一つとして川崎市の児童館施設である岡上こども文化センターはあり、そこで私たちはムーブメント教室活動を行わせて頂いているのである。

3. 岡上こども文化センターにおける親子ムーブメント教室の実際

3-1. 岡上こども文化センターにおける親子ムーブメント教室の始まり

学生が2010年度の実践の場を探していた際に、和光大学の堂前雅史教授より大学付近にある「岡上こども文化センター」の存在を紹介してもらったことが、きっかけであった。それまでその存在も知らず、通学路として通過するだけの道のりの印象が、まったく違う

ものとなるのであった。教授に岡上こども文化センターの鈴木章之元館長をご紹介頂き、月に1回のムーブメント実習が実現した。この詳細は4-4. 鈴木元館長のインタビューでふれる。現在、活動は2年目に入り、2010年度に10回、2011年度には11回の実習を行っている（参考資料A参照）。

3-2. 実施体制

活動は、ムーブメント教育・療法を学ぶ学生10名前後で毎回行われている。岡上こども文化センターの一番広いスペースをお借りし、実施している。

実施までの流れは、まず1ヶ月～2週間前くらいまでに上級生を中心にプログラムを作成し、約1週間前から前日にかけて具体的な準備を進めている。前日と当日の朝、リハーサルを行い確認をする。また、岡上こども文化センターに貼ってもらうポスターを毎回作成し、1か月前には掲示してもらっている。2010年度は各月の担当を決め、プログラム作り及びリーダーを務めたりした。基本的には上級生がプログラムをリードし、他の学生は様々な声かけをしながら、役割に沿って臨機応変に場を支えている。毎回の教室終了後に、担当して下さる職員の方を交えた反省会を実施している。

活動は、基本的に10時から12時までの2時間で実施している。

3-3. 活動の基本的な流れ

毎回の活動には、おおまかな基本の流れがあり、その回ごとにストーリーや目標に合わ

せて順番を入れ替えたり、中身のバリエーションを変えたりしている。基本の流れは以下である。

① フリームーブメント

岡上こども文化センターに到着した親子から、部屋にある好きなムーブメント遊具を使って自由に遊んで場所や人の環境に慣れってもらう時間である。このとき、学生スタッフも親子に混ざって一緒に遊び、参加してくれる子どもの「お気に入り」を見つけたり、特性を知ることによってその後の活動を円滑に進める情報を得る重要な時間である。

② 走行歩行ムーブメント

部屋の中をピアノの音にあわせて歩いたり走ったりする。動物の真似などを交えて模倣や創造性の達成課題が含まれている。全員で大きく動くため、場に一体感が生まれる。

③ 集合・呼名

活動に参加してくれた子どもの名前を簡単な歌とダンスをしながらひとりひとり呼んでいくものである。ここでは、自己認識・他者認識の芽生えを促し、さらに自己表現の意欲や創造性の能力向上がねらいである。呼名は、子どもたちが楽しみにしている活動のひとつである。

④ ダンスムーブメント

3曲の音楽を使って簡単なダンスをする。音楽にあわせて楽しく体を動かす中で、自己意識、身体意識、空間認識を高める。

i) あたまあたま

簡単なリズムに合わせて、頭やお腹、肩など自分、または他者の身体部位をリーダーの指示に合わせてタッピングし、確認していく。

ii) ゆらゆら

ゆっくりとした心地よいリズムの音楽に合

わせて、座ったまま上半身を前後左右にゆらゆら揺らす。前後左右に身体を揺らすことで方向性、空間認知の能力の向上につながる。

iii) グッパー

この曲では、じゃんけんの「グーとパー」を手の形を基本とし、手を握る、開くの動きで踊る。グーとパーを前に突き出したり、上や左右などに動かしたりして、空間認識能力や、大きく小さくなどの二極性を取り入れた活動である。

⑤ 設定ムーブメント

子どもたちの発達段階を考慮し、達成課題を設定してプログラムをたてる。季節性や物語性を重視し、参加者が自然に設定の中へ入り込めるよう工夫している。

⑥ パラシュートムーブメント

パラシュートという大きな円形の布を参加者がもち、揺らしたりドーム型にしてダイナミックな活動を展開するとともに、全員で息を合わせるため大きな一体感が生まれる重要な活動である。

⑦ 振り返り

紙芝居を使って簡単にその日の活動を振り返る。短期記憶の課題でもある。

3-4. 活動事例紹介

3-3で紹介したような基本の流れを、毎回季節感やストーリー性を重視しながら展開していることは既に述べたが、ここではその中から、2011年9月の活動を紹介する。教室では必ず、保護者に当日のプログラム表を配布しており、参考資料Bはこの回のプログラム表である。

テーマ「やきいもになって遊ぼう！」

日程：2011年9月10日（土）10：00～12：00

- ① フリームーブメント
- ② 走行歩行
- ③ 集合・呼名
- ④ ダンスムーブメント
- ⑤ 設定ムーブメント「やきいもになって遊ぼう」

9月は秋らしく落ち葉などのイメージから発想し、子どもたちがやきいもになるというストーリーのプログラムを展開した。まず始めに畑を耕すところからスタートし、パラシュートの上に丸めた新聞紙を置いて凹凸をつけ、その上を踏みしめながら歩く活動をした。足の裏の感覚を楽しみながら、イメージを育てアクティブに体を動かすことでストーリーへの導入となった（写真1）。



写真1 畑を耕す様子

次に、子どもたちに4色のビーズバックをランダムに2つずつ配り、先ほどの畑に置かれた4色の箱の中に、同じ色のビーズバックを入れて種まきに見立てた（写真2）。



写真2 種を箱に入れて様子

種まきが終わると、地中にもぐる様な声かけをきっかけにして大きなダンボールプールを出し、トンネル型の入り口から潜ってプール内の新聞紙で遊んだ。その後、それぞれの保護者にプールの外へと引き抜いてもらい、子どもたちがさつまいもとして収穫されたシーンとなった。トランポリンに数名ずつ乗り、回数を決め数えながらジャンプして焼かれる演出をし、やきいもになった子どもたちを、今度はひとりずつスクーターボードのトラックに乗せる。

学生がトラックを引いて声かけをし、保護者の待つポイントまでいき、買ってもらってゴールとなった（写真3）。



写真3 学生がやきいもトラックを引っ張る様子

⑥ パラシュートムーブメント

ひとりひとり10回ずつ乗せたあと、子どもたちは下に入り、色づいた葉っぱをふらせた(写真4)。



写真4 落ち葉が落ちる様子

⑦ 振り返り

各シーンのイメージを紙芝居にし、簡単な質問などを交えながら活動全体を子どもたちと振り返り、感想を引き出すとともに、短期記憶の課題も含まれている。

4. インタビュー調査をもとにした考察

4-1. 参加学生を対象としたインタビューから

参加した学生を対象としたインタビューを数回に分けて行った。全体を通してまとめると、いくつかのポイントが明らかになった。

① 生活圏という意識

「最初はこ文(岡上こども文化センターの略称)の距離がとても遠かった」というように、精神的に遠く感じていたことが伺えた。しかし、活動をする中でそれが縮まり、「登

下校などで出会ったときに挨拶や軽い世間話ができる嬉しい」という声が多く、和光大学の通学路が生活圏へと変わっていった意識の変化がみられた。

② 親子の変化

「母親たちだけでの会話が減った」「呼名のときなど他の子どもの活動もみるようになった」や「アドバイスをしてくれるようになった」など保護者の意識の変化への気づきが多かった。また、「母親から離れられるようになった」「サーキットやパラシュートが出来るようになった」など子どもの変化に対する気づきも多かった。

③ 自分たちの変化

「学生の一体感の深まり」が出てきたことが分かった。名前を覚えてもらえていた喜びから、自分が存在するのだという実感を得た学生もいた。子ども目線でのプログラム考案の工夫や、反省会での議論も活発になるなど、自分たちの変化も感じ取り、チームとしての能力も向上している。

④ スタッフの存在

中立の立ち位置でいてくれるスタッフの方々への感謝をみな口にしていった。教室が円滑に進むよう広報してくれたり活動の様子によって保護者宛のプリントを配布してくれたりと、様々に協力してくれている実態が確認された。

⑤ 活動を通したコミュニティーとしての変化

学生を対象としたインタビューで、特に印象の深かったものとしていくつかのプログラムが挙げられた。2011年度のハロウィンの回では、参加する子どもたちに仮装をしてきてもらいとても盛り上がったが、仮装して活動するわが子の姿を写真に収めようとする保護者

が多く、全体としての求心力に欠ける場面もみられた。しかし、3-4で紹介した約1年後のやきいもの回では、保護者の活動参加度が非常に高くなり、自分の子どもだけではなく他の子どもにも注目していて、場の一体感が強かった。学生が引いていたスクーターボード（やきいもトラック）をあるお母さんが持ち、自分の子どもを乗せて他のお母さんに売りにいく風景などが見られたことが、印象的だという意見が多数出た。保護者の自主的な参加により、学生が予想もしなかった展開がうまれたことに非常に驚き、嬉しくなった瞬間だった。ムーブメント教室という遊びの場を、学生だけでなく参加する親子も自主的に盛り上げようとし、創造的発想により新たな展開を生み出すまでになったことに、コミュニティとしての成長を感じた。

4-3. 参加親子を対象としたインタビューから

岡上こども文化センターに通う保護者を対象とした座談会を行った。

① 自宅と岡上こども文化センターの距離・通う頻度

「子どもと歩いて20~25分で、保育所に通うまでは週2~3回、入所後月3回通っている。」という意見を始めとして、柿生や町田から電車で来ている親子から、自転車でも5分かかるかどうかという親子など、様々だった。また、頻度に関しては週に1~2回という声が多く、保育所に行き始める前はほぼ毎日きていたということだった。

② 岡上和光出張ムーブメントの感想（参加を通して感じた子ども・家族・学生の変化

など）

「和光大学のことを知れたり、他の子育て支援に参加したり、親側の視点が広がった。」

ムーブメント教室がはじまるまでは、外部の先生などがきて親子で一緒に何かをするようなイベントがなかったため、岡上こども文化センターに来ると安心してしまって、親は親でおしゃべり、子どもは放し飼いということが多かったが、ムーブメント教室は一緒に遊ぶチャンスをもたらえる場であるという声が挙がった。子どもの成長を確認する場にもなっている。全体を通して、「ありがたい」「楽しかった」という声が沢山寄せられた。大学生と触れ合える場も貴重で、親も少し離れて任せてみていられる。「ストーリーがあるのがいい！」という声もあった。

しかし実態として、「子どもは全体の流れを理解するには至ってない。ひとつひとつの活動を楽しんでいるので場面展開が速すぎるときがある。逆に、シーンの説明が長すぎて、待ち切れず集中が途切れて遊びだしてしまう」という問題点も上がった。

③ 家庭の様子

呼名の歌やぐっばーダンスは子どもも覚えやすく、複数の親子が家でも使ってくれているようだった。ダンスをやるときは、子どもがリーダーのように振る舞い、お母さんに「踊って」という場面もあり、自宅でもその日のムーブメントの話題が積極的に挙がるようである。

話を聞く中で、利用する親子にとって岡上こども文化センターは大きな子育て広場であり交流の場であることが分かった。情報交流の場であり、生活の一部なのである。「こ文

に来て友達ができた。」「岡上地域が飛び地で閉鎖的なため、こ文がなかったら子育てできなかった」という保護者もいた。地域の中で、家族以外に子どもを知って見ていてくれる大人がいることは、子育てを強く支えているのである。

また、和光大学岡上出張ムーブメントと他のムーブメント教室の両方に来ている保護者を対象としたアンケートも合わせて行った。岡上でのムーブメントと他の教室との違いについて、「子どもは、意外と大学でのムーブメントが好きな様子。大学で出会う色々な年代の友達や知らない場所に、不安ながらも興味を示している。母親自身は、岡上の方が時間に少し遅れても大丈夫と思えたり、教室終了後も夕方まで遊ばせていけるというメリットを感じている。大学でのムーブメントは、お弁当や着替えの準備があったり、時間に遅れないように気を張って参加している。一方で、大学の方が大きな設備やスペースがある分楽しみも大きい」や、「こ文は気軽に参加できる。大学の教室は療育になればという思いが強い。大学の方は対象年齢・人数が限られているが子文は比較的年少児が多く途中からの参加もあり、他の子とトラブルを起こさないか気にかけている。こ文は他の部屋のおもちゃに気がいってしまうが、大学は決まった空間でできるので集中しやすい。」という声が挙がった。双方にメリットやデメリットはあるが、継続性や環境の面から、地域コミュニティを支えるという点で岡上での活動の重要性は高いだろう。

4-4. 鈴木章之元岡上こども文化センター館長へのインタビュー

この活動のきっかけをつくり、支えてくださった鈴木元岡上こども文化センター館長（以下鈴木さん）にもインタビューを行った。

(1) 岡上こども文化センターについて

すべてのこども文化センターは、中学校区と対応して建てられており、麻生区内には10箇所ある。岡上は飛び地だからセンターができた。岡上地区は農業地なので公園などが他に比べて少ないため岡上こども文化センターに子どもたちが集まりやすく、また2つ町内会と小学校区がちゃんと重なっているため、地域力が強くイベントも多い。鈴木さんが現在受け持つ片平地区とは、センターへの来館者数や親子の様子に大きな違いはないが、片平は新興住宅地で通勤族が多いため母親同士のつながり・地元のつながりが少なく、比較しても岡上は地元力が強いということだった。

岡上こども文化センターは、川崎市としては平成5年4月にできたものであるが、平成15年から民間に委託運営されており、それを担当しているのが鈴木さんが理事を務めるNPOかわさきココロである。

(2) NPOかわさきココロ

平成18年度よりこども文化センターの運営委託制度が公募化されることを受け、平成17年より、その委託制度に応募するために児童館の館長OBや学童保育経験者などによる有

志ではじまった団体で、現在は川崎市からの委託料で運営されている。

コッコロの理事である鈴木さんは、メンバーの中心として活動されており、コッコロ立ち上げ以前は民間企業で働きながらPTAなどで地域に密着して子育ての現場でノウハウを培ってきた方である。現在もコッコロは、片平と岡上のこども文化センターの運営・管理をしている。

(3) たんぽぽほどの活動について

それまで、他の大学生団体と交流があったために、岡上こども文化センター（コッコロ）としては学生を受け入れることに抵抗はなかった。たんぽぽを受け入れるにあたって鈴木さんとしては、①場所を提供する②地域の親子へ向けた広報はスタッフが請け負うけれども、教室の中身は学生がつくることが条件であった。学生の主体性を伸ばし、参加する保護者（親子）が「お客様」にならないようにするために、スタッフが全てやるのではなく学生に挑戦させるという考えが根底にあった。また、和光大学のムーブメント活動記録などをみて、乳幼児に関する部分（教室）が少ないと感じたため、発達の流れをより知ってほしいというねらいから、乳幼児対象のムーブメント教室を子育て支援センター「つどいのひろば事業」の時間枠での活動として提案をして下さった。更に、岡上に生活している親子と岡上を毎日通る和光大学の学生たちとの関わり合いを模索していた中で、本来の地域連携の形を目指し、単発で終わってしまうのではなく連続性のある活動を重視して提案して下さったのである。

(4) 地域と大学が連携していくには

足元を固めないと外には出ていけない。大学生にとって、学んだことを実践で活かす事は大事である。また、学生にも行政にも親子にも、互いにメリットがあるからこそ「協働」、「共働」になるのである。しかし、互いに情報発信先が分からず、つながりにくい現状を改善するためにコーディネーターという役割が必要だという。つまり、学生／親（子）／センター／行政などをつなぐ役割をし、情報の橋渡しや交渉がうまくいき相互にメリットのある関係を作り出していく人が必要なのである。それが児童館の館長に求められている能力でもある。プロではないが人材として学生を実践学習の子育ての現場に関わらせることで、互いに学びあうという挑戦の場が生まれた。

連携という点で、引き継ぎも重要である。人が変わることで活動が途切れたり流れが悪くなったりするのはよくない。団体として、信頼を勝ち得るのは時間がかかるが、失うのは早い。例えばその点で、行政と連携していくことの難しさがあると鈴木さんは語っていたが、それは学生が地域に関わることに言え、大学外で活動していく際に気をつけなければならないと感じた。

(5) これからの児童館としてのこども文化センター

児童館は、職員と子どもだけの閉じた関係では発展していかないようである。職員が直接手遊びなどを教えたり、一緒に遊んで直接

面倒を見たりしていただくだけではセンターに来られる目の前の数十人の子どもたちだけしか支えられない。他団体と組んで区全体の子どもをみていくために何ができるかを考える必要がある。そのために前述したコーディネーターの役割が不可欠なのである。

かつ施設そのものも、地域における調整役としての機能を果たすことが重要である。「ワンストップ」と鈴木さんが表現されたように、そこに行けば情報が整理でき、地域のことが全てわかるというように、「ハブ的な役割」であるべきなのだ。あちこち探し回らなくても情報収集や様々な体験活動ができることで、関係性支援となり地域的密度の向上にもつながる。

人材としての大人や学生をどう活かすか、またどう繋げていくかが、児童館に求められている。建物があるだけでなく、そこにどのような人材を呼び込み、どう繋がりをつくるかが重要である。

(6) 岡上こども文化センターでの実習を行う前とその後での参加者(親子)の変化

① 母親たちの子どもに対する接し方の変化

良い意味で言えば、子どもの自主性を尊重するようになったが、悪い意味で言えば子どもに対するしつけが甘くなった(注意しなくなった)と指摘されていた。自由とマナー違反の混同があるが、今後もムーブメント活動に関わる中で、互いに教えあっている可能性があると考えられる。

② 人見知りがなくなった

子どもたちは、学生との関わりの中で他人との距離の取り方が近くなった。保護者もブ

ロ相手だと完全に受け身だが、学生相手だからこそ互いに学び合うという意識がある。そのため不満だけで終わらずアドバイスももらえる。岡上での教室は参加者全員が初めてだったからこそ、親に対する声掛けも意識でき、学校の中では分からなかったことも気付けた。

5. 岡上こども文化センター オリジナルプログラムの挑戦

これまでの体験や反省会、また学生インタビューでも上がった意見をもとに、岡上こども文化センターで培ったコミュニケーションの基盤がなければできないプログラムづくりに挑戦した。それが「親子シャッフル」である。自分の子どもではない子とペアを組み活動するものであるが、仮説としては、岡上こども文化センターの地域力と2年間で築いた学生と親子の関係性によって、親子を入れ替えても活動が円滑に進み、他の子どもと遊ぶことで地域子育ての力が向上するのではないかと考え実施した。

① 12月10日(土)「クリスマスを楽しもう」

(参考資料C参照)

親子で設定ムーブメントの活動を終えた最後に、親と子別々の色の「できたねシール」を貼り、同じシールの色の親と子でペアをつくった。ペアでクリスマスソングのダンスを踊ってもらった。ダンスの内容としては、走行歩行ムーブメント・ダンスムーブメント「ぐっぱー」である。ダンスの後は、自分に付いているできたねシールをちぎり、クリスマスツリーの飾りにした。

この親子シャッフルでは、初めのころには想像もできなかったような風景があった。以前は自分の親から離れられず泣いていた子どもたちが、他のお母さんと手をつなぎ、上手に歩いたりグッパードダンスを踊ることができていた。泣き出す子どももおらず盛り上がり、保護者も行動的だった。シャッフル時に自分の子どもと同じ色のシールがあたってしまった保護者も他の色と交換し、率先してペアの子と手をつないでいてくれたりして、主体的に動く場面も多く見られた。

③ 1月14日（土）「お参りに行こう」（巻末資料D参照）

神社でおみくじを引く設定の中で、風船のおみくじを一人一人ひき、ひいた風船と同じ色のカラーフープの中の親がペアとなる。

a) おみくじでしっぽ取りゲーム

ペアになった親子が4組ずつ、順に風船でしっぽ取りゲームをする。ペアの保護者のしっぽを子どもが追いかけて取ることで操作性を高める。

b) スカーフで風船おさい銭を運ぶ

ペアで協力して、しっぽ取りゲームでとった風船をおさい銭箱まで運ぶ。落とさないように運ぶため、バランス力などを向上させる。

c) おさい銭を箱に入れてお参りをする

ペアにだっこしてもらい風船を箱の中に入れる。終わったペアから順に並び鈴を鳴らしお参りをする。

d) 巨大な鈴が登場

大きな風船の塊で出来た巨大鈴が出てきて、全員でたたき鈴を鳴らす。中からカラフルな風船の袋の塊が出てくる。

e) カラフルな袋で遊ぼう

ペアの親子で風船の入ったカラフルな袋に乗ったり、投げたりして遊ぶ。

この親子シャッフルは、前回に比べてうまくいかなかった。始めはペアで活動できても、しっぽ取りゲームを終えた後、順番待ちをしている自分の親の所に戻ってしまった。その後も巨大鈴が出てきた活動では完全に元の親子に戻っていた。そのため上記の「e）カラフルな袋で遊ぼう」の活動は元の親子で行うことに急遽変更した。原因としては、「設定ムーブメントが始まってからすぐシャッフルをし、親子バラバラの時間が長すぎた」ことや、「内容が複数でやり慣れてないものだったために、親子にとまどいがあった」「初めて参加の親子が何組かいて、保護者も子どもも、うまく活動ができていなかった」などが挙げられる。

また、12月と1月のプログラムを比べて、更に親子シャッフルの可能性と問題点がみえてきた。

12月の親子シャッフルは“ダンスのみ”という形で、曲が変わってもダンスの内容はいつもやっている馴染みのある内容だった。またシャッフルするタイミングも、場馴れした終盤の活動の中に、ひとつだけ盛り込んだ。その結果、みんなが知っている内容で、環境にも慣れた状態だったためシャッフルが成功し、場の新しい一体感が芽生える結果となった。しかし1月の親子シャッフルでは、設定ムーブメントの最初から最後までシャッフルした状態での活動を試みたため、複雑すぎて課題が残った。シャッフルしている時間の長さや、内容の複雑さ、多さによる混乱があるとうまくいかないことが分かった。また、

「シャッフルするタイミング」「ペアが活動する位置や動線」なども、とても重要だということが分かった。参加した親子からは、一回目には「楽しかった」「大きい子はこういう反応するのか、とか知られた」という声があったが、二回目には「難しかった」という声が拳がった。

6. まとめ

2. で論じたように、近年子育て支援が盛んに騒がれその対策があらゆる角度から取られてきているが、そこで重要なのは一方的なサービスではなく、関係性の支援というポイントであることは間違いない。そのために、そのままでは出会わずにいる親子や、様々な可能性をもつ人材としての学生と地域などがつながりあうための場や人が必要不可欠なのであり、そうした「関係性の支援」こそが現代の日本の子育て支援において重要なのである。児童館という拠点型子育て支援の在り方が模索される中で、保護者のインタビューやアンケートからも分かったように、岡上子ども文化センターは利用する親子にとって大切なコミュニケーションの場であり、生活の一部なのだ。岡上子ども文化センターがなければ子育てできなかったという声が拳がるほど、地域に密着した子育ての現場なのである。そこには、鈴木さんをはじめとしたNPOかわさきココロのスタッフの方々の考えや目標によって、子育て支援の方向性が示されているのである。

鈴木さんのインタビューの中でも強調されていたように、岡上子ども文化センターという場所は、単に、遊びを教えるだけの場やこ

どもを預かる場ではなく、関係性支援として子育ての様々な情報を紹介し、人材や場と親子をつなぐ役割を担っているのである。それは、現代の児童館（拠点型子育て支援）が担っていくべき役割であると同時に、生活圏を共有するひとりとして、地域に居る大人が互いに意識していくことなのである。鈴木さんが語っていたポイントやこれまでの考察を踏まえた地域子育て支援の目指す理想の形は、ムーブメント教育・療法で大事にされている考え方につながっている部分がある。身体を動かし遊びながら、共にその場を楽しみ創造していく過程において、他の参加者とコミュニケーションをとれるようになっていくことで、社会性の発達に大きく影響があることは間違いなく、また親子同士も遊ぶチャンスとして成立している。更に、臨機応変なプログラム作りや対応ができるため、柔軟な活動を行うことができる（答えがひとつではない）ムーブメント活動だからこそ、「集団」の中で「個」の良さが矛盾しない環境づくりのきっかけが作りだせるのである。

そのような子育ての現場としてのムーブメント教室を学生が主体的に行うことは、鈴木さんの話からも気づくことができたように、互いに受け身でない子育て支援を実現する大きな一因となっている。互いの能力を生かし、つながりながら共に子育てをしているという意識づくりができて初めて、協同の地域子育て支援といえる。子育てが難しいといわれる現代において、サービス化された支援を待ち受けるだけではなく、生活圏をともにする市民として、互いに学びあい主体的に関わりあう連携をつくりだすことが最も重要である。このムーブメント活動をやったからこ

そ、単なる通学路だった岡上地域の印象が変わり、地元のように身近に感じられるようになった。ムーブメント教室に参加する親子と偶然出会うことも非常に多く、気軽に世間話をしたり、次に生まれる新しい命を案じたりと、岡上に暮らす「ご近所さん」として、子育てを見守る意識が自然に芽生え、それが次の活動へのエネルギーにもなっているのだ。

最終的に親子シャッフルの試みには、手応えと可能性を感じたが、まだ問題点は多く、今後も課題として取り組みたい。

一方的なサービスの支援ではなく、ひとりひとりが人材として連携し共に生活する場をつくること、「関係性」を支えることが、地域子育て支援の未来を明るくするだろう。

【謝辞】

研究を進めるにあたり、多くの方の貴重なご意見、ご指導を賜りました。活動を支えてくださる岡上こども文化センターのスタッフの皆さま、参加して下さっている親子の皆さま、いつも応援して下さいしている小林先生、堂前先生、野中先生、アンケートやインタビューにお答え下さった鈴木さん、参加学生、アドバイスを下さった先輩方、そしてご指導下さった大橋さつき先生に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

【参考・引用文献、URL一覧】

- 大橋さつき (2008) 「特別支援教育・体育に活かす ダンスムーブメントー「共創力」を育み合うムーブメント教育の理論と

実際」 明治図書

- 大豆生田啓友編 (2007) 「50のキーワードでわかる子育て支援&ネットワーク」 フレーベル館
- 北野幸子・立石宏昭 (2006) 「子育て支援のすすめー施設・家庭・地域をむすぶ」 ミネルヴァ書房
- 小林芳文・「たけのこ教室」スタッフ (1985) 「動きを通して発達を育てる ムーブメント教育の実践1 対象別指導事例集」 学習研究社
- 小林芳文・當島茂登 (1992) 「学習困難児のムーブメント教育ー新しい運動・動作の進め方」 日本文化科学社
- 小林芳文・大橋さつき (2010) 「遊びの場づくりに役立つムーブメント教育・療法ー笑顔が笑顔をよぶ子ども・子育て支援ー」 明治図書
- 中谷奈津子 (2008) 「地域子育て支援と母親へのエンパワーメント」 大学教育出版
- Marianne Frostig 小林芳文訳 (2007) 「フロスティグのムーブメント教育・療法ー理論と実際」 日本文化科学社
- 川崎市公式ホームページ (アクセス: 2011年11月3日)
<http://www.city.kawasaki.jp/>
- NPOかわさきココロホームページ (アクセス: 2011年6月7日)
<http://www.coccolo.jp/>
- 岡上こども文化センターホームページ (アクセス: 2011年7月15日)
<http://www.coccolo.jp/kobun/okagami-kobun/index.html>

<参考資料A>

～岡上こども文化センター親子ムーブメント実施内容～

2010年度 和光大学出張ムーブメント教室		
7月14日	タオルで遊ぼう	岡上こども文化センター
8月21日	お天気で遊ぼう	岡上小学校
9月1日	どんぐりになって遊ぼう	岡上こども文化センター
10月6日	ハロウィンを楽しもう	岡上こども文化センター
11月3日	紅葉を楽しもう	岡上こども文化センター
12月1日	クリスマスを楽しもう	岡上こども文化センター
1月5日	お正月を楽しもう	岡上こども文化センター
2月2日	雪の世界を楽しもう	岡上こども文化センター
3月2日	光の世界を楽しもう	和光大学

2011年度 和光大学出張ムーブメント教室		
4月8日	お花を咲かせよう	岡上こども文化センター
6月26日	MEPAサーキットムーブメント	和光大学
7月9日	ヨーヨーで遊ぼう	岡上こども文化センター
9月10日	やきいもになって遊ぼう	岡上こども文化センター
10月8日	ハロウィンを楽しもう	岡上こども文化センター
11月12日	パパと遊ぼう	麻生スポーツセンター
12月10日	クリスマスを楽しもう	岡上こども文化センター
1月14日	お正月を楽しもう	岡上こども文化センター
3月10日	光で遊ぼう	和光大学

＜参考資料 B＞

親子で遊ぼう！ 2011年度 岡上 和光大学出張ムーブメント やきいもになって遊ぼう！		日時：2011年9月10日（土） 10：00～12：00 場所：岡上こども文化センター	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な運動を通して、身体意識能力の向上をはかる。 ・さまざまな遊具を利用した活動の中で、色の分別能力や数の概念を育てる。 ・集団での活動を通して、社会性を育む。 	リーダ－	小澤菜摘 南波遥菜 椎野純 小関涼子 山岡奈巳 畦上玄太 広瀬和馬 野口達也 スタッフ：和光大学 学生
時間	活動	内容・方法	達成課題
10：00	フリームーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・到着した子どもから好きなムーブメント遊具を使って遊ぶ ・部屋の中を音楽にあわせて速度を変えたり、イメージを膨らませながら、歩いたり走ったりする。 ・周りの人の動きを見て模倣し、リズムに合わせて動く ・一人一人の名前を呼び、活動の始まりを意識つける。 ・音楽に合わせて、楽しく体を動かす中で、自己意識、身体意識、空間認識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自主性・自発性 ・移動 ・模倣・創造性 ・協応性
10：30	走行・歩行ムーブメント		
10：50	集合・呼名 ダンスムーブメント		<ul style="list-style-type: none"> ・自己意識 ・身体意識 ・空間認知
11：00	サーキットムーブメント ＜やきいもになって遊ぼう！＞	<p>(畑を耕そう/種を植えよう/みんながさつまいもに变身！収穫されよう/やきいもジャンプ/トラックに乗って出発！「いーしやーきいもー♪」お母さんに買ってもらう！)</p> <p>パラシュート活動を楽しむ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・動きに適応した言葉がけも忘れない。 ・一人一人に合わせた課題に柔軟に対応する。 ・参加者全員で活動を共有。 ・パラシュートの下に子どもが入らないように注意する
11：30	パラシュートムーブメント		<ul style="list-style-type: none"> ・創造性・調整力 ・移動・操作性 ・空間認知・身体意識 ・色の概念・数の概念 ・社会性 ・前庭感覚刺激 ・操作性 ・調整力 ・社会性
11：45	ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居で一日の活動をふりかえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居

< 参考資料 C >

親子で遊ぼう！ 2011年度 岡上 和光大学出張ムーブメント クリスマスを楽しもう！		日時：2011年12月10日（土） 10：00～12：00 場所：岡上こども文化センター	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な運動を通して、身体意識能力の向上をはかる。 ・さまざまな遊具を利用した活動の中で、色の分別能力や数の概念を育てる。 ・集団での活動を通して、社会性を育む。 	達成課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自主性・自発性 ・移動 ・模倣・創造性 ・協応性 ・自己意識 ・身体意識 ・空間認知 ・自己意識 ・バランス・創造性 ・調整力・身体意識 ・移動・操作性 ・空間認知 ・社会性・色の識別 ・模倣 ・前庭感覚刺激 ・バランス力 ・調整力 ・社会性 ・短期記憶
時間	活動	内容・方法	配慮
12：00	フリームーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・到着した子どもから好きなムーブメント遊具を使って遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの自発的な活動を大切にす。
12：30	走行・歩行ムーブメント 集合・呼名	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の中を音楽にあわせて速度を変えたり、イメーজを膨らませながら、歩いたり走ったりする。 ・周りの人の動きを見て模倣し、リズムに合わせて動く。 ・一人一人の名前を呼び、活動の始まりを意識づける。 ・音楽に合わせて、楽しく体を動かす中で、自己意識、身体意識、空間認知を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動きに適応した言葉がけも忘れない。 ・イメージして歩く子どもたちの見本をす。 ・一人一人のペースを大事にする。
12：50	ダンスムーブメント		
13：00	サークレットムーブメント 「サンタさんのお手伝いをしよう！」 設定ムーブメント	サンタさん登場！ ・クリスマスゲームにサーキットプログラムを楽しむ （サンタさんのお家にプレゼントを取りに行こう/トナカイさんのソリで出発/煙突から突入/プレゼントをそっと置く） ・サーキットが終わった親子からできたねシールをはる。 ・みんなでクリスマスダンスを楽しむ。 ・できたねシールでクリスマスツリー飾りつけ。	<ul style="list-style-type: none"> ・動きに適応した言葉がけも忘れない。 ・一人一人に合わせた課題に柔軟に対応する。 ・S字平均台・ロープ ・スクーターボード ・滑り台・ビーンズバスケット ・できたねシール・クリスマスツリー
13：30	パラシュートムーブメント	サンタさんからパラシュートと雪のプレゼント！ ・パラシュート活動を楽しむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者全員で活動を共有。 ・パラシュートの下に子どもが入らないように注意する ・パラシュート ・紙吹雪
13：45	ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居で一日の活動をふりかえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居

< 参考資料 D >

親子で遊ぼう！ 2011年度 岡上 和光大学出張ムーブメント お正月をたのしもう！		日時：2012年1月14日(土) 10:00~12:00 場所：岡上こども文化センター	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な運動を通して、身体意識能力の向上をはかる。 ・さまざまな遊具を利用した活動の中で、色の弁別能力や数の概念を育てる。 ・集団での活動を通して、社会性を育む。 	達成課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自主性・自発性 ・移動 ・模倣・創造性 ・協応性 ・身体意識 ・自己意識 ・色の識別・操作性 ・空間認知・模倣 ・創造性・協応性・移動 ・前庭感覚刺激 ・短期記憶
時間	活動	内容・方法	配慮
10:00	フリームーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・到着した子どもから好きなムーブメント遊具を使って遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの自発的な活動を大切にす。
10:45	走行・歩行ムーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋中を音楽にあわせて速度を変えたり、イメージを徹らませながら、歩いたり走ったりする。 ・周りの人の動きを見て模倣し、リズムに合わせて動く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの見本をす。
10:50	集合・呼名	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の名前を呼び、活動の始まりを意識つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動きに適應した言葉がけも忘れない。
11:10	ダンスムーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に合わせて、楽しく体を動かす中で、自己意識、身体意識、空間認識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人のペーソスを大事にする。
11:20	<お正月を楽しもう！>	<ul style="list-style-type: none"> ・神社でおみくじをひく／おみくじでシッポとりゲーム／スカーフで風船おさい銭を運ぶ／おさい銭を箱に入れお参りする／巨大な鈴が登場！／カラフルな袋で遊ぼう！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・動きに適應した言葉がけも忘れない。 ・一人一人に合わせた課題に柔軟に対応する。
11:45	パラシュートムーブメント	<ul style="list-style-type: none"> ・下に入ったり、上に乗ったりしてパラシュート活動をする。 ・白パラシュートについた風船であそぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを乗せる時は、パラシュートの下にマットを準備。下にもぐる子どもに注意・・・。 ・参加者全員で活動を共有。
11:55	ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居で今日1日の活動をふりかえ 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居

指導教員のコメント

大橋さつき（身体環境共生学科）

本研究は、昨年度から申請者達が継続して取り組んでいる「岡上こども文化センター」での親子ムーブメント教室を対象としている。これまで、学内外で学生達がリーダーを担当する実践は多数あったが、それらとはひと味違う深まりをみせていて大変興味深い。

現場に参加して私が感じたことは、この活動は、地域子育て支援の施設である「岡上こども文化センター」を拠点に、もともと「開かれたつながり」のある地域の人々で構成されていること、そして、ムーブメント法による遊び体験の共有により、そのつながりがさらに発展し、生活圏を共にする学生・保護者・施設スタッフの三者間の関わりの中で、自然と連携が増し、共に創りあげる遊びの場がさらに活性化していく、そのことがまた連携を深めるといふ好循環が生まれているということである。

通学途中に地域の方に声をかけられたとか、出産間近のある母親のことを心配してそろそろ産まれたらどうかとか、「ご近所づきあい」を楽しむ話で盛り上がる学生達の姿が面白かった。また、回を重ねるごとに保護者の方からの助言や応援の声が増え、サービスの受け手という意識ではなく学生達の力を育みながら共にこの場を創っている担い手としての意識の高まりを感じた。そして、学生と親子の関わりをつなげ支える施設スタッフの

役割は大きく、生活圏を共有する者同士が互いに育み合い子育てを共有するという意識を大事に取り組まれていることに感心した。

研究の終盤では、オリジナルのプログラムを実施しているが、データの集約や分析の方法には未熟な点が多く、プログラム立案までの考察の過程や実施後の分析が不十分である。インタビューやアンケートの記録も活用して、当事者として確かに実感できている「何か」を他者にも十分に伝わるようにできるとよかったです。

今回の研究活動を通して、大学と地域の連携を支える遊び活動の意義について再確認しながら、それ以上に、本来遊びは「生活」の中にあるもので、毎日の暮らしの中で無理なく自然に展開できることこそが地域支援・家族支援につながるのだということに気づかされた。学生達の活動とそれらを支えてくださった全ての方々に、感謝したい。

黒い翁・三番叟の語り——古戸田楽の翁を再考する

09T168 宮嶋隆輔

【目次】

はじめに——花祭りの翁から古戸田楽の翁へ

I 古戸田楽における翁の様式

(一)古戸田楽と「さるごばやし」・「おきな」・「さんばそ」

(二)「さるごばやし」と白い翁

II 「さんばそ」の語りを読む

(一)黒い翁のモドキ芸

(二)翁の胎生学——生まれ所の事

(三)エロスと豊穰——都入り

(四)翁は芸の達者——鎌倉入り

(五)黒い翁の祝福芸

終りに——ふたたび花祭りの翁へ

はじめに——花祭りの翁から古戸田楽の翁へ

山びとは、

歎び 浅くなりにけり

おきな語り

淫ヌれ行けども

折口信夫「花祭の夜」

諏訪湖から太平洋へと流れ込む天龍川を下ってゆくと、「日本芸能の宝庫」と呼ばれる三信遠（三河・信濃・遠州）の一角にたどり着く。なかでも、奥三河（愛知県北設楽郡東栄町・豊根村周辺）には霜月神楽の一種「花祭り」が、現在も十数カ所の地区で毎年行なわれている。中世末期に成立した「大神楽」を母胎とするこの神楽は、湯立てやしずめといった厳格な神事をはじめ、青少年の舞（花の舞・三ツ舞・四ツ舞）、ヒーロー的な人気をもつ鬼（山見鬼・神鬼・茂吉鬼）、そして笑いをさそういくつかの芸能とで、複合的に構成される。

さて、わたしは花祭りの芸能のなかでも「おきな」に注目し、二〇一一年度の論文で演目の解説と考察を行なった。⁽¹⁾ 花祭りの翁は、黒い翁面を着けて多くは上着ゆわぎに襷を掛けた旅姿で祭場に

現われる。ヨタヨタした足取りでひとくさり舞ったあと、「お札の事」といってモドキとの滑稽な問答をしながら場の衆にお札（祝福）をする場面があり、続いて長い長い「身の上語り」をする。現在はほとんどの地区で省かれてしまったが、この「語り」こそが花祭りの翁の生命であった。翁は「生まれ所の事」、「打ち上げ（都入り）の事」、「鎌倉入りの事」の三つのパートからなり、琵琶湖が七回桑原になったのを見届けたほど長寿であること、都の女にふられた話など、数々のエピソードを滑稽に語ってゆく。そして最後にひとさし舞うと、花宿の外の闇に消えてゆく。

花祭りの翁語りには、前論考の最後に触れたように、実はその源流とおぼしき語りがある。それが、かつて東栄町古戸地区で行なわれた「古戸田楽」の翁詞章である。⁽²⁾ 本論の目的は一口にいつて、花祭りの翁語りのひとつの原型といふべき古戸田楽の翁詞章を、可能なかぎり丁寧に読み解き、翁、特に三番叟（「黒い翁」）の本性を明らかにすることである。

I 古戸田楽における翁の様式

(一) 古戸田楽と「さる」「こばやし」・「おきな」・「さんばそ」

古戸田楽は、花祭り有数の伝承地の一つ「古戸」集落の清水観音堂で、陰暦一月十四日から翌十五日にかけて行なわれた。明治六年を最後に惜しくも廃絶してしまいが、早川孝太郎の調査によって江戸期の次第書と詞章が発見・翻刻され、また古老への聞き取りが残されている。



昭和初期の古戸集落（「花祭」後篇より）

後藤淑は三河地方における田楽の成立について「戦国時代以前に遡ることが出来るものであり、さらに、鎌倉時代にまで遡っても無理ではない」という時代考証を行なった。⁽³⁾ 花祭りの母胎である「大神楽」が成立するのが中世末期とすれば、この地方ではそれよりもずっと以前から田楽が行なわれていたことになる。古戸田楽がその当時から明治期まで変わらないかたちで継承されてきたかは分らないが、その古さは資料の随所に窺える。まずは、古戸田楽の次第表を見ることにしよう（上図参照）。

次第表は二種類残されており、宝暦本では三十、慶應本では三十五の演目を数えることができる。ただし慶應本では特立させている演目が宝暦本では一つにまとめられている例がいくつかある。また宝暦本の場合、実際には行なっていたが演目名を省略している節が窺える。

古戸田楽は、すでに早川が指摘している通り、三信遠一帯のほかの田楽と比べても共通する演目は少なく、独自の曲をいくつも伝えていた。「田楽」と聞いて一般に想像される農耕儀礼（「種まき」、「水口」、「鳥追い」、「早乙女」など）がほとんどないのも特徴的である。加えてわたしの注目する「翁」の詞章は、一部は判読不能なほどに崩れているが、注目されるべき内容が多く見受けられ、これほどの資料に十分な考察が加えられていない

田楽はじめり 慶應三年（一八六七）	田楽目録覚 宝暦十年（二七六〇）
熊野田楽	宮渡り
宮渡り	神座 式ばやし祭り
神座楽舞 順の舞	三人踊り 二庭
さいはらい 榎焚き	惣田楽 九人踊り
三人踊り 二庭	くにしげもどき 九人踊り
さいはらいの舞	ろん舞 またもどき 同
惣田楽 九人踊り	はやもの遊び 二庭
くにしげもどき 九人踊り	おきな さんばそう
ろん舞	宮ならし
はやもの遊び 二庭	しゆかく
猿子はやし	長生殿
おきな	市半上 二半上
さんばそ	せつうどう ゆみはじめ
宮ならし	和泉式部 桜太郎
四学	春鍛冶
長生殿	駒はやし
一あんじやう 二あんじやう	せんだの尉
和泉式部	さるはし太郎
せつうど	光堂建立
鍛冶	観音舞 もどきと二庭
羽根拾い春駒	鳥へんばい
いまいち	いまいち
鳥へんばい	君をはやす
光堂	もどきをはやす
観音の舞 もどき	みよし 餅掲ぎ
さるはし太郎てんぐるま	千万歳
君はやし	獅子舞はやし
君もどき	堂めぐり
みよし	へんばい しずめ
千万歳	
獅子はやし	
堂めぐり	
へんばい	

（本田安次「愛知県古戸田楽の能」「日本の伝統芸能・狂言・人形芝居ほか」より）

ことは意外であった。

古戸田楽がどのように継承されてきたかは、早川の聞き書きによる明治期の記憶に依るほかはないが、当時すでに「一般見物はもちろん役に当たるものも、すべて形式的に済ます程度」にまで形骸化してしまっていたらしい。早川によって資料の採集と古老への聞き取りがなされ、次いで本田安次がより精緻な翻刻を行なったおかげで、記録を残すことができたわけである。わけても本田は「その鄙びていてしかも古雅な響き」⁽⁵⁾に惹かれて、古戸田楽の文書との対面を切望したと述べている。

何にせよ、古い様式と豊富な語りを残す、しかも呪術的要素を多分に持った祭礼であることには違いない。先ほども述べたように、大神楽との交渉や花祭りの成立を考える上でも重要な鍵となるはずだ。⁽⁶⁾



古戸田楽の三番叟・翁面（『花祭』後編より）

さて、古戸田楽の数ある演目の中でわたしが注目するのは、「翁」に関わる演目。「さるごばやし」・「おきな」・「さんばそ」である。「さるごばやし」は慶長三年（一八六七）のもの、「おきな」と「さんばそ」は「田楽翁之語」文化二年（一八〇五）、「田楽翁覚帳」安政六年（一八五九）、「田楽三番歌覚帳」文久四年（一八六四）の三本が残っている。ところで花祭りに登場する「おきな」は、翁と名乗ってはいるが「白い翁」（白式尉）では

なく、黒式尉の三番叟、つまり「黒い翁」である。この花祭りの「おきな」（三番叟）の原型と目される古戸田楽の三番叟は、「さるごばやし」という次第のあと、「おきな」（翁＝白式尉）に続いて「さんばそ」（三番叟＝黒式尉）として登場する。つまり「さるごばやし」・「おきな」・「さんばそ」は連続した演目であった。一般に翁と三番叟が登場する一連の芸能を、ひとまとめに「式三番」と呼ぶように、「白い翁」と「黒い翁」が続けて登場するのが奥三河においても古い形式だったことが知られる。

(二)「さるごばやし」と白い翁

右に記したように、黒い翁＝三番叟のみが登場する花祭りの翁と違って、古戸田楽の翁は「さるごばやし」・「おきな」・「さんばそ」の一連の演目をセットにした、いわゆる「式三番」に当るものだった。それでは「さるごばやし」とはどのような演目だったのだろうか。詞章を見てみよう（以下、詞章の引用に際しては、適宜漢字や表記をあらため、私に句読点をほどこした）。

ぜざい〜と我きままましまさバ

我等もせいしうさむらいで

つると亀とわ祝イして

さいわい心にまかせたり

竹が林が高きとて

てんじくてんまでとゞくかよ

きじがをわとハきじがをハ

しやうの笛ニもさもニたり

春きて秋ゆくつばめ鳥

たんぼのよとろですをかけて

是をわなにとかゆうをふべし

長者のしんともゆふをふべし

「これはすべて歌ぐらで、花祭りのさるごばやしに似たものであった⁽⁷⁾。現行の花祭りから想像するに、神座^{かんざ}でみょうど衆が車座になり、太鼓を打ちながら一人が上の句を歌うと、続けて全員で下の句を唱えたのであろう。鶴に亀、竹、雉、つばめ……。掛け合いによる古風な囃子で、観音堂は清々しい祝福の雰囲気に包まれてゆく。

さて引用にもあったように、「さるごばやし」は実は古戸田楽だけが持っている演目ではなかった。花祭りでは「さるごばやし」あるいは「とうごばやし」という名称で、たいていの地区で現在でも行われている。本田安次は、これらの儀礼を「猿楽囃子^{さる}」と捉えることで興味深い論を展開している。つまり、花祭りでの「さるごばやし」は、序盤の神下しとセットになって唱えられているが、本来は古戸田楽の事例のように翁の出る直前に唱えられた——すなわち翁の登場を囃すためのものだったのではないかと⁽⁸⁾。

さらに本田は、静岡県の「寺野ひょんどり」（浜松市引佐町渋川寺野）において、「翁」の出る直前に「神歌の事」があり、「さるごばやし」と同様の歌が唱えられることに注目する。ちなみに寺野の翁詞章は元禄本・天保本の二本が伝わっている。

三信遠の田楽や花祭りだけではない。東北地方の番楽や山伏

神楽、兵庫県加東市上鴨川の上鴨川住吉神社神事舞などに登場する翁、はては能楽の「翁」に至るまで、翁が出る前に（あるいは翁面を着ける前に）「猿楽囃子」というべき囃子歌があったというのだ。（本田による大胆な仮説には十分な検討が必要とされるところだが、ここでは措く。）

さて、古戸田楽に戻ろう。一つの問題は、古い次第書（宝曆本）に「おきな」「さんばそう」はあっても「さるごばやし」の名が明記されていない点である。では、他所からの影響で慶應本の時期には「さるごばやし」が新しく加わったのだろうか。そうは考えられない。新野・雪祭りの「官命」や大入おほいりゅうの花祭り「さるめの祭」などの例を見るに、「さるごばやし」は翁の登場や神下しの言葉に付いた詞章として、独立した演目になっていない場合が多いのである。このことから古戸田楽の「さるごばやし」も、古くから翁の囃子歌として唱えられていたが宝曆本から慶應本に至る期間に一つの演目として特立した、と推察することができる。

ところで、本田は着目していないが「さるごばやし」ではこのあと「堂」の祝言が続く。実はこれが花祭りの「とうごばやし」との連関を解く鍵なのだった。

堂を拝ハ今見どふ

拾二の柱ハしやか如来

をもての柱ハふどふ明王

そらにハびやかい玉のはた

下ニわはんじやうやえだ、み

戊亥の角ニかめ七ツ

八ツちやうつほにさゝら波だつ

命ながへのたまびしやく

くめどもれどもつきせざるらん

祭りを行なう「堂」の柱を釈迦如来や不動明王にあやかって莊嚴し、さらに白蓋や八重畳、水を湛える瓶かめや玉柄杓を祝福する囃子歌である。このあとも池や仮屋をことほぎ、「街道大路を見るからに、これらに負いたる所なし」と褒め讃える詞章が続く。

前述のように花祭りでは、地区によって「さるごばやし」か「とうごばやし」のどちらか（あるいはそれらが訛ったもの）が次第名となっていることが多い。本田は「さるごばやし」に着目して論を進めても、「とうごばやし」には触れなかった。「さるごばやし」の原型が「猿楽囃子」なら、「とうごばやし」は元々どんな名前を持っていたのだろうか。

大神楽の最古の資料・天正九年（一五八二）の三沢の次第書には「堂のはやし」と見える。その名の通りに想像するならば、神の来臨に先立って囃子歌によって堂を莊嚴する演目といえよう。これが時代を経て意味が分からなくなったのか、正徳二年（一七二二）の下黒川次第本では「とうごばやし事」と表記されている。この「とうごばやし」が花祭りにも取り込まれたのではないかとすると「とうごばやし」は、「さるごばやし」とは本来関係がなく、「堂のはやし」が転訛したものだと考えられる。

「とうごばやし」（堂のはやし）と翁の登場を囃す「さるごばやし」。二つの「囃子」は由来も内容も異にしている。ところが花祭りの担い手たちは、田楽の「さるごばやし」の一部に「堂」の祝言があることに着目し、花祭りの花宿の祝言としての大胆な「転用」を試みた。このような例は花祭りを措いてほかに見せず、図らずも花祭りの特性を浮き彫りにしようか。

さて、「さるごばやし」の囃子歌によつて祝言が歌われ、堂が荘厳されると、いよいよ「おきな」Ⅱ 白い翁の登場である。白い翁面を着け、華美な衣装（あるいは白装束）を纏つて厳かに現われ出たことが想像される。面の奥から響く祝福の声に、人々は耳を傾けた。

久しきは峯にては松 沢に鶴

海にすみ候へし 亀のごゆはい

いつにもすぐれて喜ぶ所

年の御万歳とこそおしおごふにて候いし

あん候へば 峯にては 大堂龍の翁なり

沢にては 古松下上の翁なり

年へればく 年は若うて申なり

久しきもの。命の永いものは峯では松、沢では鶴、海では亀。それらの御祝いが、いつよりも優れて喜ばしい——。いかにも春の祝いにふさわしい、古風で美麗な口開けである。続く「峯にては大堂龍の翁、沢にては古松下上の翁」と自在に変幻してゆく姿かたちや大きさ、さらに年を取れば取るほど「年は若う

て申すなり」という白い翁の名乗りは、「翁」の本性を端的に告示するかのようだ。

このあとも「豆は一升蒔いて九石八斗」を納めるほどに実るといふ豊年予祝の詞や、東南西北を春夏秋冬にあてて四季の景観の「おもしろうこそ候いし」ようすを述べる、めでたい詞章が連綿と語られてゆく。続いて翁の長寿の謂れを述べ、長大な「宝救え」（後述）の詞章に入り、最後に「一舞舞おうよ、万歳楽、万歳楽」と締めくくられる。

古風な祝福の香りがふくいくと漂うような、「白い翁」の語りである。この詞章はのちに一部取り上げることとし、今は先に進むとしよう。

Ⅱ 「さんばそ」の語りを読む

（一）黒い翁のモドキ芸

ここで本論の主役の黒い翁Ⅱ「さんばそ」が登場する。本田安次はそのようすについて「扇と鈴とを持つて出て跳ねまはつたといふ」と記している（おそらくは現地の古老から伝え聞いたのだろう）。近代の様態をそのまま古いかたちとはみなせないが、三番叟に似つかわしい登場のしかたである。「さるごばやし」と「おきな」が醸し出す祝福の雰囲気とはまるで違う、不穏なもの、異なるものとしての黒い翁の出現である。それは、三番叟が跳ね回りながら発する、最初の言葉を聞いてもわかる。

①すうわすうわ、げどうしよう

すうわく／＼げどうしよふすうわく／＼げどうしよふ
やらよふがりややらよふがりの事にて候

すうわ、すうわ、げどうしよう……。語りは、いきなり
謎めいた文句にはじまる。「やらようがりや」だけは辛うじて「や
ら興がりや」と読めようか。

この「すうわすうわ」の出所を、山本ひろ子先生は中世の諏
訪大社の「二十番舞」に見出した。三月寅の日に行なわれたと
みられる二十番舞は、その名の通り二十番からなる芸能で、こ
のうち十二番から十五番までが連続した演目となっている。

十二番 忘語舞

皆神使殿達合同て萩打、こつこそくと
謡て、三度つ、走る

十三番 宮守舞

皆立列、同音。井守の印現ハれて、腹
高を見ハやな。三度つ、謡

十四番 恥舞

諏方く／＼と謡て走る。是も神使殿萩打
三度つ、走る

十五番 逸物

御前向、郷の殿申立有、後二歌
合始し見始し折の茂ミより、合ぬらん
んと人や見るらん、恥つかしや

山本先生によれば、不儀の子の懐妊から出産までを歌と舞に
よって滑稽に演じる一連の演目らしい。問題の箇所は十四番の

「恥舞」で、諏訪社の聖なる侍童・神使たちが「すうわすうわ」
と歌いながら走るのだ。恥をかいたときに「すうわすうわ（諏
訪・諏訪）」と歌いつつ走る——。もしかしたら、民間のならわ
しが諏訪社での芸能に取り入れられたものかもしれない。⁹⁾とす
れば、中世に諏訪から伝播していった囃子詞を、古戸の三番叟
は登場する際の台詞に取り入れ、滑稽に演じたのではないかと
想像される。¹⁰⁾

さて、古戸田楽の祭場＝観音堂へ立ち返ろう。白い翁の祝言
と舞が一段落したあと、黒い翁が素つ頓狂な声で「すうわすう
わ」と叫びながら、どたどたと走り込むように躍り出てくる。「や
ら、面白や、面白や」と、妙に威勢のいい口上が衆人の笑いを
さそう。

②味のほどよき伊勢の獅子

じんじがおふといふは何だらふ

(モドキ)「し、さるがく」

し、はどこし、

(モドキ)「伊勢じし」

あじの程もよかんろふしをの程もよかんろふ

「じんじがおう」と聞こえるが、何の音だろう？ 翁が、誰
とはなしにそう問う。するとモドキが「獅子猿楽」と返す。ど
うやら「じんじがおう」はジャンジャカという楽の音を指して
いるらしい。

すかさず「獅子はどこ獅子」と訊けば「伊勢獅子」と応じるモドキ。伊勢の獅子と聞いた翁は、「なるほど伊勢の獅子ならば、さぞ味のほども良かろう。塩のほども良かろう」と一人ごちる。周囲では早くも、くすくすというおかしみが立ちこめようとしている。

いつちよふしばのこしばの元にて

何やらゆつさりゆつさりゆつさりせ給ふ候ほどに

なんだらうと立寄りき、候

とくがついてゆつさりせ給ふか

福がついてゆつさりせ給ふか

「一丁柴の小柴のもと」で、誰かが何やら「ゆつさりゆつ」と揺らしている。そこへ「何だろう」と思った翁が立ち寄る。「徳がついて揺めるのですか、福がついて揺めるのですか」。

「柴」を「揺める」。「揺らす」という所作によって、柴の孕んだ福德のパワーを引き出しているのだ。

とすれば、直後の「ゆつさりせ給ふか」は「ゆつさりせ給ふか」と濁らせて読むと面白い読みが可能となる。ここで翁は、福德の付いた柴を、祭りに参加し翁の語りに耳を傾ける人々にゆつさり、渡そうと言っているのだ。語りの中味をしたたかにその場の祝福へと転化してゆく、巧妙な語り芸の一端が垣間見える。

③十二月の神仏を数える

先づ此所を守らせたまへ候ほどに

正月ははじめごおうのままらせたまへ候

二月は仁王

三月は山王七社の守らせたまへ候

四月四大天王

五月は牛頭天王

六月は六地藏の守らせ給へ

七月はひちこの薬師

八月は長谷のくわんおん

九月熊の権現守らせ給へ候

十月はとふの観音

十一月は十一面観音

十二月は薬師の十二神の守らせたまへ候程に

まづ此所になんなくせなくじかふとおく

次に、一月から十二月まで、古戸の土地を守る神や仏菩薩を数え上げ、「難なく癖なく」定着させて古戸村の守護を祈念する。二月は「におう」、三月は「さんのう」と語呂合わせをして神仏の名をかぶせてゆく。言葉遊びのように、リズムカルに神仏名を数えてゆることが主眼である。

これとよく似た詞章が、同じ古戸田楽の二十三番「せんまんざい」（千万歳）に見出せる。「せんまんざい」は、演目名からも窺えるように白い翁の詞章にも共通する要素の多い祝言で、

蚕養の詞章がその大部分を占めている。冒頭の一部を引用しよう。

御殿作のけこうやうはおもしろくも候へける

わうふんの地の上にねんなふの石をしき

しゆくせんだんの柱を千本ばかり召し寄せ

万本ばかり召し寄せ しゃうじよせたまいて

一本の柱は伊豆の権現

二本の柱は仁王せいしゃ

三本の柱は山王七社の

立てやよろこびたまえば

まことに目出度う 候えける

四本の柱は 四代天王

五本の柱は 牛頭天王

六本の柱は 六地藏の

立てやよろこびたまえば

まことに目出度う 候えける

……

「御殿」の造立をことほぐ唱えごとである。はじめに土台を敷いたあと、「柱」を荘厳する祝言がこのような調子で十二本目まで続く。数字に当てられた神仏名を引き比べてみると、ほとんど三番叟のそれと一致する。このような数えものの詞章を、三番叟が本来的に持っているとは考えにくいので、「せんまんざい」の詞章を三番叟が取り込んだとみておこう。

ところで、もともと「柱」を荘厳し祝福するこの詞章が、なぜ三番叟の語りにおいて一年の「十二月」に置き換えられなければならなかったのだろうか。ここで思い出すのは、謡曲「翁」の替の型として伝えられる「十二月往来」である。

「十二月往来」は、二人の白い翁が登場して正月から十二月までを掛け合いの文句でことほいでゆく、美麗な数えものの祝言である。今に伝わる十六世紀の詞章は、すでに洗練されてしまった後のものだが、それでも古い翁芸のよすがを伝える古雅な曲といえよう。「十二月往来」がもともと猿楽の翁に特有のものであったかどうかは分らないが、少なくともその形式じたいは古態とみてよい。古戸の三番叟は「せんまんざい」の詞章だけでなく、「白い翁」の十二月往来の祝言を「神数え」として読み替え、取り込んでいるのだ。

④巫女の腰なるすりこぎ・杓子

やら目出たの事も候が

西のちやうから東の町へ通る鳥

身は十六羽は一ツ

羽は十六身は一ツ

ひちこくまさいこがこしなるは

するぎじやくしぬきいだし

そらまう小鳥をひやうやつばと射たれば

さてさてめでたいことに、西から東へと鳥が渡ってゆく。「身

は十六、羽は一ツ。羽は十六、身は一ツ。これは鎌倉時代成立の『普通唱導集』にも採録された古謡で、花祭りのうたぐらや、椎葉神楽の神歌、そして中国地方の神楽に登場する鬼・荒平の詞章に見出せる。ここでは鳥にまつわる定型句として語りに挿入されているわけだ。

「いちこいちこ、まさいこ」(イチコ＝巫女か)の「腰」にある「するぎじゃくし」(すりこぎ・杓子か)を手にとって、大空に舞い飛ぶ小鳥を「ひょうやっぱ」と鋭い音を立てて射抜く。

翁はあべこべなことを言っている。すりこぎや杓子のようなずんぐりとした飯具で、空を舞う「小鳥」を射抜くなどというのはありえないことだ。それに、巫女が男根・女陰のメタファーともいわれるすりこぎと杓子を「腰」に持っているというのが、おかしい。ここで翁は、普通とは反対のことを言っておかしみを引き出そうとしているのだ。

⑤ 三人の僧と女鹿のふぐり

そんぜんぼふが あやぼふが

おとくぼふが元にくそ

猪いのし、の角があるやらん

めがのふぐりに驚いて

かんよふと鳴くはうくらもち秋の鹿

詞章が崩れていて判読しにくい、「そんぜん坊」と「あや坊」と「おとくと坊」は三人の僧の名だとわたしは見たい。そして

彼らにいたる三つの寺のいずれかに「猪の角」があるのでは、と語る。次にまた詞章が飛躍する。「女鹿めがのふぐり」(牝鹿の辜丸)に驚いた秋の鹿が「カンヨ」と鳴く、と——。ここでも翁は、猪にはないはずの角や、牝鹿にはないはずの辜丸を語っては、あべこべの言葉遊びをしている。

それにしても、「女鹿のふぐり」とは何とアンヴィバレントで、淫靡な言葉であろうか……。翁の発するふしぎなエロスの言葉は、当時の人々にえもしれぬ豊かな感覚を催させたのだろう。翁のあべこべな言葉遊びには、豊穣を呼び込む力がさりげなく組み込まれていることを確認しておこう。

⑥ 宝数えをもどく

向かいの寺はたが寺

上政下政そよく

あの寺にこそあやちよふかくふであり

にしきちよふかくふであり

それそつとかぞゑたまへ

日本六十六ヶ国 高きは大神 ひききは小神の

とりたから物かきしるし参らせたり

鹿の挿話は置き去りに、ふたたび僧の話にもどる。

「向かいの寺」は三人の僧のうち誰の寺なのか。あの寺にこそ、「綾帳・錦帳」に書くための筆がある。それを「そつ」と数えたまえ。日本全国の大きい神から小さい神までの、すべての神

さまの宝を書き記し、数えようじゃないか。

すべての宝を書き記すというのは、いわゆる「宝数え」である。宝数えの詞章は、能楽の「翁」では片鱗を残すだけに対し、地方の祭り、特に三信遠一帯では五カ所ほどに見出すことができる。能楽が失ってしまった白い翁の「宝数え」を、山村の祭りでは伝承してきたのである。¹⁴⁾

さて黒い翁Ⅱ「さんばそ」の「宝数え」詞章を読み解くために、しばしば古戸田楽の白い翁における「宝数え」を読むことにしよう。

A(モドキ)「かゝる久しき翁が参りたる印にてじくの宝ととんどのたからと

しまくにのたからと我が朝の宝を

わがこのところへつどん楽やつどん楽やと

一ツももらさでかぞへて参らせうよ翁殿」

よふよなる事かな。きよもなる事かな

Bてじくの宝はえしれず

Cとんどの宝にとりては

とうじがもて来てつうじにゆづり日本へひろめて

たから物は何々あやよゆうらん

ひれやしきしよがふのにしき

じやかふのへそとよ

するすみまゆつくり

八ひやくのかけ帯五尺のかずらにくしはりんや

(モドキ)「たとふ紙一ツも、らさで数へて参らせうよ翁殿」
よふよなる事かな。きよもなる事かな。

D島国のたからに取つては

鬼が持つちやうよえめんこぶくろに

打出の小つちにかくれみのかくれがさ

うきぐつしづみしはんしよふのつえとよ

ぜざいおふりにぜざい筵

自身の長寿の謂れをひとしきり語ったあと、Aの部分で宝を数えようと宣言する。「かように長生きな翁がやって来たしるしに、島国の宝と唐土の宝と我が朝の宝を、この土地へ、つどんらくやつどんやくや」と、一つも漏らさず数えてゆくよう、翁殿」。末尾の「翁殿」という言葉でもわかるように、モドキが翁に対して宝数えをしるとせかしているのだ。¹⁵⁾

Bでは「天竺」の宝(「得知れず」としているのは詞章の忘失だろうか)、Cでは「唐土」の宝(蜀江の錦、麝香の臍、播墨、眉作り、八尺の掛帯、五尺の葛、櫛など)、Dでは「島国」の鬼が持っている宝(延命小袋、打出の小槌、隠れ蓑・隠れ笠、浮き香・沈み香、しはんじょうの杖など)を数える。

次に日本に上陸して甲斐、能登、飛騨国、上総、越前の宝を数えてゆく。博多から伊良古崎へ船で渡り、馬や車に宝を積んで、最終的に古戸の「御蔵」へと納めるといふ。

面白いことに翁は宝を与えるだけではなかった。「もどりの

船」には「苦水と苦風と、かい病と疫病と飢渴」を「はら」と入れて、それらと共に「南海」へと下ってゆくのだ。

以上が白い翁の「宝数え」の概要である。麗々しい祝福の詞に留まらず、「宝」を数えては人々に授け、しかも帰りには病氣や飢餓を背負い込んで去ってゆく、白い翁。ここにあるのは、能楽の翁には見受けられない翁の造形なのだ。

このように、三信遠一帯の白い翁のほとんどが「宝数え」の詞章を持っているという事実からも、白い翁と宝とのつながり、宝数えの重要性が窺える。以上を踏まえて、黒い翁の語り世界へもどることにしよう。¹⁷⁾

⑦なりものの祝言をもどく

まず此処へ参りて何やら申す儀のあることを

申す儀あることに取りて

よなの実とはかふのこと

粟米とは粟のこと

豆あづきとはそれぞかし

米をつけやれつきの木

かい餅をかけやれかきの木

もれやれもちの木

すよふやれ杉の木

くゑやれ栗の木

くゑどもくゑぬものをば

かほうおしみと名附けたり

ここで翁は、「何やら申す儀」のあることを宣言し、なりものや樹木の名を次々と唱えてゆく。米をつけやれ榎の木、かい餅をかけやれ柿の木、もれやれもちの木、すようやれ杉の木……先に白い翁が唱えた、穀物のよく実ることを祝福する祝言をもどいているのだろう。

続く「食えども食えども呉れぬものをば、果報惜しみと名付けたり」。これは「さるごばやし」にある「命永への玉柄杓汲めども盛れども尽きせざらん」をもどいたもので、どこかケチな人間を揶揄しているようなニュアンスがある。

いの木貝津の酔四郎太夫

かきの木が下の洪四郎太夫と

われうらをとらへて

そつて見よとゆうやらん

しよつきないことをゆうやらん

ふつきないことをゆうやらん

さわさりながら

銭百ひやびやとにぎらいたり

翁が「果報惜しみ」と名付けたのは「いの木貝津の酔四郎太夫」と「かきの木が下の洪四郎太夫」だった。翁は彼らをつかまえて、「しよつきないことを言うもんじやない。富貴ないことを言うもんじやない」と何やら押し問答のようなことをしている。そんなこんなで、なぜか翁は最終的に、銭を「百」ほど

も「ひやびや」と握ったというから、都合のいい話である。

⑧宝数えをもどく

〔モドキ〕「年寄りたちは何にかおうて目出たもう」

あたたかな餅におうて目出たもう

〔モドキ〕「殿原たちは何にかおうて目出たもう」

十七八の女郎とかたかげにて

そつそひし／＼を目出たもう

〔モドキ〕「おさなき人は何にかおうて目出たもう」

母親のちにおうて目出たもう

年寄りたちの所へば百えほし百かたな

殿原たちの所へば白さやまきに黒さやまき

女郎達の所へば八百の掛帯五尺のかずら

する墨たとう紙なんぞを買いに登るとおうせ候

年寄りたちは何にかおうて目出たもう——。ここでモドキとの掛け合いになり、テンポよく祝言を唱えてゆく。年寄りたちは温かな餅に、殿原たちは十七・八の女郎との逢瀬に、幼い者は母親の乳にありつくつと、めでたかろう。そう語って、老年、壮年、幼年にとつての身近な「宝」を挙げるのだが、一般にいう輝かしい「宝」のイメージからはかけ離れている。

そこで今度は、年寄りたちへは「百の烏帽子・百の刀」、殿原（青年期の男性）たちへは「白鞘巻・黒鞘巻」、女郎たちには「八百の掛帯・五尺の葛・擦墨・畳紙」といった宝を数えてゆ

く。先ほどの「餅」や「逢瀬」や「乳」とは対照的に、黒い翁にしてはまっとうな、いかにも宝物らしきものを数えているではないか。

しかしそこは道化者、結局は烏帽子や刀、鞘巻や掛帯を人々へ分け与えるのではなく、これから「買いに登る」のだ、とオチをつけるのだった。

三国の宝物を集めて屋敷の蔵に納めようと語った白い翁の「宝数え」に対し、黒い翁はまず生りものの祝言をもどき、無茶苦茶な問答をしてお金をせびり、次に身近な宝をあげ、最後にとうとう立派な宝物を数えたと思ったら「買に行く」と要領を得ない。セオリーを巧みに無化し、見物する者の期待を絶妙にずらしてあさつての方向へ話をすすめてしまうところに、黒い翁によるもどき芸のおかしみがある。

これまで、三番叟の登場シーンから、数々の祝福の語り芸を披露するまでを考察してきた。大仰な身振りで観音堂の端から端まで駆けまわりながら登場する三番叟に、人々は「ヨッ、待ってました！」と期待を抱いたろう。つまり直前に「白い翁」がうやうやしく唱えたためだいたい詞章を、「黒い翁」がいかに愉快に崩し、もどいて語り直すかを。

興味深いのは、そこで三番叟が「白い翁」の祝言を面白おかしく茶化すだけでなく、「黒い翁」にしかできない祝言を繰り出している点だ。つまり「黒い翁」は人々の期待に応えるように「白い翁」をもどきながらも、実は笑いにあふれた独創的な祝福芸へと語りを転換していったのである。

(二)翁の胎生学——生まれ所の事

⑨入胎する翁

おりしも正月の事にて候が

て、と母とよろこんで

だんごもち取とのへて

くいつのんづのゑいぐわあまりに

なにやらかたかげにて

そつそひし〜とかたせたまへ候程に

翁は元より親よりかしこき翁なれば

まくら元についつくなつて

いてきくをもしらせたまへ候わず

そつとひし〜とかたせたまへ候程に

それからとして母親の腹にやどつたり

たくさんのお宝を買に行くとの約束はどこへやら。ここで何の前触れもなく翁の「身の上語り」が始まってしまふ。しかしてその内容はきわめて興味深いものだった。

まだ翁の生まれる以前のこと。翁の父と母が団子餅を用意して、食べて飲んでの正月祝いをしている。と、そのめでたさの勢いゆえか、二人はかたかげで、何やら「そつそひし〜」と「語らい」でした。

「語らい」はここでは、男女のむつごとの隠喩である。面白いのはその先で、「元より親よりかしこき翁」は、枕元に這いつくばってむつごとの様子をじっと見ているという。だがそれ

と気付かずに両親は、依然としてその営みを続けている。そして「それからとして母親の腹にやどつたり」と、おもむろに翁は母の胎内に入った……。

⑩翁の誕生

一と月、二月、三月、四月、五月、六月、

七月、八月、九月、十月と申せば

ござんの紐を解かんとて

おりしも六月半にて候

翁が母は大麥から小麥から七八束もかきいだき

あそこのうま屋のすみやらん

こ、のはた屋のすみやらんと

ありかせたまへ候ほどに

翁が思ふには儀ある人の小供は

綾の表にござを敷き

ござの表に錦をさえ敷くと申すに

あの小麥からなんぞに間引きよぶづかと

思い候ままに

母親のちがらにむんづと取り付いたり

十月十日を経た六月半ば、とうとう「産の紐を解く」＝出産の時がきた。翁の母は両脇に麦わらを抱えて、「あそこの既のすみで産もうか、それともここの幡屋のすみで産もうか」とあちへ行つたりこちへ行つたり。

ところが胎内の翁が思うには、「儀ある人」の子供は綾の上にごぞを、さらに錦を敷いて生まれるのだという。とすれば麦わらの上で翁を生もうとする母は、「儀なき人」に違いない。「あの麦からの上になんぞ生まれて、間引かれてはたまるまい」。そう思った翁は、母親の胎内を「むんづ」と掴んだ……。

この母親も心ある母親なれば

腹のうちなるおさなき人

さん屋をきろふとおほしめし

うたを一首よまれたり

のふく腹のうちにおわします

あすのこふの権之助じゃくくく

安穩たいらにごさんの紐をときたまい

ゑほしをきせてけんぶくさせうと

よませたまい候が

あすのこふの殿にては

いみじき事は何が候わづとて

生まるとてがさくくがんと生まれたり

胎児が母の胎を掴んで生まれようとしな。たいへんな事態だが、さいわい翁の母も「心ある母親」、翁よりも一枚上手であった。生まれ来る子が「産屋を嫌う」ものどとつさに察して、歌で呼び掛ける。「のうのう、腹のうちにお願いします、明日の子の権之助よ、権之助よ。平らかに生まれたら、烏帽子を着せて元服させよう」。ここでの「権之助」は、立派な屋敷の生まれ

であることを表現する名といえようか。すると翁は「明日の子の権之助となれるなら、まずいことはあるまい」といって「さがさがんぶ」。まんまと出胎したのだった。

ほかのどんな翁語りにもない、奇想天外な翁の誕生である。「元より親よりかしこき」翁は、両親の交接を見届けたのち、自らの意思で胎内に宿り、母の歌掛けの力で出生を決める。老人であるはずの翁が赤子として生まれ替わる――。〈翁童〉の身体性において、翁はみずからの特異な出生をひょうひょうと語ってゆく。

①生まれた子供は味噌玉似

となりのおかたたちがぎ、つけて

となりにおさなき人がいできた

いざ寄つてげんぞふせうとて

すつき寄つてげんぞふ申候が

たまににたるとおふせ候

(モドキ)「たまはなにたまににたるとおふせ候」

正二月の味噌玉ににたるとおふせ候

味噌玉目出たきもの取上

年男にゆわ、れたり

翁が生まれたことを聞きつけた「隣のお方たち」が、「隣に赤子が生まれた。いざ見参しよう」と見物に来た。そして翁を見るなり、「玉に似ている」。玉のような赤子、とは古くからの

褒め言葉だが、玉は玉でも「正二月の味噌玉に似たる」と言うのだ。

花祭りの翁語りでは「味噌玉のような」はけなし詞で「翁の母」は「天竺壇特山」ほどのスケールで腹を立てているが、ここでは「味噌玉」は褒め言葉として捉えられたらしい。「味噌玉目出たきもの」として取り上げられ、年男が祝うなど、翁の出生祝いのようにすがユーモラスに語られている。

⑫三つで元服した翁

やらめでたの事でも候
て、と母わよろこんで
だんごもち取とゝのいて
くれられ候程にとつては引寄くく
くいつのんづして候が
ふたつといゑばのびあがり
三ツといゑばげんぶくする

さてさて、めでたいことである。両親がよろこんで団子餅を調達してくれた。それを翁が「取つては引き寄せ」「食いつ飲んづ²⁰」していたところ、餅を二つ食べるとたちまちに成長し、三つ食べると元服した。²¹

(三)エロスと豊穣——都入り
⑬都入りの決意

いやくこれほどなる
えいぐわのあまりに
みやこ見ばやとおもい候が
みやこへ登るにもただものぼれまい
海道うちの女郎たちの
も、ねをあり丈すつこすつつのぼられたり

その異能のパワーゆえか、たちまちに成長し、たった三歳で元服を遂げた翁。これほどの「栄華」のゆえに、翁は「都見ばや」と郷里を離れることを決意する。花祭りの翁でいう「都入り」の段である。

さて都へ行くのにも、「ただ」では登らない翁である。海道の女郎たちの「股根をありたけ、すつこすつ」と愛撫しながら都へ向かった……。

⑭「十七、八の女郎」との出会い

やら目出たの事でも候が
都は一ぜう二じよふ三じやう
四じやう五じやうほ里川のはたにぎつとつき
向いの道ばたを見渡いて候えは
年のころ十七八の女郎が

白いきぬのふくたいに赤いきぬのふくたいに

桶とひしやくを打ちもつて

あらわせたまい候が

ひしやくおとのやさしさよ

こんぶくりりようやくくくくと

あらわせたまい候が

おきながおもうには

見目よき鳥はこゑがよいと申なり

こゑよき鳥は見目がよいと申なり

あわれ女郎がすがたかたちかな

一やのたばさにねりかつてくれればやと

おもい候まゝに

うたを一ぱいたらいたり

都に到着した翁は、一条、二条、三条、四条、五条と町を歩いてゆき、堀川のはたに「ざつ」と着いた。川の向こう側を見渡すと、十七、八歳とおぼしき女郎が、紅白の「ふくたい」のいでたちで桶と柄杓を持ち、水を浴びている。その柄杓の音のやさしさに翁は感嘆してしまふ。こんぶくり、りようや、こんぶくり、りようや——翁は胸の高まりにまかせて、「見目のよい鳥は声がよいという。声のよい鳥は見目がよいともいう。なんとすばらしい姿かたちの女郎殿。一夜の契りを結んではくれないか」と懸想し、女郎に歌を掛けた。

⑮あなたこなたの歌掛け

おふりんがわやあなたこなたはつづづ向い

向いなるはしの下の菊次郎がつらわ

さもありよげよなとよんで候

そのとき女郎も心ある女郎なれば

うたのへんかをかやいたり

おりかわやあなたこなたはつづむかい

向いなる橋の下のふどふがつらは

かをすがつらにもさもにたり

こふわすかさでやらおやすかしとよんで候

「堀川や、彼方此方はつづ向い、向いの橋の下の菊次郎の顔は、さも気がありそうな」。女郎の菊次郎がこちらに気がありそうだと、という自信満々の歌である。翁からのとつぜん歌掛けに対し、「心ある」女郎は返歌を詠む。「堀川や、彼方此方はつづ向い、向いの橋の下のふどふの顔は、かをすの顔にもさも似ている。こうは賺すな、やれ軽々しいこと」。唐突な歌がけに、女郎は鼻にも引っかけないようす（かをすが面」は翁の容姿をけなした言葉と考えたい）。

そのときおきなが心がなかなばかりになつて
たんごふ餅になつて

するぎじやくしになつて
もらす斗りになつて候程

心をおししずめて

うたを二はいたらいたり

おふり川やあなたこなたわつ、はたち

なかを流るゝ水として

水とはよまで きみとよんで候

女郎を口説き落とそうとしたが、散々に馬鹿にされてしまった。翁は「心が泣かんばかりに」なり、身体が「団子餅」になって「するぎじゃくし」(すりこぎ・杓子)になって悶絶(「もらす斗りになつて」)したが、やつこのことで心を押し鎮めて、二首目の歌を詠む。

「堀川や、彼方此方はつつはたち、中を流るる水として、水とは詠まで君」。川の「あなた」と「こなた」の掛け合い。歌の意味はよく分らないが、二人のあいだを流れる「水」をなかに情交をせがむ。

⑩ 烏帽子と粟の穂だれ

そのとき女郎もうたじきに

ふせられたとこそおもひ候つら

おけとひしやくをどうとおき

おきながかたにそうくくとみはりざしになつて

あよばせたまへ候程に

おきながおもふには

願ふ所をさいわいか

いたる所をさいわいかなとおもひ候が

おきなのゑぼしの町へ手を入れて

なにやらしつかりしかりとにぎらせ給い候程に

やつこりやアなにをさせたもふとおふせ候

いやくこ年よりして

古戸ふつきさかへましますとて

おきなの町に粟の穂だれのさがりたを

それうにぎるとおふせ候

ついに女郎も「歌式に伏せられた」らしい。桶と柄杓を「どう」と置き、翁の肩に「そうそう」と寄り添ってきた。どうやら翁の懸想は成就したようす。満足気に「願うところを幸いか、至るところを幸いかな」とほくそ笑んでいると、女郎がおもむろに翁の「烏帽子の町」へ手を入れて、「何やらしつかりしかり」と握った――。

翁は、烏帽子を袴の前に付けているにちがいない。「町」は「襠」で、袴の内股のさかい目に足した布、または折り目の襷をもいう。つまり女は、襠から中に入れて「何やら」をしつかりと握ったのだ。とつさに「やつ、こりやア何をさせたもう」とあわてる翁。握ったのは男根に見立てた「粟の穂だれ」である。滑稽にして隠微な「粟の穂だれ」の出現に、場の男たちが笑い、女たちは恥ずかしがる場面だろう。

「いやいや今年よりして、古戸富貴栄えますます……。翁の町に粟の穂だれの下がりたを、それを握る」女郎は豊作の象徴たる「粟の穂垂れ」を握る呪的所作によって、在地古戸の繁栄

を約束したのである。²³

(四)翁は芸の達人——鎌倉入り

⑰「とくつきよげに、ふくつきよげに」——福相の翁

夫からとして

鎌倉まつさかのへにもざつとつき

向いの道端を見渡して見て候て

馬の上へ十四五斤にきばうたせ

よき大名の御出候がおきなを見るより

早々馬よりも飛おりおりさせたまひ候程に

おきな元より親よりかしこきおきななれば

ゑぼしのかさごしおしなをし

した、れのそで引つくり

おふの尺おつとりなをし

たんだめされたんだめされ候が

主はくるしう候わす

けんばんたいめん申候が

我等はさん候 何国のじゃう

鎌倉のものにて候 京にざいきよふ仕

参河にあんどふたまわつて

しよちいりにくだらうが

おきなにおそれをないておりぬぞよ

おきながきづらを見れば

とくつきよげにふくつきよげに

乗馬なんぞがおどろいて

さてこそおかたとおふせ候

エロティックな場面は突如「それからとして」という言葉によつて打ち切られる。語りの場面は大きく変わつて鎌倉。三信遠の三番叟の詞章では多く見受けられる「鎌倉入り」の段である。この段もまた、古戸田楽の三番叟独自の内容を持つ。

鎌倉松坂の地に「ざつ」と着いて向いの道端を見渡してみると、馬に乗っていた「よき大名」が、翁を見るなりさつと馬から飛び降りた。そこで「元より親よりかしこき」翁は烏帽子の「かさ巾子」を押し直し、直垂の袖を繕い、「おうの尺」を持ち直して大名と対面した。「そなたは何国の尉か」とわざと偉そうな態度で問うと、大名は「鎌倉の者です。京におりましたが、三河に領地をたまわつて、所知入りに下つたのですが、翁に畏れをなして馬から降りました。あなたの顔を見ると、福徳が満ちていて乗り馬も驚くほどの相当なお方」と翁を褒め讃えた。翁の福相に大名が畏れをなし、乗り馬までもが驚いたというエピソードである。現実の観音堂ではこれを語る翁の顔(面)を審美して、ああだこうだの批評が楽しげに飛び交つたに違いない。

⑱笛を吹いたら器用者

それからとして

鎌倉やはちが十二のしもく／＼そろへて

熊野へ御神樂をまいらする そつとかたつてげんぞふせ
ふ

ありよふかんり

かんちくのよふぞにしきのゆたんにつゝませ

持つたる笛をするりと抜き出し

八つの歌口つゆうちしめし

ひやびひやびやアリくくく

なんじが所をふきならし給ひ候得ば

おきな見目かたちこそよく候つら

いかなる人のなんぎくぎよふ

小子供迄もすつきと寄つて

あそこの袂をとつては引き

ここの袂をとつては引かせ給ふ候に

心をしづめて笛のねをかやいたり

ありよがんり

一にたいこふ打つたり二に笛をふひたよ

三にささらしでんと

きよふものがくくく だんじり打つた見ふさいな

次なる場面は、十二人の芸能集団を従えた「鎌倉弥八」なる

人物が、「熊野へ御神樂参らする」と現われる。「熊野へ御神樂
参らする」という台詞は、花祭りの翁の語りにも登場してくる。

ただし花祭りの翁の「鎌倉入り」の段では、神樂の場に出くわ
した翁が、「あれは何だ」とひとつひとつの祭具の名を訊ねると、
村人が一々答えていく。「神の前での——」とその神聖さを強

調しながら、なぞ掛けの間答を利用して、実際の祭場をことほ
いでいるのである。

では、田楽の翁の場合はどうか。錦の袋から「漢竹の横笛」
をするりと抜き出して、八つの歌口の露を払ってから「ひやび
ひやびや、アリくくく」と豪快に吹いた。すると、翁の「見
目かたち」が良かったからか、大人から子どもまであらゆる人
が「すつき」と翁のもとへ寄ってきて「あそこの袂を取つては
引き、ここの袂を取つては引」くほどの大人気に。人だかりの
中心でまさしく引つ張りだこの翁は、ことさらに心を鎮めて笛
の音を「かやいた」。

すると、翁の吹く笛に感激したのだろうか。太鼓、笛、觥さかづき
シデンデ24（鼓）と、鎌倉弥八の従える「しもじも」の芸能者た
ちが次々に音を鳴らしはじめた。そして、どこからともなく声
が上がる。「器用者よ、器用者。だんじり（お囃子）打つてごら
んなさいな」。

かかりける所へたいこをとりよせ

いちにだいぶだいたいぶくくく

うつたるところはやふさしや

きよふものがくくく だんじり打つた見ふさいな

かかりける所へ笛を取寄て

ひよよれひよよれ

いちにひよふれひよよれと吹いたる所はやさしや

きよふものがくくく だんじり打つた見ふさいな

かかりける所へかねを取寄て

こきよよれくく いちにここうきよよれと

あわせたふるところはやさしくもや候

それならやってみようと、翁が太鼓を「だいぶだ、だいぶだ、だいぶだ、だいぶ」と打つてみたところ、実に簡単。次に「ひよふれ、ひよふれ」と笛を吹き、「こきよよれ、こきよよれ」と楽に合わせて鉦を叩く。どれもこれも、たやすくこなす。どんな楽器の演奏も、(この生れる前から翁で、再誕した)翁には、あまりに簡単すぎることにらしい。ひとつ演奏するたびに「器用者が、器用者が」とやんやとかっさいの言葉が入り、翁も見物衆の期待に応えて自在に楽をかき鳴らす。黒い翁の語りの中でも、最も盛り上がりを感じさせる部分である。翁はまさしく芸能の達人だったのだ。

(五)黒い翁の祝福芸

①稚児の誕生祝い

もの申さふよもの申そ

さりくぎりすのもどりこが

かふかごこだたとふたアよ

たアけのごしよだたとふたよ

さふちやアらば十七さふちやアらば十九よ

十七と十九はにようたるみよとよ

藤のねをまふくらに小藤のねをまふくらに

もふけたるちごをばふじおふどのともゆおふよ

竹のねをまふくらにこぎ、のねをまふくらに

まふけたるちごはさ、おふどのともゆおふよ

いものこをまふくらにこいものこをまふくらに

まふけたるちごをばどん太郎ともいおふよ

こうしてついに調子に乗った翁は、突如「もの申そ、よ、もの申そ」と歌うように語りだす。以下、試みに現代語にしてみよう。

「キリギリスの戻り子」がここは何処だと問うたよ。「竹の御所」だと答えたよ。そこへ来るのは、「十七」と「十九」のお似合いの、匂うような夫婦よ。この夫婦が、「藤の根・小藤の根」を枕に交わって、もうけた子供を「藤王殿」、「竹の根・小笹の根」を枕にもうけた子供を「笹王殿」、「芋の子・小芋の子」を枕にもうけた子供を「どん太郎」と名付けて祝おうよ——。

語り口のニュアンス、また最後に「祝ふよ」と言っていることや、(二)(三)(四)で見えてきた物語調の語り口から、翁は福を与える者へと転身していることに気付く。翁はさつきまでの身の上語りを放り投げ、生まれた子の名付け親となつて、祝福しましようと宣言しているのだ。

ところでいつの時代も、「誕生」はめでたいできごとだが、白い翁の語りには赤子の出生を祝う詞は見受けられない。誕生(とそれに先立つ性交)は、もっぱら黒い翁の持ち前とするモチーフだったにちがいない。

そもそも奥三河の花祭りや西浦の田楽は、別名「木の根祭り」とも呼ばれた。年に一度の祭りの日だけは、気の合った男女が

周囲の森に分け入り、木の根を枕に一夜の夢を結んだことから、そのように呼ばれているという。

「木の根」での一夜の逢瀬へと人々の連想を誘いつつ、誕生した子供に「王」の字を冠したためたい名前を授ける、黒い翁ならではの祝福芸。第三子の名前は「芋王」かと思いきや「どん太郎」と名付けたところがおかしい。ちなみにこのパートは花祭りの翁語りに巧妙に取り入れられているが、それは最後に述べることにしよう。

⑳烏帽子の殿褒め

ついに翁の語りも終りが近づく。ここからは「殿」をさまざまに祝福してゆく「殿褒め」の語りをする。さて、詞章を見ていこう。

前で見ればうつ向いてうしろで見ればあを向いて

四ほふな男のよい男ぢだいよりよい男

「前から見ればうつむいて、後ろから見れば仰向いて、四方のどこからどう見てもよい男。地代よりよい男」。よい男、よい男と褒めながら、その内実はあからさまに容姿をけなしている。ここに、褒めることがけなすこと、けなすことが褒めること、という特有の論理が息づいている。「言語の表面通りに考えられ、実はその反対の効果の現われるように使われた」（折口信夫「翁の発生」）祝言の古い一形式は、このようなものだったのであるまいか。味噌玉と言われて「めでたきもの」と喜んだと

いう場面も然り。

以下、翁は「さてさて殿は見事な宝を揃えてお持ちあったり」として、おそらくは呪的な所作を交えながら「殿」を褒め上げてゆく。ここでふたたび、翁ならではの被りものとして登場するのが「烏帽子」である。翁は烏帽子をさまざまに宝物に見立て、「殿」の宝揃えを祝福する。⑧宝数えをもどく、⑩翁の誕生、⑯烏帽子のなかの粟穂、⑰大名も畏れをなす福相、などのパートにも烏帽子とそのモチーフが散見されたように、ここでも三番叟固有の衣装にして呪物たる烏帽子は、（多くは滑稽な）所作を伴って語られた違いはない。古戸田楽の黒い翁は、まさしく「烏帽子の三番叟」と呼ぶに相応しい翁なのだ。（非常に興味深いパートといえるが、まとまった考察は次稿を期したい。）

㉑褒め尽くしと大団円

（モドキ）「とのほめてとらせう」

ほめうがな

あはれもの、きよふきかなあはれものすがたかな

したいを見たればひたちでんにも見られたり

ほふを見たればほうしやうでんにも見られたり

口を見ればとしたち口にも見られたり

むねを見たればむなむしやどのにも見られたり

かたを見たればかたおかでんにも見られたり

はらを見たればはらたの太夫にも見られたり

こしを見たればこしかゝとのにも見られたり

あしを見ればあしかがとのにも見られたり

七代八代びんのけのましらがになるまで

ちやうく打てさかへまします

はたけ山の五郎こけの八郎曾我の十郎五郎

ふたまた川のあわのこきじが舞をまをふよ

長大な語りと祝福の翁芸は、めでたく大団円を迎える。「殿褒めてとらせう」のモドキの言葉に「褒めうがな」と答えて、「殿」の容姿をさまざまに褒めあげてゆくのだ。「額を見れば常陸殿」、「頬を見れば宝生殿」……と、身体の部位の一つ一つを武将などの立派な人物に見立て、矢継ぎ早にことほいでゆく。これだけの褒め言葉を一気に語ることで、「殿」の安寧と長寿が祈念されるのだ。最後は「七代八代、髪の毛の真白髪になるまで、ちやうく打って栄へまします」とめでたく締め括られる。

こうして優に一時間を越えるであろう、長い翁語りが終わる。花祭りの翁の場合は、最後に「舞を舞おうよ、万歳楽、万歳楽」と締めくくり、ひとしきり祝福の舞を舞ってから去ってゆく。古戸田楽の詞章でもやはりこのあとに行なわれるであろう舞を示唆しているが、「畠山の五郎、こけの八郎、曾我の十郎、五郎、ふたまた川のあわの小雉子が舞を舞おうよ」と語られ、ほかの翁詞章とは大きく異なっている。これは翁自身の舞というより、古戸田楽における直後の演目（「宮ならし」）のことを示しているのかも知れない。ともあれ、黒い翁も最後は祝福の舞を予感させ、人々の笑いと喝采のうちに退場していくのだった。

終りに——ふたたび花祭りの翁へ

前論考では、花祭りの翁の長大な詞章の解説に挑んだ。今回は、その下敷きとなったとおぼしき古戸田楽の三番叟詞章を読んできたわけだが、あらためて気付かされる点がいくつかあった。特に興味を惹いたのは、¹⁸「稚児の誕生祝い」のパートが、花祭りの翁では以下のように改変されていることである。

遠き天竺須弥山の山の麓にて生れたるおきなにて候

十三尋の竹の王とも背比べ申したり

三十三尋の木王とも背比べ申したり

峯七ツ谷七ツ十四の山を這ひ越えたる

藤の王とも背比べ申したり

一寸八分の蔦の臺とも背比べ申したり

（振草系月）

翁は自分の出自を告げたあと、「十三尋の竹の王」、「三十三尋の木王」、「峯七つ、谷七つ、十四の山を這い越える藤の王」、最後に「一寸八分の蔦の臺」と「背比べ」したという。²⁰それほどまでに自分の背丈が高いことを自慢しているのだ。

このほかにも花祭りの翁は、琵琶湖が七度干上がって桑原になるのを見たり、三千年に一度だけ実る西王母の園の桃を三度も食べたりと、とてつもない長寿を自慢する。ほぼ同様の詞章は古戸田楽の白い翁が語っているので、そこから取り込んだのだろう。しかし「樹木の王」との背比べの話は、白い翁の語り

には見られない。では「背比べ」は花祭りの翁独自の要素かといえ、そう単純にはゆかぬ。

古戸田楽・黒い翁の⑩稚児の誕生祝いのパートに出て来る「藤王・笹王・どん太郎」を、白い翁の「自慢話」の筋立てで背の高い「樹木の王」として登場させ、彼らと背比べをしたという話に仕立てているのだ。

三番叟の語りにあつたモチーフを白い翁のコンテキストで読み替える——。こうした融通無碍の芸当は、芸能に秀でた翁ならばこそである。花祭りの翁詞章は、翁と三番叟の詞章を絶妙に融合させ、大胆な読み替えをほどこすことによつて成立したのだ。

田楽の翁から花祭りの翁へ。再話された翁語り。花祭りにおける「翁の発生」が、この先に待ち構えている。

【註】

(1)宮嶋隆輔「打っかけ引っかけ行くほどに——花祭りの翁語り考」(『学生研究助成金論文集18 わたしたちの論文』和光大学、二〇一〇年)。

(2)古戸は花祭りばかりでなく、八月の「古戸盆踊り」や十二月の「白山祭り」(高嶺祭り)・「御神楽」でも有名である。とりわけ白山神社での白山祭りは重要で、お玉^ごと呼ばれるご神体(布で幾重にも包まれており、誰も中身を覗いたことはないという)を持つて舞う「お玉の舞」・「権現の舞」が行なわれる。この舞を奉納しないうちは各地の花祭りを始めることができないとの言い伝

えや、花祭りの源流をこの祭りに求める説もある。また現行の「御神楽」は、閏年に「古代^{こご}の舞」と称して、田楽の面を付けた翁と三番叟が舞う。三番叟が弓矢を持って舞う点もふくめ、興味をそそる行事である。三河大神楽でかつて行なわれた「こでの遊び」と関連しようか。

(3)後藤淑「北設楽地方の田楽」(『北設楽郡史民俗資料編』青陵書房、一九六七年)。

(4)「古戸田楽」(『花祭』後編、岡書院、一九三〇年。のち早川孝太郎全集Ⅱ、未來社、一九七二年)。

(5)本田安次「愛知県古戸田楽の能」(本田安次著作集第十七巻『日本の伝統芸能・狂言・人形芝居ほか』錦正社、一九九九年)。

(6)山本ひろ子先生は「神楽の儀礼宇宙——大神楽から花祭りへ(中)大神楽祭文志・後編、「おりいの遊び」の世界」(『思想』一九九六年第二号、岩波書店)で大神楽の次第「おりいの遊び」の解説を試み、古戸田楽の「せんまんざい」を一つの鍵として論を展開された。神楽と田楽の交渉については、今後も検討されるべき課題である。

むろん田楽の重要性は、神楽との関係にはとどまらない。後藤淑は、古戸田楽を含む三河の田楽について、猿楽との通有性を指摘している。また新井恒易は、地方に残る翁詞章と猿楽の翁詞章を比較しながら数々の問題点を指摘した(『恍惚と笑いの芸術「猿楽」』新読書社、一九九三年)が、この分野における本格的な研究はそれ以降なされていない。

(7)注(3)。

(8)本田安次「猿楽囃子と万歳楽と」、注(5)本田安次著作集第

十七卷所収。

(9) 『年内神事次第旧記』(神道大系 神社編30「諏訪」精興社、一九八二年)。諏訪祭政体の長、生き神・大祝おほほうりの分身たる神使たちがこうした芸能を演じていたという事実は、これまでの神使のイメージを覆すものといえよう。また、同じく二十番舞のなかに田遊びと目される演目が見受けられることも注目に値する。なお「神使」については、山本ひろ子「囚われの聖童たち——諏訪祭政体の大祝と神使をめぐって」(赤坂憲雄ほか編『排除の時空を超えて』岩波書店、二〇〇三年)を参照のこと。

(10) 諏訪と伊勢、そして熊野は、奥三河の神楽や信仰を形成した三大源流といえる。諏訪・伊勢の神楽は早くに途絶えてしまっただが、その神歌や祭祀の形式が一部、三信遠の霜月神楽系の祭りに流入し、現在まで伝えられている。古戸の翁詞章は、諏訪・伊勢・熊野への古い交通の面影を残す資料としても面白く読めるかもしれない。

(11) 新井恒易は、三番叟の語りに取り込まれた十二月往来風の詞章を「十二月祝」と命名した(注⑥新井論文)。三番叟の詞章に十二月祝が確認できるのは、古戸のほか三カ所(加治田、新野、神沢)にとどまる。特に神沢は十二月月に神仏を配当している点で古戸とより深い関連が見られる。そもそも古戸の三番叟はほとんど独自の詞章で構成されているが、唯一、神沢の三番叟にだけは共通点がいくつか発見できる。両者の比較研究も今後の課題としたい。

(12) 良季の『普通唱導集』(村山修一翻刻・解説『普通唱導集』法蔵館、二〇〇六年)に以下の記事がある。

老翁面之白髪 羽十六之歌無_レ滞、
冠者公之フト眉 齡廿許之顔有_レ粧

『普通唱導集』の成立は一二九七年とされるので、翁猿楽の「詞章」の記録としては現存最古の記事である。ここに見える「羽十六之歌」が式三番の資料群には残されておらず、ただひとつ古戸田楽の三番叟に見出せる事実は特筆に値する。一方、この歌は近世の花祭りのうたぐらにも見出すことができる。

(13) 鹿の鳴き声を「カンヨー」と表現する例は、早川孝太郎の『猪・鹿・狸』(郷土研究社、一九二六年。のち講談社学術文庫、一九七九年)に見える。

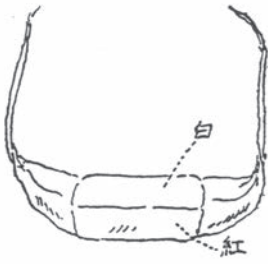
(14) このことに早くから着目したのは本田安次であった(『翁そのほか』明善堂書店、一九五八年)。この本で本田は、翁をいくつかのタイプに分類して論じているが、こうした方法が示唆するところは大きく、今後再検討されるべき意義をもつ。また本田は同書所収の「天龍川流域の古能」で、古戸田楽の演目についても詞章を提示しながら若干の考察を加えており、鋭い知見が散見される。

(15) 翁の語りの区切りごとに、翁に次の話題を語るようせかすのはモドキの役割で、花祭りの翁詞章、特に三沢山内本の台詞にはつきりと認められる。岩田勝はこのモドキの存在を、精霊を操る「司霊者」と位置づけた(『荒平考』『神楽源流考』名著出版、一九八二年)。しかし、翁の語りはモドキに促されてのものばかりではない。また祭りの庭に祝福に訪れる「翁」のありようを考え合わせると、花祭りや田楽におけるモドキが「司霊者」の零落した姿との仮説には首肯しがたい。

(16) 島国の鬼の持つ宝に「しはんじょうの杖」が数えられていることは注目に値する。岩田勝は西国の神楽に登場する鬼「荒平」の宝の一つ「しはんぢやうの杖」を「死反生の杖」と定義付けた（「しはんぢやうの杖」注⁽¹⁵⁾前掲書。「死反生の杖」とはすなわち、死を生に反転する賦活の呪力を宿した杖の謂いである。なお死反生の杖と荒平が登場する最古のテキストは天正十六年（二五八八）の奥書を持つ「荒平舞詞」である。そこで語られた「しはんじょうの杖」の言い句を、古戸田楽の翁がとりこんでいた事実にはあらためて驚かされる。

(17) ちなみにパート⑥宝数えをもどく(一)に引用した「日本六十六ヶ国、高きは大神、低きは小神の」というフレーズは、神楽の「湯立て」など神勧請の場面で用いられる唱文の一部である。翁は「宝数え」ばかりでなく、神下しにおける「神数え」をももどいているのだ。

(18) 「生まれる前」に翁は「枕元」へ「ついづくなくて」いるとの表現に注目したい。民間信仰にあつて「枕」は、しばしば一種の呪物であった。たとえば高知県香美市物部町に伝わるいぎなぎ流の「法の枕」（升などに米を盛り、御幣を指す台としたもの）や、



「ほうまくら」の一種
（「花祭」後編より）

花祭りの榊鬼屋敷が代々伝えた「ほうまくら」（法枕）など。も

しかしたら誕生する前の翁は、枕に取り付いていたのではあるまいか。なお「法の枕」については、山本ひろ子「呪術と神楽——日本文化論再構築のため

に」第一回「法大夫の住む村」（『みすず』一九九八年二月号、みすず書房）を参照のこと。

(19) 三信遠一帯の霜月神楽には「神々に今日ぞ吉日綾をはえ錦をはえて御座と参らす」などの神歌が流布している。綾と錦を重ねて御座とすることは、来臨するものが、神や貴人の資格を持つことの表示といえよう。

(20) 黒い翁は「食べる」というモチーフを頻繁に語る。この性格は古戸の翁に限らないものらしく、たとえば新野の雪祭りに登場する黒い翁Ⅱ「正直翁」の詞章には「春のはじめのことなれば、めでたきことを申さうか、おかしいことを申さうか、おもしろいことを申さうか、食ふことを申さうか」とある。今年（二〇二二年）の雪祭りではこのとき、周囲を取り巻く見物衆が「おもしろいこと聞かせて」などと翁に注文を付けるが、結局翁は、「食うこと」を長々と語ってゆくので、人々が「翁は食うことばかりや」とがっかりして見せる。笑いの渦が湧き起こる場面である。

(21) 二歳で伸び上がるように成長し、三歳で元服したと解釈することも可能。

(22) 知る限りでは同様の用例を見つけることはできなかったが、歌の呪的な力を「式神」に見立てた慣用語であろう。

(23) 祭りにおいて面を着けた男女（ほとんどの場合、尉と姥）が抱擁したり、性交の真似をしたり、または性器を連想させる祭具（すりこぎや杓子、大根など）を人々に擦り付ける等、性交を暗示する所作を感染所作と呼ぶ。特に三信遠一帯の祭りには必ずといっていいほど取り込まれており、古戸田楽では「宮ならし」

における「べべあおり」がそれに当たる。ここでの三番叟の語りもその一種に入るだろうが、あからさまな性的表現ではなく語り芸ならではの陰影を表現することに成功している。

(24)「シデンデ」は「シテテイ」のことであろう。シテテイは鼓(またはそれを打つこと)を意味する古語で、管見では那智田楽での「シテテン」、毛越寺の二十日夜祭での「シッテイデン」が鼓を打つ役名として伝承されているのを確認できた。ちなみに乾武俊先生は『黒い翁』(解放出版社、一九九九年)で、那智田楽のシテテンの舞と三番叟との類似を起点に大胆な「黒い翁」論を展開されている。

(25)翁は、巨大な樹木の王たちだけでなく小さな「一寸八分の露の臺」とも背比べをした。このくだりは、「峯にては大堂竜の翁なり。沢にては古松下上の翁なり」と自由自在に姿を変える古戸田楽の白い翁の造形と通い合うものといえよう。

【付記】

わが師・山本ひろ子先生からは、昨年度に引き続きたくさんの助言とご指導をいただきました。末尾ながら記してお礼申し上げます。

指導教員のコメント

山本ひろ子（表現学部）

「翁」をテーマとした研究の昨年に続く成果である。天龍川水系の山里に分布する霜月神楽の中で奥三河の花祭りはつとに有名だが、宮嶋が研究テーマに選んだのは、鬼でも神事でもなく、「翁」（三番叟）だった。当初私は、一抹の危惧を抱かざるをえなかった、と告白しておこう。なぜなら「翁」のような語りの芸能はほとんど衰亡しており、残された詞章以外には、手がかりがほとんどない。しかも語りの筆録とその伝書という性質上、誤字脱字はもちろん、意味不明で文の体をなさない箇所がいくつもあって、解明の作業を阻む。優れた先学ですら、ほんの一部にしか手をつけなかったのもうなづけよう。だが見方を変えれば長大な翁語りは、田楽や田遊び、能楽など近接する芸能を横断する語りの古態性と豊穡さを孕んだ、実に魅力的な素材なのだ。そして今年は、昨年の論考（「打っかけ引っかけ行くほどに―花祭りの翁語り考」）に踏まえて、いよいよ花祭りの翁語りの一大源泉というべき古戸田楽の三番叟に挑んでる。

花祭り有数の伝承地・東栄町古戸で、かつて盛大かつ厳重に行なわれていた古戸田楽は、明治に途絶し、たくさんの仮面や早川孝太郎が採集した資料だけが残された。そのひとつが三番

叟の語り「さんばそ」である。しかしこのテキストは支離滅裂さ、難解さにおいて花祭りの三番叟を遙か凌駕しており、これまでまともに扱われてこなかった。宮嶋は前年の論文での蓄積と鋭い言語感覚、参考資料を駆使して、かなりの程度解読に成功している。翁の秘密はまだ眠ったままだし、鬱蒼たることばの森はまだまだ奥深い、中世的な黒い翁（三番叟）のおそるべき道化精神と語りの地平の一端は開示されたといつてよい。愚直なまでのテキスト読みと、関係資料の博搜、現場での祭り体験、この三つのどれを欠いても本論考は成り立たなかったろう。

論文の最後は、ふたたび花祭りへの翁（三番叟）へと立ち戻ること、いったん閉じられている。考えてみれば花祭りの翁は、田楽の三番叟を花祭り風に焼き直したただけではなかった。ではそれはいったいなんだったのか――。さらなる展開を、指導教員としても一読者としても期待したい。

研究ノート 〈山の神〉像を追って―資料の読みとフィールドワークを中心に―

10T131 中田雪野

【目次】

はじめに―山の神との出会い―

(一) 『遠野物語』と椎葉神楽

(二) 今年度の研究方法

I 祭文・物語の中の〈山の神〉

(一) 物部町／いざなぎ流「山の神の祭文」

(二) 中尾計佐清太夫本「山の神の祭文」の系統

(三) 「山の神の祭文」の中の〈山の神〉

(四) 宗教者と在地の思想

II 狩猟儀礼の中の〈山の神〉

(一) 椎葉村／尾前神楽「シシマツリ」

(二) 「シシマツリの唱え言」の中の〈山の神〉

(三) 〈山の神〉と獵師の交渉

III 神楽の場に出現する〈山の神〉へ―今後の展望―

(一) 椎葉村／嶽之枝尾神楽「宿借り」

(二) 奥飯石神楽「柴佐の舞―悪切」

(三) 神楽と〈山の神〉

(四) 今年度の成果と来年度への展望

【付録】 諸塚・椎葉フィールドワーク

【註】

【参考文献】

はじめに―山の神との出会い―

『遠野物語』という本がある。言わずと知れた民俗学の創始者・柳田國男の代表作だ。遠野の出身者・佐々木喜善からの聞き取りをもとに、彼の地に伝わる民話や噂話を柳田の手で文章に起こしたもので、後の民俗学者のみならず、多くの人々を魅了してきた名著である。初期の柳田の関心である「山」や「山人」に関連する話も多く収められており、それを読んで、漠然とだが「山の信仰」に興味を抱くようになった(註1)。

(一) 『遠野物語』と椎葉神楽

「山の信仰」「山の神」に興味を持ち始めていた折に、山本ひろ子先生の授業「日本文化論2」のフィールドワーク(註2)で柳田がかつて訪れたという宮崎県の山村・椎葉村へ夜神楽を見学に行くことを知り、一も二もなく参加を決めた。それから当地の習俗や神楽の概観などを学ぶための事前勉強会が開かれ、そこで出会ったのが嶽之枝尾地区に伝わる神楽の演目「宿借り」である。神楽の場(神楽宿)に訪れたみすばらしい旅人が宿の主(神主)と宿の貸し借りを巡って問答をするという内

容で、初めは古びた蓑・笠をまとった怪しげなその姿に惹かれたのだが、詞章を読んことに気付いた。

破れ笠に蓑を負い、腰に刀を帯び、破れ草履をはき、竹杖をついたみすばらしい姿の旅人が神楽宿（現在は嶽之枝尾神社拝殿）にやってくる。「御宿申し候」と一夜の宿を乞う。太鼓に腰をかけた宿の主人が右手に竹杖をついて「御宿なるまじく候」と応対する。これは榊葉では嶽之枝尾だけに伝わっている「宿借り」という曲である。

主人は「ほっと承り候。前から見ればおさえたるが如くして、赤ひげに猿まなこの御宿との頼もしき、御宿なるまじく候」などと、旅人の姿の醜さをあげて宿を断わる。

（中略）問答の中で主人は旅人のことを「御山人」といつている。御山人すなわち山の神である。

（渡辺伸夫・渡辺良正『榊葉神楽』）

「赤ひげ」に「猿まなこ」の御山人（山の神）。この特徴から『遠野物語』に収められた、ある話を思い出した。

堂の前には山神の字を刻みたる石塔を立つ。昔より山の神出づと言い伝うるところなり。和野の何某という若者、柏崎に用事ありて夕方堂のあたりを通りしに、愛宕山の上より降り来る丈高き人あり。（中略）大いに驚きて此方を見る顔は非常に赤く、眼は耀きかつかいかにも驚きたる顔

なり。山の神なりと知りて後をも見ずに柏崎の村に走りつきたり。

（第八十九話）

後の方より菊蔵と呼ぶ者あるに振り返りて見れば、崖の上より下を覗くものあり。顔は赭く眼の光かがやけること前の話のごとし。お前の子はもう死んで居るぞという。この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはっと思いたりしが、はやその姿は見えず。

（第九十三話）

『遠野物語』で〈山の神〉は「赤い顔」に「耀く眼」を持つと語られている。先にみた「宿借り」の問答にある〈御山人〉の特徴、「赤ひげ」に「猿まなこ」と酷似しているよう。なぜ東北と九州という遠く離れた地で、両者の姿は似ているのか。伝承の「原典」のようなものがあり、それが日本の北と南に伝播したのか。或いは実際に存在した何者かの姿をもととしているのか。

この時抱いた素朴で単純な疑問が、今年度の研究テーマを「山の神」に決めるきっかけになった。

（二）今年度の研究方法

五月のゼミ合宿時に取り組んだ柳田國男の『二目小僧その他』（註3）において、「人身供儀」に関する柳田の考察や「鍛冶・製鉄」に従事した人々の信仰に触れ、より多様な「山の神」の

姿も見て行きたいと考えた。そのため、昨年度の学生研究助成金論文集18に「研究ノートⅡ狩獵儀礼と「山の神」たち」を發表した高橋を共同研究者に狩獵儀礼へのテーマを深めながら、新たに「祭文」と「神楽」という視点を加えた(註4)。

具体的には、昨年度と同様に柳田國男の『後狩詞記』を主要テキストに据えつつ、

① 新たなテキストⅡいざなぎ流「山の神祭文」を読み込み、祭文の中の「山の神」の姿を見て行く。

② 物部、諏訪、椎葉、島根といったフィールドで、いまの人々の山の神に対する考え方とその背景を知る。

の二点を設定し、山の神に関する祭文類の読み込み、及び、フィールドワークやそれに向けた自主勉強会などの計画を立てて実施してきた。

以下は「祭文・物語」、「狩獵儀礼」、「神楽」の三つの視点で〈山の神〉を考察してきたことの研究ノートである。

山の神がどのように捉えられ、共通点あるいは相違点がどこにあるか、またそこに込められた人々の想いにも焦点を当ててゆきたい。

I 祭文・物語の中の〈山の神〉

「祭文」とは祭礼や祈禱の折に、それに携わる宗教者によって読み上げられるものである。そこには神を主人公とした物語が語られていることが多い。〈山の神〉を考えるにあたり、山の神を主人公とした祭文を最初に取り上げたい。山の神はどう

いう出自なのか、どのような活躍をするのかなど、祭文の読解を通して、まずは山の神へ迫る手がかりをみつきたい。

(一)物部町 いざなぎ流「山の神の祭文」

高知と徳島との県境に位置する香美市物部町には、「いざなぎ流」と呼ばれる「民間信仰」が残されている(註5)。いざなぎ流の司祭は「たゆう太夫」と呼ばれ、数年に一度の大祭から日常の病人祈禱まで、村内の祭祀・儀礼を広く執り行う。陰陽道の流れを受け継いだ作法が特徴的だが、仏教や神道の要素も多分に含まれている。正典は存在しないため、儀礼の中で読み上げられる祭文も太夫ごとに異なる。また、祈禱や占い、神楽なども各太夫で違いがあるようだ(註6)。今回扱うのは、中尾計さきよ佐清太夫が受け継いだ「山の神の祭文」(註7)である。では祭文の構成を記したい。

(二)中尾計佐清太夫本「山の神の祭文」の系統

いざなぎ流の祭文類はそれを伝える太夫ごとに違いがある。同じ「山の神」を扱った祭文でもいくつかのバリエーションがあり、以下の様な系統に分かれている(註8)。

- ① 山の神の降臨と祭祀の起源譚の系統
- ② 山の神と龍宮乙姫との婚姻譚の系統
- ③ 両方の物語を兼ね備えた系統

このうち①は陰陽道系の信仰の流れを汲む土佐の「博士」の後裔が管理していたもの、②は熊野信仰との関係が認められることから熊野系の獵師や修験の間で流布し、彼らによってもた

らされたもの、③は陰陽道系信仰と熊野修験系信仰の結合したものと考えられている(註9)。中尾計佐清太夫の「山の神の祭文」は③に属し、山の神の降臨から龍宮乙姫との間に子供が誕生するところまでが描かれている点が特徴である。以下、物語の進行に沿って祭文の中の〈山の神〉の「特徴」を描出し、その背景に何があるのかを見てゆきたい。

(三)「山の神の祭文」の中の〈山の神〉

▽異郷から訪れる神

山の神の父の御名は「天の権ぜの王と申す 母の御名はまさき大権如来の王と申す 之天地久もくろが御山へ天や上らせ給ふてござれば

まず山の神の出自が語られる。父母の名は「天の権ぜの王」と「まさき大権如来の王」だ。諸本によって父母の名は微妙に異なるが「きむら天王」(猿か?)、「黄金如来」と考えられるようだ(註10)。「きむら天王」が猿に由来するとすれば山の神と猿を結び付ける思想がいざなぎ流にあったことになろうか。由来は不明だが、何らかの仏の名称が転訛したものと思われる(註11)。

我等にりよじしよぶ分け少なきものよと申して 四六寸四
こうの矢をかまへて 大日本六拾六國八十ヶ國は廻らせ給

ふてござればども

続いて「山の神」は天竺の領土に不満を持ち、日本へと移住する。斎藤氏は、いざなぎ流の「山の神の祭文」に語られる〈山の神〉は日本の山にもともと存在した神霊ではなく、異郷(天上世界)から来臨してきた神であったと簡潔に記しているが、もう少し踏み込んだ他の考察も挙げておきたい。

いざなぎ流の祭文では、天竺・唐土・日本の三つの世界を対立させつつ一組のものとする宇宙論が支配的である。とくに、日本と天竺とを対立させ、後者を神々の世界、天界、聖なるものの宿る世界として描いている(註12)。

さらに、〃山の神が天竺から来臨した〃というモチーフは世の本地譚の形式を借りたもので、いざなぎ流の祈禱師がそこにまた異なる要素を加えて独自の祭文を創り上げたのではないかとされている。

太郎のごうきんたちは東々方花ぞが山をりよじ持せ給ふて
御わします 次郎のごうきんたちは 南々方青葉の山を
りよじ持せ給ふて御わします 三郎ごうきんたちは西々方
白葉の山をりよじ持せ給ふて御わします

続いて山の神である「太郎のごうきんたち(御公達)」は天竺で「次郎のごうきんたち、三郎ごうきんたち」という兄弟神

と領地分けをする。太郎（のこうきんだち、以下略）は東々方花ぞが山、次郎は南々方青葉の山、三郎は西々方白葉の山、というように、それぞれ四方の領土を与えられる。このことについて小松和彦氏は、いざなぎ流では陰陽道的な五行思想が重視されているということが一つの理由ではないかと推測しており、もしかしたら「山の神の祭文」で語られる〈山の神〉は、元は五人であったのかもしれないとしている。

▽病をもたらず神

もんぶす性のはえこういん一本有のに至るまで 皆我等の羽休み木よのうとは申してござれど もんぶす性の氏子はしのばわしも 元うれえぞんじ申さん 氏子のぎいにてござれば切り取り取り おうりようたいさんごうもくくなされてござれば あらとん病を身に受け申してござれば

山の神の眷属の「羽休め木」を、そうとは知らずに伐採した人間に「お叱り」として病をもたらず場面である。斎藤氏は「天竺星のじよもんのみこ」という存在に焦点を当て、山の神と柚人たちの橋渡しをする「太夫の原像」が描かれていることが主要素だと述べている。実際にこの「山の神の祭文」ではさほど「山の神」と「病」についての関連を考えさせるような描写はない。しかし、「病の神」としての性格を持った〈山の神〉を伝承する祭文も一方では存在している。

小松キクジ太夫の「山神祭文」（註13）は、「山の神の祭文」

と異なった詞章を持つ。斎藤氏は「共同祭祀の起源譚」の構造を持った「山の神の祭文」に対し、小松太夫本「山神祭文」は特定の病者を対象とした「病人祈禱」の場を想定させ、病者に取り憑いた「山の神・眷属の障り」である魔性・魔群のものを山に送り返し、鎮めることに目的が置かれているためと指摘している。つまり〈山の神〉（とその眷属）を、不断に障りや病をもたらず「障礙神」として捉える思想がいざなぎ流にはあったということだ。

さらに、〈山の神〉と龍宮乙姫との間に生まれたのが「四百四病の病の神」とするテキストや、逆に病人祈禱の場で読誦される「天刑星の祭文」でありながら、主人公を山の神とするテキストも存在する。それらについて、熊野修験の手による「山の神と乙姫の婚姻譚」と「祇園牛頭天王の本地」をベースにした「天刑星の祭文」が結びついたもの、という推測（註14）がある一方、

病気の原因とされるものには圧倒的に山川の魔群魔性が多い。物部のような山深い所では、山に潜むさまざまな妖怪たちが、もつとも病気の原因として適当であったのだろう。（中略）そのため、山の神と水神が結婚して病の子を産出するというよそからみれば特異なモチーフも、物部の世界観の中ではもつとも納得いくものとして、結合が進んだものと思われる

（高知県立歴史民俗資料館『いざなぎ流の宇宙』）

という見解もある。〈山の神〉という存在が、その地域の人々

が持つ思想により即した形で変化を遂げたという事になるだろうか。同じ「山の神」と呼ばれる神格であっても、祭文を唱える目的によってその性格は違ってくることをあらわす事例である。

▽山の樹木の支配者―きり杣・樵の信仰

天地久星のじよもんのみにうたがい所わしまさんがもんぶのす性の氏子に時やとわれ申して うけやくそくのねがいにまいりた(中略) 御祝御ちそう式次第の式の御前を差し上げ申そう それそうござれば三の山口までもひろくゆるるそうものよと申して

〈山の神〉の障りで病を患った「もんぶす上の氏子」は、前述の「天竺星のじよもんのみこ」の交渉によって山から樹木を伐採することを許された。ここに描かれているのは山の神の所有物である樹木を伐採してもよいとする、杣・樵達の特権の「起源譚」である。斎藤氏は、「それは山で生きる杣人たちの職能を聖化する神話といってもよい。」としている。つまり中尾計佐清太夫本「山の神の祭文」は、山中で林業に従事する杣・樵にとつての〈山の神〉の姿を描いているのである。樹木を支配する〈山の神〉を見ると、信仰を担う人々の職能や職に従事する環境によつても、神の姿が変化したことがわかる。

四 宗教者と在地の思想

ここまで「山の神」の特徴・性格、その背景を見てきた。その中で読み取ったものをまとめると、

- ① 天竺から来臨した外来の神である。
- ② 「病の神」としても捉えられている。
- ③ 樹木の伐採を許可する、杣・樵にとつての〈山の神〉である。

となるだろうか。山の木を支配している、という点は共通するが『遠野物語』にはほとんど現れてこなかった特徴である。そしてそのような性格を与えられた理由として、中世の本地譚の影響、「祇園牛頭天王の本地」との融合、物部の主な職能である山林業に携わる人々にとつての起源神話、祭文を管理する太夫たちの始祖神話・行為の正当化ということが指摘されている。

いざなぎ流の祭文の形成過程では熊野修験や陰陽師といった複数の「宗教者」が関わり、彼らの知識とこの土地に暮らす人々の在来信仰(観念)を融合させて独自の〈山の神〉を創り出した。中尾計佐清太夫本を始めとするいざなぎ流の「山の神の祭文」には、その痕跡がみてとれる。〈山の神〉と呼ばれる存在の持つ多様な性格は、その時代・地域思想を反映するが故と言えらるだろう。

II 狩猟儀礼の中の〈山の神〉

前節で扱った「山の神の祭文」は、山中で樹木の伐採に携わる人々を主眼に置いたものであった。では、同じく「山」を生活の場としながらも、杣や樵とは異なる職能を持つ猟師にとつ

ての（山の神）とはどういう存在なのか。本節では、椎葉村の
獵師達に伝承される儀礼をもとに、彼らが（山の神）をど
のように捉え、何を願うのかを探りたい。

フィールドワークで実際の狩の現場に同行することは叶わな
かったが、神樂の場において獵師が（山の神）に捧げる儀礼を
目の当たりにすることができた。それが「シシマツリ」だ。詳
しくは後述するが、「シシマツリ」とは普段神樂を取り仕切っ
ている宮司ではなく、土地の獵師の頭領が担う儀礼である（註
15）。前述のように、椎葉村は柳田國男の訪れた、民俗学発祥
の地であると同時に、非常に魅力的な夜神樂―「椎葉神樂」
が伝承されている土地でもある。毎年十一月下旬から十二月に
かけて村内の四地区、計二十六カ所で夜通し行われる椎葉神樂
は、大きな流れは共通しているがそれぞれの場所で少しずつ演
目に違いがみられる（註16）。
では以下、神樂に先立って行われた「狩獵儀礼」を見てゆこう。

（一）椎葉村 尾前神樂「シシマツリ」

椎葉神樂には、「板起し」という儀礼が散見される。神樂の
舞台となる「御神屋」^{みごや}作りのことを当地では「エリメ」と呼ぶ
が、このエリメの際に御幣を切るために用いたまな板を清める
儀礼が「板起し」である。御幣を切ったまな板と小刀を前に据
えて「板起しの唱教」を唱えた後、榊の葉や白紙などをそのま
な板の上で切っていくというもので、松尾地区と上椎葉を除い
たほぼ全域で行われていた。このうち、尾前では「板起し」の
前に特別に「シシマツリ」を実修している。

「シシマツリ」は、神樂に先立ち獵師から猪の献饌があった
場合のみ、獵師の頭領格である人物の手で執行される儀礼だ。
作法は以下の様になる（註17）。

- ① 御神屋内に「シシマツリの祭壇」を設置する。祭壇には
山の神の幣とコウザキの幣が立てられる。
- ② 祭壇前には猪肉が備えられる。
- ③ 狩衣姿の獵師（尾前義則氏）が祭壇前に着座し、二拍手
一拝。
- ④ 「諏訪の祓」を唱える。その後、二拍手一拝。
- ⑤ 「ヒヤーフリの唱え言」を唱えながら猪の身体を山刀で
三度なぞる。
- ⑥ 「シシマツリの唱え言」を唱える。
- ⑦ 「板起しの唱教」を祝子一同で読み上げながら、猪の身
体に刀を入れていく。
- ⑧ 切り取った肉を小さく切り、七切れずつ串にさして燈明
で焙る。

かつて尾手納・嶽之枝尾地区などでも「板起し」の際に猪の
肉を用いてはいたが、「シシマツリ」という名称を用い、獵師
が「シシマツリの唱え言」を読み上げる作法を伝えているのは
尾前だけである。椎葉の狩獵伝承を詳しく取り上げた『狩獵民
俗と修験道』著者の永松敦氏は、このシシマツリを「狩獵儀礼」
と規定した上で、当地の狩獵関係史料に見られる「かけぬい」
（註18）という作法との関連を説いている。「かけぬい」とは獲

物の身体の様々な部位を用いて神々を祀る作法である。永松氏はその作法・呪文の内容から本来は修験者が執行したはずだとし、祭祀の執行権が次第に神主へと移行していった事により神楽の場から消えていったものと指摘する。

(二)「シシマツリの唱え言」の中の〈山の神〉

かぶがしらをもつては、天大しようごん殿に祀って参らせ申す、かぶふたをもつては奥山三郎殿に祀って参らせ申す、こひつぎあばらをもつては中山次郎殿に祀って参らせ申す、奥山三郎殿の三百三十三人、中山次郎殿の三百三十三人、山口太郎殿の三百三十三人併せて九百九十九人の御山みやまの御神様にも祀って参らせ申す、下のコウザキ、上のコウザキ、中頃のコウザキ、只今のコウザキ殿まで祀って参らせ申す、オザサ山のコウザキ、上ノ小屋山、雷カドワリのコウザキ殿にも祀って参らせ申す、アロウ谷からフルコエの間まで木の根かやの根の下にマツリアラシのコウザキ殿まで、小獵師のまつりてを差し上げ申するによって、三九五九七九十三丸三十三丸百六丸までのやくごんを奉り申するによって、その上はのされ次第、御授け下さりゅうところを一重に御願ひ奉り申す。

(永松敦『狩獵民俗と修験道』)

右に挙げたのは、「シシマツリの唱え言」全文である。これを見ると「御山の御神様」と呼ばれる神格の他にも、「天大しよ

うごん殿」や「コウザキ殿」(註19)といった名が多数出てくることがわかる。しかしここでは「御山の御神様」にまず照準をあてて考えたい。

そうなると、この唱え言の中で〈山の神〉に関するものは

奥山三郎殿の三百三十三人、中山次郎殿の三百三十三人、山口太郎殿の三百三十三人併せて九百九十九人の御山の御神様にも祀って参らせ申す

という個所になる。短い一文ではあるが、〈山の神〉の性格を探るためのヒントを内包しているといえよう。

▽〈山の神〉の性別

「太郎・次郎・三郎」という名称からしてみると、この詞章における〈山の神〉は男神である。あくまで代名詞のようなもので男女の区別はないという見方もできるが、女子の場合には「太郎女子」など、長子であることを説明するために用いるのが一般的だろう。

ここで気になるのは、獵師の伝承における〈山の神〉との違いである。『後狩詞記』に収録された「狩ノ巻」をはじめ広範囲に分布する「西山小獵師」の説話では、山中でお産に苦しむ山の神を助けたと伝えており、〈山の神〉は女神とされている。

同じ「獵師」が持ち伝えているものであるにも関わらず、なぜ男女の違いがあるのか。

〈山の神〉の性別について述べた書籍は少なくない。例えば永松氏は『狩猟民俗研究』の中で、椎葉村大字河内の小崎神社に収められている神像について述べている。背面に「山の神」と墨書のある四体の神像のうち、三体が男神であり、「この地方の「山の神は女性」とする伝承からすると、なぜこのかたちをとるかが不思議である」という疑問を投げかけている。そして「山の神を女だとするのは椎葉村の獵師であり、この土地の他の山師（筆者の注記 柚・樵・鉦山師などのことだろう）は特に男女の区別を意識していない」と述べ、民衆の意識の上では山の神は必ずしも女性ではない、つまり神像を製作したのは獵師以外の生業に携わる人間の可能性が高い、という結論を出した。

この結論に即して考えると、「シシマツリの唱え言」を作ったのは獵師以外の人間ということになるだろう。確かに、シシマツリの原像とも言える「かけぬい」の作法が修験者によってもたらされたものだとするならば、それは筋が通る。「山の神」を女神とする伝承の方が先に椎葉村の獵師の間に存在し、そこから修験者が異なる作法・信仰を持ち込んだと考えることができるからだ。

千葉徳爾氏も著書『女房と山の神』の中で〈山の神〉の性別について考察し、次のように述べている。

これまでの先学の調査報告の類を参照すれば、女性的な山の神を信仰する土地は、九州・四国・紀伊山地などと、奥羽から越後にかけての東北日本の山地に色濃く認められ

る。それに対して、瀬戸内沿岸から中国地方、北陸から中部地方の山間盆地などでは、山の神を天狗そのほかの怪物と同一視するふうが色濃く見られる。さらに、三重・滋賀・奈良地方にかけての山村には、前記したように夫婦神として観念される山の神が多い。このような信仰地域の国土全域から見た環状配置は、偶然かもしれないが、また、近畿地方を中心とした仏教その他の普及浸透にともなう、山の神信仰の変容過程をも予想させる。すなわち、九州山地と奥羽地方とに共通した山の神女性観が、民間信仰としては、山の神についての、さかのぼりうるもつとも初期における信仰の類型ではあるまいかと想定させるのである。

九月に行ったフィールドワークで椎葉の獵師、尾前義則さんおまえよしのりへの聞き取りを行った際、やはり「山の神は女性である」と仰っていた（註20）。尾前さんのお話も、右の千葉氏の言葉もあくまで一つの見解であり、千葉氏本人も「想定」という言葉を用いて、断言はしていない。〈山の神〉という神格は、ごく小さな範囲に限っても確固とした姿を掴みづらい存在であることを実感させる。しかし、少なくとも現在の椎葉村の獵師さんにとつての〈山の神〉は女であるようだ。

▽三百三十三という数

ところで「奥山三郎・中山次郎・山口太郎」という名称で呼ばれる「御山の御神様」は、それぞれ「三百三十三人」とされている。奥山・中山・山口という山中の場所を示す言葉に太郎・

次郎・三郎という呼び名を付加したのだが、この表現は他の祭文類にも見られ、椎葉においては山の神の一般的な表現と考えられる。

ではこの「三百三十三人」という数は一体何なのか。これまでに見たいくつかの神楽や詞章の中にも、この「三」の横並びの数字というものは出てくる。例えば椎葉の隣、諸塚村の戸下に伝わる大神楽の演目「山守」の詞章中の「山の本地」（註21）では、山の神がそれぞれ三十三人とされている。いざなぎ流の「山の神の祭文」においても「一口が三十三たい三社 二の山口も三十三たい三社 三の山口も三十三たい三社」という箇所がある。このことについて考えられることとして、法華經に説かれる觀世音菩薩の「三十三身」（註22）がある。

觀世音菩薩は衆生の程度に合わせて三十三身に変化し法を説く、とされる。そしてその「三十三身」を説くのは法華經だ。椎葉の狩猟作法に修験者が関わっていたということは、この「三十三身」の思想もその作法や儀礼の中に取り込まれていったと考えられる。しかし『狩猟民俗と修験道』では、この「三百三十三」或いは「三十三」という数字について特に触れられておらず、その由来は不明のままだった。

そこで、この点についても聞き取りの際に尾前義則さんに伺ってみた。すると、この数字自体には特に意味はなく、むしろ合わせて九百九十九…つまり「膨大な数」ということの方に重要性を見出しておられた。つまり〈山の神〉は山中のどこにも存在していて、時折変わった形の岩や樹木の形を取って現れるのだという。ここでもう一度千葉徳爾氏の『女房と山の神』

を参照したい。

ここで私の説く山の神を、山岳信仰としての特定の山頂或いは岸壁などの擬人化としてとらえるのは、適当ではない。もともと日本人のアニミズムは、故折口信夫博士によればそのような特定の対象そのものの神化ではなくて、虚空に遍在する精霊が、拝する者の求めに応じただちに來たり寄りつくものと考えられたのだから、山の神はそこにもあり、また野獸や鳥にも姿を変えることのできる存在ともみなされたのである。

（中略）生前は全能の汎称としての山の神に奉仕し、死ねばその靈魂が山中の精霊と一体化し、山の神の一部となるという考え方である。したがって、見かたによっては山の神の生前は一個人の靈であったものの数は莫大なものとなる。

ここに書かれたことは、尾前さんの発言と一致する。山の神とは「山中に遍在する精霊」とでも言うべき存在で、山頂や巨木、時に獸の姿などを取って現れる、という考え方だ。

伝承とは変容して行くものであり、「三十三」という数そのものには意味がない、という考え方が普遍的なものだとは思えないが、〈山の神〉をどのように捉えているのか、一つの事例として参考にしていけるものだろう。

（三）〈山の神〉と獵師の交渉

「シシマツリの唱え言」に登場する〈山の神〉は、「奥山三郎・中山次郎・山口太郎」という名の「男神」で、それぞれが「三百三十三人」であった。そしてその背景には修験者の存在がうかがえた。一方、猟師達の起源譚として今も語られる「西山小獵師」の話においては、〈山の神〉は出産する「女神」だった。一見まったく異なる神格に思えた両者だが、ある共通点があった。「シシマツリの唱え言」の最後の数行を読み返してみたい。

三九五丸七九十三丸三十三丸百六丸までのやくごんを奉り申するによつて、その上はのされ次第、御授け下さりゆうところを一重に御願ひ奉り申す。

「やくごん」を奉りますから、「のされ次第、御授け下さりゆうところを」願ひ奉ります、という内容に注目したい。「三百三十三」という数に対する疑問を尾前善則氏に投げかけたところ、前述の解釈とともに、こうも言っておられた。「のさらん福は、願ひ申さん」と。「のさらん」というのは方言で「もらえない、ただけない」という意味だそうだ。つまり右の言葉は、「ただけないものはそれ以上望まない」と言っているのである。

椎葉の猟師たちの間に受け継がれてきたこの言葉を念頭におくと、先の唱え言が、獲物の「かぶがしら・かぶふた・こひつぎあばら」の肉を捧げて祀ることによって猟果を願う内容であることがわかる。「やくごん」とは、約言＝約束というような意味だろう。「シシマツリの唱え言」は、猟師と〈山の神〉の

間に取り交わされた「約束」を読み上げているのである。では、もう一方の「西山小獵師」の話をみてみよう。

二人の猟師の一方は西山の小獵師と呼ばれた男で、山の山中で出産しているのに行あい、山の神の望みをききいれて手伝つてやったために山の幸にめぐまれたが、東山の大神とのおそらく呼ばれたにちがいないいま一人の狩人は、狩に産のけがれは最も忌むべきものとしてそれをこばんだために、不幸をまねき獲物がなかつたというモチーフであつて、古い富士と筑波の神話や、中世の蘇民将来・巨旦将来の兄弟の話のモチーフに属する伝承であつた。

(千葉徳爾氏『狩獵伝承研究』)

〈山の神〉は出産を手助けしてくれたお礼として、西山小獵師に獲物を与えることを保証したのである。つまり「シシマツリの唱え言」と同じように、ここでの〈山の神〉と猟師との密接な関係も、「約束」を交わすことに集約されている。

この節では「シシマツリの唱え言」や猟師の伝承をもとに、椎葉村における〈山の神〉の姿を追ってきた。何が起るかわからない山中で狩猟を行う猟師達にとつて、「猟果の約束」がいかん大事なものであつたか、想像に難くない。彼らの伝えた文字・言葉の中の〈山の神〉の姿は男女の違いがあつて一筋縄には捉え難いものとしても、少なくとも「猟果を約束する女神」であることは確かなようだ。次節では、その土地の祭祀・儀礼の中核をなす「神楽」を対象に、実際に「すがた・かたち」を

伴って現れる〈山の神〉を見て行きたい。

Ⅲ 神楽の場に出現する〈山の神〉へ―今後の展望―

これまで、祭文の中の山の神、そして儀礼の中の山の神を見てきたが、この節では、神楽の中の山の神を見てゆく。対象とするのは、宮崎県東臼杵郡椎葉村の嶽之枝尾神楽の「宿借り」と、島根県雲南市の奥飯石神楽の「柴佐―悪切」である（註23）（註24）。

これら二つの次第は、九州山地の「椎葉神楽」と、中国山地の「奥飯石神楽」と、それぞれ伝承されている地域が異なる神楽に属する。共に山の神と深い関わりがあると考えられるので、ここで取り上げることにした。考察にあたっては、それぞれの神楽を概観し、問題の演目が、神楽の次第の中でどの位置にあるかを確認した上で、以下の四つの項目についてみてゆく。

- ① どのような姿形か、特徴的な持物や、特別な容姿か否か
- ② どのような登場の仕方／退場の仕方をするか
- ③ どのような詞章を語るか
- ④ その他、特徴的な所作など

（一）椎葉村 嶽之枝尾神楽「宿借り」

▽山村の夜神楽

宮崎県の山奥深く、熊本県との境にまで広がる同村では、村内二十六箇所で神楽が伝承されており、「椎葉神楽」と総称される。神道化の影響をあまり受けていないとされ、古風な形態

を今に残している。

椎葉神楽としての共通性や特色はもちろんだが、次第の構成や内容など地区により個性がある。たとえば先にあげた尾前神楽の「シシマツリ」や、本節で紹介する嶽之枝尾神楽の「宿借り」がそれである（註25）（写真1）。



写真1 神楽宿を訪れた「御山人」。
（2009年 嶽乃枝尾神楽見学にて）

▽「宿借り」―赤ひげに猿まなこ―の旅人

さて問題の「宿借り」は、神楽の中でも序盤に行われる特別な演目である（註26）。古びた蓑・笠を身に着け、杖をついた旅人が一夜の宿を求めて神楽宿を訪れ、宿の主人と問答をする。宿の主人と旅人は四季の歌の掛け合いなどをひとしきり行い、最後は仲裁役を介して和解する。そして両者は座敷と軒下を輪

になって巡り歩き、旅人は一礼して立ち去って行く。

この「宿借り」を四つの項目で整理してみよう。

① 頬かむりをし、古びた蓑・笠、帯刀し、破れた草履、ぼろぼろの脚絆、腰には手ぬぐいを下げ、背中には破れた行李を背負い、その上には筵のようなものが乗っている。先に四角の紙を挟んだ竹杖を突いてやってくる。

この次第の中で交わされる問答の中で、旅人の容姿を「前から見ればおさえたるが如くして、後ろから見ればふりくるいたるが如くして、赤ひげに猿まなこ」と形容している。

② 神楽宿を囲んで眺めている観客の中から、おもむろに登場。外から神楽宿を訪れ、問答、舞のような所作の後、再び神楽宿の外へ消えてゆく。

③ 一夜の宿を貸す貸さないということをめぐって問答が交わされる。宿の主人が旅人に対して、「まことしき御山人にて候わば……」と数々の問いを投げかけ、それに旅人が答えて、確かに「御山人」であることを示す。問いかけは、山に入る際に歌う、歌妻のいわれを問うものなどが中心となっている。その他、旅人が「み山にこもり、社を立てた、注連を敷いた」と答えていることも興味深い。

④ 特徴的な所作が無いことがむしろ特徴のようにも思われる。外から神楽宿に来て問答を交わし再び外へ消えてゆく。際立った所作が無いだけに、特徴的な容姿と、問答が、この「御山人」を解く鍵だと思われる。また手にした杖と同様の杖を主人も手にしているという点も注意してお

きたい（註27）。

（二）奥飯石神楽 「柴佐の舞―悪切」

▽出雲神楽の系統

奥飯石神楽は、島根県旧飯石郡の南部に伝わる神楽で、出雲神楽の流れを汲んでおり、神事を舞で行う「七座神事」と、「式三番」、そして「神能」の三部構成で行われる。

一般に七座神事を終えるまでが厳粛な神事と考えられており、七座神事は直面（面を付けない）で、手に採物を持って舞われる。式三番を終えて、「神能」に入ってから着面の演劇的な次第となる。

ここで取り上げる「柴佐の舞―悪切」は、七座神事の最後の次第である（註28）。「柴佐の舞」は前段と後段とに分かれており、後段は特に「悪切」と呼ばれている。そして、神事舞であるにもかかわらず、着面の鬼が登場する点が、他の七座神事の次第と大きく異なる点である。

では以下にその内容を簡単に説明しよう（註29）。

▽柴佐の舞―悪切 演劇的な神事舞

「柴佐の舞」の前段は以下のようになっている。

岩戸に籠った天照大神を招ぎ出すため、「天児屋根命」は山から榊を奪う。榊を奪われた「大山祇命（鬼面）」は、天児屋根命を追って神楽宿へとやってくる。両者の間で榊の争奪戦が繰り広げられ、最終的には天照大神のための神楽と知った大山祇命が榊を譲り渡し、代わりに「十握の剣」を賜る。

「柴佐の舞」の後段の「悪切」では、素面の大山祇命による剣舞が行われる。

柴佐の舞前段

- ① シャグマを被り、鬼の面を付けている。手には大きな白い御幣を持つ。
- ② 榊の枝を盗んだ「天児屋根命」を追って登場。身をかがめて何かを探す風情で登場する。榊と交換に、「十握の剣」を貰い退場。

- ③ 神楽の場に登場した理由を語り、神歌を歌う。

- ④ どころことなく滑稽な動きをする（写真2）。



写真2 柴を探す大山祇命。手前は春日明神(天児屋根命)。(2011年 木の下神楽見学にて)

柴佐の舞後段（悪切）

- ① 装束は前段と同じものの、面を外した直面での舞い。手

には前段で譲られた「十握の剣」を持って登場。

- ② 前段とは異なる奏楽の音の中を登場する。

- ③ 悪切の章句を唱えながら、東西南北中央黄龍おうりゅうの六方を清める。

- ④ 剣を持たない手では印をむすび、足運びもどころなくヘンパイを思わせる（写真3）。



写真3 刀を手に舞う「悪切」。(2011年 木の下神楽見学にて)

(三) 神楽と〈山の神〉

以上、嶽之枝尾神楽の「宿借り」と、奥飯石神楽の「柴佐の舞―悪切」の中に、出現する〈山の神〉の姿を紹介してきた。両者には、神楽の場に外から訪れる、問答の末に和解する、という二つの共通点がある。所作の要とすべき「杖」や「榊」の譲渡、剣による破邪の舞（悪切）から、二つの〈山の神〉は、

災いをもたらす存在ではなく、神楽の場（里）に何かを「与える」ことを目的に来訪していることがわかる。

神楽の場に登場する〈山の神〉・〈山人〉〈鬼〉は、〈山の神〉の姿を追う私達に、様々な示唆を与えてくれる。今後、その作法・詞章といった内容面やそれを担う人々の姿を浮き彫りにすることで、彼らが「山」に棲む神霊、あるいは「山」から訪れる者にいったい何を託したのかを探ってゆきたい。

四 今年度の成果と来年度への展望

本稿は、「祭文の中の山の神」、「儀礼の中の山の神」、「神楽の中の山の神」という三つの視点から〈山の神〉の姿を素描したが、〈山の神〉の本性は、簡単に掴めるものではないと今あらためて実感している。

いざなぎ流「山の神の祭文」にあつて〈山の神〉は、在地にもとから存在した神霊ではなく、天竺から来訪した外来の神であった。また、病をもたらす「障礙神」としても捉えられ、その背後には中世の本地物語、祇園牛頭天王説話との習合や、土地の人々の病に対する考え方が存在していた。同時にまた、樹木を支配するという〈山の神〉の役割も見出すことができた。いずれも物部という山深い場所での生活から生まれた捉え方であるといえよう。〈山の神〉の多様性には、地勢やその地の生業などによる時代の思想や観念の差異を見て取れる。

一方、椎葉村尾前の〈山の神〉は、「シシマツリの唱え言」においては山口太郎・中山次郎・奥山三郎というそれぞれ三百三十三人の男神、獵師の起源譚においては出産する女神と、

同じ地域でありながらその性別や特徴に違いが見られた。しかし両者には、「獵師との「約束」によって獲物を授ける」という共通性も存在している。この「約束」、あるいは「交渉」というモチーフは、いざなぎ流「山の神の祭文」においても「天竺星のじよもんのみこ」という人物を通して、柚・樵と〈山の神〉との間にも交わされている。この〈山の神〉との交渉というテーマは、もう少し掘り下げていく必要があるだろう。

また、今回は〈山の神〉の「出現するすがた」を確認するにとどまったが、〈山の神〉を考える上で様々な示唆を与えてくれた「神楽」についての勉強は、今後より重要になると実感している。とりわけ注目したいのが、椎葉の隣村・諸塚村の戸下神楽が伝える「山守」という演目である。山葛やまかぶを身にまとうて神楽の場を訪れ、問答をし、宝（杖）を置いていくという点や、共同研究者の高橋知将がテーマとする「狩獵儀礼」における秘文と同じ言い句を持つ点など、〈山の神〉を考える上で非常に興味深い。次年度は、そうした〈山の神〉の来訪が何を意味し、そこに人々は何を託したのかといったことも明らかにしてゆくつもりである。

さらに高橋は、いざなぎ流を伝えた、物部村独特の狩獵作法や鎮魂法、その際に使われる詞章に注目している。いざなぎ流には「西山法」と呼ばれる狩獵作法があり、「西山小獵師説話」が広く伝わる椎葉村との関連、また伝承の経路を探ることによって、職能民たちの〈山の神〉への信仰の変化を辿れるはずだ。

〈山の神〉は、多様な姿を持つゆえに非常に捉え難い存在であった。しかし同時に、共通点を持つ場合があることも知った。ここから得られるものは何なのか。今年度打ち出すことのできなかった自身の考察を導き出すためにも、来年度も同じフィールドを中心に、歴史・時代背景・地勢や伝承の担い手など、信仰の前提となる事柄を丁寧を追ってゆきたい。また来年度も助成金論文を申請するにあたり、共同研究者の高橋と、より早い段階から計画を立てて進めたいと考えている。

〔付録〕 諸塚・椎葉フィールドワーク

日時…二〇一一年九月二十三日

場所…戸下集会場（諸塚村戸下地区）

対象者…戸下神楽保存会の皆さん

▽「山の神」について

- 山の神は女性である。
- 自分より醜いオコゼを好む。
- 赤不浄（血の穢れ）を嫌う（その場にいた人々も全員一致で赤不浄が一番ダメだという意見）。
- 頻繁に祭祀を行うことはないが、毎月一日には酒を撒き、塩を供える。

▽「山守」について

- 山の神にあったという話は聞かない。
- 正月頃に大神楽の日程が決まると、通常の神楽より長い時間を取って練習を始める。

• 使用する葛は「山守葛」やまもりかすらでなければならない。山守葛は木に巻きつかず、いじめない。

• 「山守葛」の生えている場所は、先代から引き継ぐ。

• 杖に使用する生木を伐るときは、一人きりで誰の目にも触れないようにする。手伝いの者を一人つけるが、その人間にも木を伐るときは離れてもらう。

• 真剣で木に一刀入れる時が一番恐怖を感じる。

• 一刀入れて、まだ木が「生きている」うちに、唱え言を唱える。

• 木を伐ると「ふまい」が始まる。性根が無くなり、「神になってしまう」のだという。

• 「ふまい」は神楽宿で神官に祓ってもらうまで治らない。御神屋に着いたら一度祓ってもらい、「人間に戻ってから」問答を始める。

• 集落の人々は、「山守」に対する畏怖の念も持っている。

• 問答の意味は、理解していないと心からの言葉は出てこない。当て字だらけのテキストを、PCで打ち直しながら意味を考えた。

• 「山守」は、神寄せの太鼓で唱和する。普通の演目とは異なる太鼓。

• 最後にもう一度祓い、「神抜き」をする。

▽戸下神楽について

- 神楽の前には風呂で身を清める。
- 舞を舞えるのは男性のみ。生理のある大人の女性は舞えないし、舞殿にも入れない（幼児・老人は別）。

• その他の作業にも女性は関わらせない。基本的には台所での調理など、裏方に徹してもらう。

• 本番は真剣そのもの。酒も飲まない。お客さんには脇座で飲んでもらう。

• 太鼓を叩くのは基本的に格上の人間。舞子の足の動き等を見ながらタイミングを合わせる為、技術が必要。

• 四〜五歳で神楽を始めるが、いまだに難しい。

• 自然と神楽が一体。演目と時間帯（夜明けなど）の組み合わせも効果的にできている（先人の知恵）。

• 戸下神楽は戸下で見なければわからない。公演はあくまで公演で、本物ではない。

• 一部の演目だけ見てもだめ。通しで見ないと「物語」はわからない。

• 南川の神楽とは協力体制がある。なるべく近いうちに協力して「大神楽」を行いたい。

• 生活と結びついた神楽。話し合いなども真剣。

• 神楽をなくすことは、集落がなくなるということ。

▽その他

• 「赤不浄」は今でも重要視している（もじかわ 緹川さん＝山守役の方は奥さんが生理の間は神棚に触らせないそう）。

• 平家の落人伝承が村内の色々な所に残っている。

• 昭和五年頃まで「観音堂」があり、そこに験者さんがいた。

• 基本的には林業が主。狩猟はない。

• 椎葉とまったく同じように、焼き畑をやっていた。今でも痕跡があちこちにある。

• 水神をお祀りする時には、持って行った酒などは全部置いてこなければならぬ。

• 水に不自由する所なので、基本的に田んぼより畑が主だった。逆に言えば、少ない水でも何とか暮らせた。

日 時：二〇一一年九月二十四日

場 所：綾部正哉氏宅（椎葉村嶽之枝尾地区）

対象者：綾部正哉氏

▽「宿借り」について

• 山の神が宿借りに「化身」している。

• 宿借りをやらなければ、神楽は始まらない。

• 伝統的に世襲制である（現在はトシヒロさんという方が受け継いでいる）。

• 清浄な場である舞殿にめつたなものは入れられないために、問い詰める。

• 「赤ひげにさるまなこ」とは、その見た目から（獣や魔物ではないかと）いぶかしんでいる言葉である。

• 修験者は地を杖で突きながら歩く。杖とは「地の神」を呼び起こすもの。

• 「杖譲り」とは、地を治めるために山の神から杖を譲られるというもの。

▽神楽について

• 神社以外の場所（民家）で開催する場合、神主が舞子を率いて行列をなしてくる。

• 神主は行列の先頭に立ち、太刀で「祓いの舞」を舞いな

がら進む。

・行列のことを「太刀のみさき」と呼ぶ。住民たちはそれを拝みながら見送る。

・道の分かれ道や橋の手前では立ち止まり、弓と刀で穢れを払うために舞を舞う。

・重要な演目（鬼神舞・星差し・御神屋ほめなど）は、伝統的に世襲制。各々が誇りを持っている。

・唱教も、神主・神楽頭取・氏子総代の家にしかない（個別の伝承者が持つのは、その演目の唱教のみ）。

・「宿借り」で迎えた山の神に奉納する。

・「注連引き鬼神」によって舞殿を清める。

・「願成就」の演目があるなど、日常の生活と結びついている。

・神楽開催日から四十九日以内に弔事のあった者は、神楽宿には行かない（黒不浄＝死の穢れ）。

・赤不浄もあるため、女性は（基本的に）御神屋には入れない（綾部さん自身はこれには反対）。

▽その他

・日当と日添は日照時間の違いから、昔は生活リズムがかなり違っていた。ほとんど行き来もなかった。

・山の中腹同士でやり取りできたというのが、叫び声など一定のパターンを予め決めておいたのでは。

・合理性・即時性などとは対極的な思想、「のさらんものは願ひ申さん」。

・獲物が獲れないときも、「山の神が授けて下さらなかつ

た」としか考えなかった。不平・不満を持たない。

・「ほっと承り候」の「ほっと」には意味がある（今後の宿題に）。

日時：二〇一一年九月二十五日

場所：民宿おまえ（椎葉村尾前地区）

対象者：尾前義則氏・尾前秀久氏

▽「山の神」について

・山の神は女性である（西山小獵師の説話そのもの）。西山小獵師は「しょうごん（甘酒）」をあげた。

・「山の神さん」は山のどこにでもいる。変わった形の石・樹木など、色々な所で祀る。

・山に入る時は常にお神酒を持ち歩く。

・食事の際もまず最初に山の神に奉る。

・猟期の始めには、自分の祀っている山の神をきちんとお祀りする。コウザキ・山の神の幣も切る。

・旧暦の正月・五月・九月十六日は山の神をお祀りする。特に九月が重要。

・山の神はどこにでもいるが、一人である。山口太郎・中山次郎・奥山三郎は「犬」である。

・三百三十三という数は、「どこにでもいる」という思想に基づいている。具体的にその人数だと考えているというわけではない。

・「しょうごん殿」は、神の魂のことである。具体的な「狩獵神」という神格としては捉えていない。

- 用を足すときは、山の神に一言ことわりを入れる。
 - 「病の神」という認識は特にならない。
 - 一つの家庭に子供（兄弟）がたくさんいる様子を、「コウザキのようだ」と形容する。
- ▽狩猟について

- 尾前義則さんはおじいさんの代から猟師。父親よりおじいさんの方が腕が良かったとのこと。
- 「のさらん福は願ひ申さん」の思想。「山の神さん」に獲物を授けてもらう。
- 猟銃の誤発砲などは、義則さんの頃にはなかった。
- 狩猟の期間に神楽の開催時期は重なる。尾前で猪が取れなければ、向山日添・日当などの猟師が獲物を届けてくれることも。
- 獲物を取ったときは「唱え言」をし（ヒヤーフリの唱え言か？）、山の神に感謝を捧げる。
- 作法の無理強いはしないが、「諏訪の祓」だけは皆知っておくべき。
- 素手で触れる前に、獣の体に山刀を当てる。
- 近年は日没後には発砲できず、「矢立て」をするために駐在所へ直訴にいった事も。
- 獲物の血液も、自ら飲んだり犬にやったりして、無駄にしない。
- 「コウザキ」は猟犬の霊。犬はすごく大事で、人間と同じように一人前である。
- 山中で犬が死んだ場合、その場に柵を作り、犬の体を柴

で覆う（石枕・頭は西向き）。鳥葬・風葬に近い感覚。自然に「山へ戻す」。白骨化したら枕にしていた石を持ち帰り、お祀りする。

• 昔は休猟期などなく、「サカメグリ」で自然とそれができていた（焼畑にも共通する考え方）。

• 昔は部落全体で猟をした。銃のない人間は「トギリ」などをする（現在でもこの点は生きている）。

• 罫猟の手伝いをしてくれる神様は「ウジビキノミコト」と「シリサスノミコト」である。

• 銃以前の狩猟には弓矢を用いていた。弓矢は猟師にとって、命の次に大事であった。弓矢の神聖視は、この点も関係している様子。

• 昔はどの家にも弓矢があり、「弓矢の御繁盛」といって祀られていた。現在は弓矢の製作者がなく、すたれていく。

• 猿のことは「親方」と呼ぶ。猿と呼んでしまった場合は途中でも引き返す。山仕事をする人間は皆知っている。

• また、神の通り道である「尾根」には道具を絶対に置かない。

▽その他

• 数年前に亡くなってしまうが、「キイチさん」という験者さんがいた。

• 病気になるたときも、昔はよく験者さんに診てもらった。带状疱疹（タニ）も呪文で治してもらっていた。

• 験者さんは「言葉をそのまま受け取ってきた」だけとい

う。宮司さんも意味の解らない詞章も多い。

・病気になったときに原因として考えるものは「シバガミ」(祟りをなす神)。

・「火の神」と「荒神」のお祀りの仕方だけは何とか伝授してもらった。

・毎年持ち回りで「祀り宿」を定め、「火の神」を新しくしていた(若返らせていた)。用いるのは神である。

・「祖先を大事にする」という意味で、神も仏も一緒。

・「神様」を意識するのとはしないのでは、感じ方・考え方などが違ってくる。

〔註〕

1. 『遠野物語』(聚精堂、一九一六年初出)。本稿ではちくま文庫『柳田國男全集4』から引用している。

2. 椎葉神楽フィールドワーク

二〇一〇年十二月十一日～十二日、「日本文化論2」(山

本ひろ子教授)。椎葉村不田野地区の「尾前神楽」を見学。

詳細は「研究ノートⅡ狩猟儀礼と「山の神」たち―後狩詞記」と椎葉神楽見学を通して―(二〇一〇年度学生

研究助成金論文集18)、「椎葉神楽見聞記」(総合文化化学科フィールドワーク報告集二〇一〇『渦流』)を参照していただきたい。

3. 柳田國男『一つ目小僧その他』(小山書店、一九三四年初出)

は、日本の各地に残る「一つ目」の怪の造形から、人身供

儀の名残などに言及した論考である。今年度初頭、共通のテキストとして山本ひろ子研究室で読み込んできた。

4. 昨年度、山本ひろ子先生のご指導の下、高橋知将が学生研究助成金論文集18に「研究ノートⅡ狩猟儀礼と「山の神」たち―後狩詞記」と椎葉神楽見学を通して―を発表した。高橋を中心にこれまで山の神や狩猟、椎葉神楽について共に学んで来たことと、「山の神」への興味・関心を共有していたことから、今年度は中田・高橋の共同研究として申請することを決めた。

5. 物部フィールドワーク

二〇一一年七月二十一日～二十六日、「フィールドワークの実践1」(山本ひろ子教授)。香美市物部町。二〇一一年は「グリーンツーリズム・いざなぎ流体験組」と「食文化探訪組」に分かれて実習をした。筆者は前者の組に参加し、グリーンツーリズムでは、地元の猟師の方に聞き取りを行い、実際に「山の神の祭文」を拝見させていただくことができた。いざなぎ流体験では、舞神楽の舞い方を習い、御幣切りの実習をさせていただいた。舞神楽は、二〇一一年十二月に総合文化化学科主催の「フィールドワーク祭り」で披露した。

6. 『いざなぎ流の宇宙―神と人のものがたり―』(高知県立歴史民俗資料館、一九九七年)、斎藤英喜氏『いざなぎ流祭文と儀礼』(法藏館、二〇〇二年)を参考にした。

7. この祭文は、斎藤氏が一九八七年に物部村に研究調査に行った際に、当時現役で活動されていた太夫、中尾計佐清

氏が実際に扱っていたものである。祭文の全文は吉村淑甫監修、斎藤英喜・梅野光興編『いざなぎ流祭文帳』（高知県立歴史民俗資料館、一九九七年）に収録されている。

8. 祭文の分類は斎藤英喜氏の前掲書に依る。

9. 小松和彦氏「いざなぎの祭文」と「山の神の祭文」——いざなぎ流祭文の背景と考察——（五来重編『山岳宗教史研究叢書15 修験道の美術・芸能・文学Ⅱ』名著出版、一九八一年）より。

10. 小松和彦氏、前掲書（9）

11. 後述する宮崎県椎葉村尾前での聞き取りで、尾前義則氏から「山の中では絶対に「猿」と言わない」と伺った。何か関わりがあるだろうか。

12. 小松和彦氏、前掲書（9）

13. 小松キクジ太夫所蔵「神道諸法伝祭文集」（『土佐民俗共同採集報告1（物部村土居番民俗採訪）』土佐民俗学会、一九六九年）。本稿は斎藤氏による原本からの引用と見解にもとづく。

14. 小松和彦氏、前掲書（9）

15. 見学した当時この儀礼を執行できるのは尾前義則さんと言ふ男性のみで、こちらの方も高齢のため近年は行っていなかったという。宮司の代わりという節目の年で、また東京から学生が見学に来るということで特別に行っていた。滅多に目にするのできない、非常に貴重な儀礼を私達は目の当たりにしたのだった。

16. 山本ひろ子研究室では、二〇〇九年度十二月に椎葉村嶽

之枝尾、二〇一〇年度十二月に同村尾前で神楽見学フィールドワークを行った。

17. 二〇一〇年フィールドワークでの見学と、昭和五十九年に尾前義則氏によって執行された儀礼を記録した永松敦氏『狩猟民俗と修験道』（白水社、一九九三年）をもとにした。

18. 永松敦氏前掲書（17）。椎葉村・梶尾つがに伝わる史料、天明七年（一七八七）『おさえまつり かけぬい 熊のひほどき』を参考に、「し、のかけぬい」作法を記している。「かけぬい」とはシシマツリと同様に猪の肉や骨といった各部位を山村の様々な神に奉る作法で、その詞章を見るとコウザキや山の神に限らず、火の神・水神・稲荷なども祀っていたことがわかる。

かけぬいの詞章中、（山の神）に関係すると思われるのは、以下の部分である。

・ 左ふたを以ハ奥山三百三十三人 中山三百三十三人 外山二百三十三人合テ九百九十九人の山の御神殿ニさしゆるがして本めいニ奉ル

・ 右ふたを以ハ登ルは山の五万八千下ルは山の五万八千は山の御神かくらの御神殿ニさしゆるかして本めいニ奉ル
・ 其外四十二の次ふしきりふしなど筋どこまつりはづしのござる所を以ハ野神山神川でハ水神ほうかいしゅじょうのかたまでさしゆるかして本めいニ奉ル、しどりの御さかなえいもの千人あしもの千人ニくわせ申て山のいめやうをあげ申そう、かれ木の枝をたき燃しなま木の枝をおりからし火のまへにしかた芝たへやミもなきようニ

まな板まなばしまなほうてうこうらぎやミもなきよう二
ひいたりやともびきひいたりやともびきとおいかけぬき
むけたまわるべし

奥山や山の奥のいおしかの
左よう二くびうちなげてじやう

ぶつするぞなむあみ く く く
三番目に挙げたのは詞章の最後の箇所だが、「成仏する
ぞ なむあみ なむあみ なむあみ」と締めくくられてい
るのも興味深い点である。

19. 永松氏の前掲書によれば、天大しようごん（天大將軍）
殿は椎葉神楽の「森」の舞においては狩猟神としての性格
を持つ。コウザキも狩猟神だとしているが、こちらは猟犬
の死霊が神格化したものである。

20. 二〇一一年九月二十二～二十六日。宮崎県諸塚村・椎葉
村にて、聞き取りを主軸に置いた自主フィールドワークを
行った。

21. 「山守」の問答中、「山の本地」の詞章の中で神主側の口
上に見られる。

「隆秀仙の山と一派、山口の本地丸四天、中山の本地丸
すげ、奥山の本地は釈迦如来」に続く以下「山口の太郎殿
三十三人、中山の次郎殿三十三人、奥山の三郎殿三十三人、
合せて九十九人の山の御神まします。」の文言である。

22. 中村元『岩波仏教辞典』（岩波書店、一九八九年）より。

23. 嶽之枝尾地区へは、二〇一一年に現地を訪ね、嶽之枝尾
神楽や宿借りの次第について、綾部正哉氏にお話を伺った。

また、奥飯石神楽に関しては、同じく二〇一一年のフィー
ルドワークで、吉田町川尻地区に伝わる、「木の下神楽」
を実際に拝見する機会に恵まれ、そこで勝部良知氏の舞う
「柴佐の舞―悪切」を見ることが出来た。本節では、同じ
奥飯石神楽の他地区の映像を参考に考察をしたが、木の下
神楽での体験が考察する際のベースとなっていることは間
違いない。

24. 出雲・たたらフィールドワーク

二〇一一年十一月二日～七日、「フィールドワークの実
践2」・「宗教思想論2」（山本ひろ子教授）。島根県安来市
から山口県に近い石見銀山まで広域に渡り、製鉄とそこに
関わった人々の歴史を学んだ。吉田町「菅谷たたら」を見
学、同日夜には「木の下神楽」を見学させていただいた。
近年は後継者不足などの理由により行われていなかったの
だが、山本ひろ子先生と現地との繋がりによって、今回い
くつかの次第を見学させていただくことができた。以下が
その際行っていたいただいた次第である。

・「手草たぐさの舞」

・「山之神祭」（柴佐の舞―悪切）

・「八戸やと」

25. 嶽之枝尾神楽 次第表

一、宮神楽	一八、内鬼神
二、大神神楽	一九、戸取り
三、注連立	二〇、芝引き

四、注連の唱行	二一、オキエ
五、宿借り	二二、牛頭天皇
六、注連簪	二三、伊勢神楽
七、注連引鬼神	二四、岩戸舞
八、御高屋ほめ	二五、神粹「かんしい」
九、ありなが	二六、綱問答
一〇、一神楽	二七、年の神
一一、願成就の大神神楽	二八、火の神
一二、平手式三番	二九、入増
一三、紋神楽	三〇、綱切
一四、稻荷神楽	三一、綱主
一五、芝問答	三二、御笠舞
一六、大神神楽	三三、神送り
一七、星指	

(渡辺伸夫・渡辺良正『椎葉神楽』)

26. 二〇一一年に御話をうかがわせていただいた綾部氏によると、「宿借り」は神楽の始まる前に行われる次第であるとのことであった。ここからも「宿借り」が神楽に先立って行われる、他の次第とは一線を画した次第であることが伺える。

27. 「宿借り」の次第は具体的には次のような流れで行われる。以下、山本ひろ子研究室の映像資料を繰り返し眺めながら記録した。

〔登場〕

嶽之枝尾にある「平田神社」が神楽の舞台である。神社拜殿の引き戸は外されている。中では太鼓に神主が腰をかけ、外を向いて座っている。

少しして、神楽宿から見て左手の闇の中から、ゆっくりと笠を被った人が歩いて来る。時折立ち止まって周囲を見回すなど、何かを探し歩いている様子だ。古びた笠をかぶり、上下黒い衣に脚絆を巻いた旅装の御山人は、背中に大きなつづらと蓑様の藁を背負っている。旅人の姿である。中心に黒丸を描いた半紙を挟んだ細い竹の杖を突き、宿の前の庭を一度通り過ぎたかと思うと、また見物衆の間からゆらりと現れ、今度は神楽宿に向かって歩み寄る。そして軒下に敷かれた半畳ほどの大きさの莫藁の上に立つと、両手で杖を体の前に持ち直し、宿の中で太鼓に腰かけている宿の主人(神主)に向かって次のように願ひ出る。

〔問答〕

旅人「御宿申し候。」

あまり抑揚は強くないが、半分歌っているような独特の節回しだ。すると主人役の神主は

主人「御宿なるまじく候。」

と旅人の宿乞いを断る。こちらも同じような節回しだ。旅人は相手の言葉にはその度に一礼を返してから自分の口上を述べる。以下、この悠揚とした調子で問答が続く。旅人「ほつと承り候。御宿なるまじくとは承り候えども、

なおにも御宿申し候。」

主人「ほっと承り候。前から見ればおさえたるが如くして、後ろから見ればふりくるいたるが如くして、赤ひげに猿まなこの御宿とのたのもしき、御宿なるまじく候。」

主人に姿の異様さを挙げられてなおも宿を断られた御山人は、これまで山々を巡り歩いてきたこと、「歌妻のいわれ」を知っていることを述べて、自分が何者であるかを語り出す。

さて、旅人からの言葉を受けて主人は、本当に旅をしてきた「御山人」ならば、この歌妻のいわれも知っているはずだと、更に問う。こうして互いに「歌妻のいわれ」を問答し、その後「四季」の歌の掛け合いになる。この間旅人は軒下で杖を突いて立ったまま、主人も太鼓に腰掛けたままだ。

〔和解と退場〕

ひとしきり問答をした後和解した両者は、次の歌を唱和しながら軒下と座敷の間で円を描くように巡り歩く。

二人「ねいづる山と入る山と、山とこたへし山人の、山

とさかゆる弥勒の世にこそめんぐりようた」

両者が出会ったことの喜びを表現した歌に合わせ、右回りに弧を描いて互いの位置を入れ替え、さらに逆向きに辿って元の位置に戻る。軒下に戻った御山人は宿の方へ進み出で、仲裁役の者に酒を注いでもらおう。それを一

礼して飲み干すと、また一礼し、軒下へと後退する。そして向きを変えて来たとき同様若干俯き気味に歩き出し、見物衆の脇を抜けて闇の中へと消えていく。

28. 「七座神事次第表」

- ① 塩清め
- ② 幣の舞
- ③ 八乙女
- ④ 榊の舞
- ⑤ 手草の舞
- ⑥ 剣の舞
- ⑦ 柴佐の舞―悪切

『フォークロア一九九四年二月号』所収の山本ひろ子先生のリレー連載、「花祭の鬼第一回・二回」を参考にした。29. 「柴佐の舞―悪切」については、木の下神楽見学時のメモなども参考にしながら、山本ひろ子研究室の映像資料を基にして描写した。次第の具体的な流れは以下の様なものである。

〔神の登場〕

神楽の舞台となる神殿（こうどの）に両手に榊を持った「天児屋根命」が登場する。腕を左右に広げたり、背中で交差させたりしながら、軽やかに神殿の中を舞う。一しきり舞った後、神殿への出入口（向かって左奥）を見据えて右手前の隅に着座する。すると奏楽の音が変わ

り、榊の行方を追って来た「大山祇命」の登場である。赤い鬼面と灰白色のシャグマ、右手には大きな白い幣を持ってゐる。非常にゆつくりと、体を小刻みに震えさせる不自然な動きは、壊れたからくり人形のような。こちらから見て左側の半分ほどまで出てくると、きらびやかな衣の左袖を持ち上げ、自身の顔を半分隠す。そしてその状態のまま大きな幣を差出し、何かを探るかのよう自身の前を往復させる。一人目の後に、ほとんど時間をおかずにもう一体同じ鬼面にシャグマの「大山祇命」が登場する。こちらは袖で顔を覆うことはせず、左手は腰にあてたままだ。二体の鬼は幣を使って神殿の中を探りながらゆつくりと巡り歩く。やがて中央に二人で膝立ちになると、榊盗人を見つけた驚きの表現なのか一度左手奥に後退し、神殿の隅で静かに様子をうかがっていた天児屋根命に幣を向け、榊を盗って行ったのはどういうわけか聞いたです（写真4）。

「榊の争奪―問答」

大山祇命「取り返さばやと思うなり」

「そんなそんな 柴探そんな」

二体の鬼の言葉を合図に、楽の音がより速く、リズムカルなものへ変化する。軽快でどこかひょうきんな笛・太鼓に合わせ、榊の争奪戦が始まる。からかうように神殿の中を舞い遊ぶ天児屋根命と、翻弄される二体の鬼の様子は、これが「神事舞」だとは思えない程に滑稽だ。

時折後ろ手に組んで、スキップでもするかのように神殿の中を駆け巡る。手を使わず足だけで舞うことに興味を覚えたが、所作の意味はわからない。赤いたすきを用いたりしながらしばらく三者は鬼ごっこを続けるが、ついに飄々と逃げ回っていた天児屋根命も捕まってしまう。ここで二体の鬼の内一体は退場し、残った一体と天児屋根命の間で名乗りが行われる。大山祇命は片手に黄金の扇を掲げているが、もう一方の手は榊をしっかりと握っている。

天児屋根命「我が持ち帰らむとする真榊を奪い取りし神は何神なるぞ」

大山祇命「音高くもよする白波よな。我はこの山を守る大山祇命なり。我が許しなくしては、一草一本も取るべからず。そも御身は、何神にてましますぞや」

天児屋根命「我は天児屋根命なり。御身山の神にましますば、我をとがめ給うも道理なり。今天照大神は天岩戸に閉じ籠らせ給いて、天の下蒼生のなげきは巷に満てり。よって思兼命のはからいにより、天香具山の御榊を手折り来て岩戸の前に飾りて神楽のわざを奏で、よって大御神の御心を慰め奉り岩戸を開かんとす。そのための真榊なれば、願わくはこれを我に賜り給え」

大山祇命「あら尊きの大御神よな。また、さるやんご

となき御祭のことにしあれば、いかでこの真
神を惜しみ申さん。謹みてこれを捧げまつら
ん」

天照大神のための神楽に使うことを知った大山祇命
は、櫛を許し与える。そして代わりに荒ぶる神々を鎮め
たまえと、「十握の剣」を天兒屋根命から賜る。この後、
一度両者が退場する。



写真4 山之神祭（柴佐の舞）。（2011年 木の下神楽見学にて）

「悪切」 見得

鬼面や重い衣装を脱ぎかなり軽装になった大山祇命
が、黒い鞘に収められた刀を持って神殿に再び現れる。

楽の音はゆっくりとしたものに変化し、場の空気は先程
までの滑稽なものから一変する。正面に向かって正座し
た大山祇命は、上段・中段と左右に刀を動かし、さらに
下段を一閃する。このときの大山祇命の、刀身を見つめ
るまなざしが非常に印象的だ。「刀」の持つ力を暗示さ
せる一方、「見る」ことに何か特別な意味を感じさせる。
この「見る」という仕草は他にも見られる。例えば最初
に鬼面姿で登場した際、大山祇命は下から上へゆっくり
と首を巡らせて「威嚇」の所作をする。

さらに舞が進んでいくと、刀を左手に持ち替え、右手
の人差し指と中指の二指を揃えて空を差し、その指先を
見つめながら前方へ歩み出る所作を行う。つまり、刀で
なくても「見る」のだ。舞の所作として美しさや真剣さ
を引き出すため（或いは感情を込めるため？）に視線を
効果的に使っているだけなのかもしれないが、何らかの
意味を見出したくなるまなざしである。

剣舞

時折刀身をぐるりと回しつつ、比較的静かな動きをし
ていた大山祇命だが、しばらくして奏樂がさらに速くり
ズミカルに変調すると、一転して「動」の所作になる。
刀自体の重みを利用して、右手、左手と持ち替えながら
「十握の剣」をより一層速く、力強く回転させる。そし
て東西南北中央と、五方でそれを繰り返し返すのだ。神殿の
中で目にもとまらぬ速さで刀を操る「芸能」に圧倒され
る。

足運び

巧みな剣捌きで観衆を魅了し、やがて舞は終息に向かう。この時の大山祇命の足運びが実に特徴的だ。右手前側から対角線の出入口へと歩みを進める際、左右の足を交差させるような不自然な足の運び方をする。右足を一步踏み出し、次の左足はその右足に交差するように、一直線上に踏み出す。続いて右足も同様に交差させ、その後同様の足捌きで神殿の隅まで行き、退場となる。

【参考文献】

小松和彦

「いざなぎの祭文」と「山の神の祭文」——いざなぎ流祭文の背景と考察——（五来重編『山岳宗教史研究叢書15 修験道の美術・芸能・文学Ⅱ』名著出版、一九八一年）

斎藤英喜

『いざなぎ流祭文と儀礼』（宝蔵館、二〇〇二年）

高知県立歴史民俗資料館編集・発行

『いざなぎ流の宇宙—神と人のものがたり—』（一九九八年）

椎葉民俗芸能博物館編集・発行

『椎葉民俗芸能博物館』

前田一洋

「イノシシとシカの猟法」（『自然と文化60—九州脊梁山地・山人の秘儀』日本ナショナルトラスト、一九九九年）

江口司

「モリを祀る人々」（同右）

千葉徳爾

『狩猟伝承』（法政大学出版局、一九七五年）

『女房と山の神』（堺屋図書、一九八三年）

永松敦

『狩猟民俗と修験道』（白水社、一九九三年）

『狩猟民俗研究』（宝蔵館、二〇〇五年）

南方熊楠

「山神「オコゼ」魚を好むといふ事」（『南方随筆（復刻）』沖津舎、一九九二年）

山口保明

『宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承』（鉾出版社、二〇〇〇年）

柳田國男

『遠野物語』（『定本柳田國男集四』筑摩書房、一九六三年）

『山神とヲコゼ』（同右）

「一目小僧その他」（『定本柳田國男集五』筑摩書房、一九六二年）

一九六二年）

「毛坊主考」（『定本柳田國男集九』筑摩書房、一九六二年）

一九六二年）

「塚と森の話」（『定本柳田國男集十二』筑摩書房、一九六三年）

一九六三年）

「後狩詞記」（『定本柳田國男集二十七』筑摩書房、一九六四年）

一九六四年）

「みさき神考」（『定本柳田國男集三十』筑摩書房、一九六四年）

一九六四年）

山本ひろ子

「囚われの聖童たち」（『いくつもの日本V 排除の時空を越えて』岩波書店、二〇〇三年）

「花祭の鬼」第一回 榊鬼と柴取鬼（『フォークロア』

一号』本阿弥書店、一九九四年）

「花祭の鬼」第二回柴を追う鬼（同右二号、一九九四年）

「花祭の形態学―大神楽の視界から」（『神語り研究四』春秋社、一九九四年）

「花祭の鬼」第三回山と榊と鬼と―榊問答をめぐって（『フォークロア三号』本阿弥書店、一九九四年）

渡辺伸夫
「椎葉神楽概観」写真・渡辺良正／文・渡辺伸夫
（『椎葉神楽―山の民の祈りと舞い』平河出版社、一九九六年）

渡辺伸夫
「神楽の秘曲（山守）」（『別冊太陽 祭礼』編・山本ひろ子／写真・酒寄進一 平凡社、二〇〇六年）

高橋知将
「研究ノートⅡ 狩猟儀礼と「山の神」たち―後狩詞記」と椎葉神楽見学を通して―（『和光大学学生研究助成金論文集18―わたしたちの論文2010―』）

中田雪野
「椎葉神楽見聞記」（総合文化学科フィールドワーク報告集二〇一〇『渦流』）

参考HP
椎葉村ホームページ
<http://www.vill.shibamizaki.jp/>

謝辞

諸塚村では戸下神楽保存会の皆様、椎葉村のフィールドワークでは尾前義則氏・尾前秀久氏・民宿おまえの方々々に大変お世話になった。また、木の下神楽見学においては吉田町川尻地区の神楽保存会の皆様に交流会

を開催していただいた。貴重なお話を聞かせていただいたこと、調査に快くご協力いただいたことにあらためて感謝いたします。

指導教員の山本ひろ子先生には、研究方法や論文の構成など、随時的確にご指導いただいた。また、テーマ・自主勉強会・執筆等に際し、山本ひろ子研究室の本田晶子氏に全面的な協力と指導を仰いだ。末筆ながら、お礼を申し上げます。

指導教員のコメント

山本ひろ子（表現学部）

『遠野物語』に出て来る「山の神」が、遠く宮崎県は椎葉神楽の「宿借り」に登場する「山人」の姿と似ているようだ――。

この素朴な「発見」を確かめるべく、中田は実際に九州の山地に足を運び、地元の方の話を聞く一方、関係する文献を読み、学習を積み重ねてきた。本研究ノートには、手探りながらも多角的に「山の神」へ迫ろうとする真摯な取り組みと、そこから見えてきたいくつかの視点が窺える。

「山の神」は、とりわけ民俗学にとって大きなテーマである。柳田國男をはじめ、多くの研究者たちが山の神をめぐる考察し、枚挙に暇がないほどの研究成果を残してきたが、そうした研究群の「山」に迷い込まぬよう、中田は、祭文における山の神、儀礼の場における山の神、神楽の場に登場する山の神という三つの切り口を設定した。そこから、「山の神」信仰とその担い手、「山の神」の伝承とその管理者、修法者と山の神との儀礼の場における関わり、狩猟の作法と呪術性などのテーマが立ち上がって来る。同時に、「山の神」像を掴むには一筋縄ではゆかないことも明らかになってきた。

中田が足を運んだフィールドは、民間信仰いざなぎ流の伝承

地（高知県香美市物部町）、椎葉神楽の伝承地（宮崎県東臼杵郡椎葉村）、諸塚神楽の伝承地（同諸塚村）をはじめ、諏訪や雲南市吉田町など、いずれも人々の生活と山とが密接にかかわりあっている地である。そこでの聞き取りの一部を、附録というかたちで文末で紹介したのは、地道な取り組みとして評価されてよい。

山から多くの恵みを受け、一方に畏怖の対象でもあった「山の神」と人々は、どのように折り合いをつけ、関わりあってきたのか――。中田の素朴なおどろきは、日本文化の深いところに根ざしている。フィールド調査と資料の読みに追われ、新しい知見や独自の考察を提示するには、まだまだ時間も力量も必要なため、今回は「研究ノート」という形式となった。

なお最後に、昨年度の研究助成金論文「研究ノートⅡ狩猟儀礼と「山の神」たち―『後狩詞記』と椎葉神楽見学を通して」を発表した高橋知将が、中田の共同研究者として、この間伴走してきたことも記しておきたい。

和光大学学生研究助成金規程

- 第1条 この規程は、学則第68条に基づき、和光大学学生研究助成金（以下「助成金」という）制度について定めるものである。
- 第2条 助成金は本学在学生のうち、次に定める者に対して給付し、学術研究および制作等を奨励することを目的とする。
学術的研究および制作等について顕著な成果を挙げつつあると認められる個人またはグループ。
- 第3条 助成金は、この目的のための学内外の寄付金ならびに本学の拠出金をもって充てるものとする。
- 第4条 助成金の支給額は、1件につき年額5万円以下であることを原則とする。ただし、委員会が必要と認め学長がこれを承認した場合には、増額することができる。助成金の給付を受ける者を和光大学学生研究助成金受給者（以下「受給者」という）と呼ぶ。
- 第5条 受給希望者の募集は、毎年11月に公示し、翌年の5月1日から5月31日の間に申請を受付ける。
- 第6条 受給者の採用は、本学教員の推薦による出願者のうちから、その所属する学科の意見を求めた上で別に定める和光大学学生研究助成金委員会（以下「委員会」という）が選考し、学長がこれを決定する。
- 第7条 助成金は、給付決定年度の7月に、管財課において交付する。
- 第8条 受給者は、委員会が定める研究報告会において研究成果を発表するものとする。
- 第9条 受給者は、研究報告書ならびに助成金の用途についての報告書を給付年度の1月末日までに学長に提出するものとする。
- 第10条 助成金の事務は学生生活課の所掌とし、その事務取扱いは別に定める学生研究助成金事務取扱要項によるものとする。
- 第11条 この規程は改正を必要とする場合は、教授会の議決を経なければならない。

付 則
この規程は昭和49年9月1日から施行する。

付 則
この規程は昭和57年4月1日から施行する。

付 則
この規程は昭和63年4月1日から施行する。

付 則
この規程は平成19年4月1日から施行する。

付 則
この規程は平成20年4月1日から施行する。

和光大学学生研究助成金事務取扱要項

1. (目的)

和光大学学生研究助成金規程（以下「規程」という。またこの要項の用語の略称は規程に準じる。）第10条に基づき助成金の事務取扱要項を次のとおり定める。

2. (所管)

助成金ならびに委員会に関する事務は、学生生活課の所掌とする。

3. (募集)

助成金の受給希望者の募集は、毎年11月に公示し、翌年の5月1日から5月31日の間に申請を受付ける。

4. (申請書類)

- (1) 和光大学学生研究助成金交付申請書。
- (2) それまでの研究に基づく、論文の草稿、ノートの写真、調査の結果、資料集等。
- (3) 中間報告書。(研究・制作にあたっての問題意識、研究・制作の過程を400字詰め原稿用紙20枚以上にまとめたもの。)
- (4) 申請時まで必要とした経費についての資料（可能であれば領収書を添付する）と、申請時以後に必要な経費の概算書。
- (5) その他委員会が必要と認めるもの。

5. (選考決定)

- (1) 委員会は、書類審査、面接、申請者の所属する学科の意見を総合して、受給候補者を選考し、学長に具申する。
- (2) 学長は、受付締切後1ヶ月以内に受給者ならびに給付額を決定し、提示によって発表する。

6. (助成金の交付)

助成金は、受給者決定の翌月以降、管財課にて交付する。

7. (研究報告、公表)

- (1) 受給者にたいしては、研究報告会での研究成果の発表を求める。
- (2) 受給者にたいしては、研究成果（別に定める「学生研究助成金に関する報告書」「研究についてのレジュメ」と「研究報告書本文」）、助成金の用途について、給付年度の1月末日までに報告を求める。研究報告書本文は、独自のものとし、卒業論文、卒業制作ならびに研究成果が掲載された雑誌等の写しの提出によってこれに代えることはできない。
- (3) 受給者が提出した研究論文は論文集にまとめ、本学図書館に保存する。

付 則

この事務取扱要項は昭和63年4月1日から施行する。

付 則

この事務取扱要項は平成19年4月1日から施行する。

付 則

この事務取扱要項は平成21年4月1日から施行する。

和光大学学生研究助成金委員会規程

1. 本学に和光大学学生研究助成金委員会（以下委員会という）を置く。
2. 委員会は、次の各項のことを審議する。
 - (1) 助成金の運営に関すること。
 - (2) 助成金受給者選考に関すること。
 - (3) 和光大学学生研究助成金規程に関すること。
3. 委員会の委員は、原則として各学部教授会から2名選出し、学長が任命する。委員の任期は2年とする。ただし再任をさまたげない。
4. 委員会に委員長および副委員長を置く。委員長および副委員長は委員の互選によって選出される。
5. 委員会は下記の場合に開催される。
 - (1) 助成金運営に関する審議をするとき
 - (2) 受給者を選考するとき
 - (3) 報告書を検討するとき
 - (4) 委員長が必要と認めたとき

付 則

この規程は昭和49年9月1日から施行する。

この規程は昭和56年11月1日から施行する。

この規程は平成11年4月1日から施行する。

2010年度
学生研究助成金委員会

委員長 西岡 久允（経営メディア学科）
副委員長 米田 幸弘（現代社会学科）
委員 野中 浩一（身体環境共生学科）
上野 俊哉（総合文化学科）
佐藤 泰夫（芸術学科）
長谷川義正（経済学科）

事務担当 学長事務部企画室学術振興係

和光同塵会から、毎年度学生研究助成金活動に対するご寄付を頂戴しております。このご寄付は、今年度も助成金の一部として活用させていただきました。この紙面をお借りして和光同塵会に厚く御礼申し上げます。

和光大学 学生研究助成金論文集 19

わたしたちの論文 2011

発行日 2012年3月19日
発行所 和光大学 学生研究助成金委員会
〒195-8585 東京都町田市金井町2160
☎ (044) 989-7497

印刷所 株式会社サン・メールサービス
〒195-0072 東京都町田市金井4丁目1-16
☎ (042) 735-3126 (代)

 和光大学